

---

# タバサの使い魔

蒼月颯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

タバサの使い魔

### 【Nコード】

N0235R

### 【作者名】

蒼月颯

### 【あらすじ】

戦争が終わり、これから始まる新しい生活に希望半分不安半分の気持ちでいたある日本軍兵士。

だが、天はそんな彼、そして彼らに新たな試練を投げかける。

異世界、ハルケギニアに使い魔として召喚されてしまった彼の運命とは

## プロローグ 突然（前書き）

どうも、色々なゼロ使軍事系二次小説に触発されて書いた、作者始  
めてのゼロの使い魔の軍事系二次創作です。

途中、ご都合主義等入ると思いますがそれでも宜しければ、稚拙な  
がら書きましたのでどうぞご覧下さい。

## プロローグ 突然

両脇を青々とした森に囲まれた、未舗装の砂利道を十数台の地味な塗装をした幌付きボンネットトラックが駆けて行く。一定の間隔で何台も何台も連なるそれらは、まるで蟻の行列を思わせた。

だが土煙を上げ、エンジンから発せられる重低音を辺りに響かせながら彼らの向かう先は決して明るい物では無い。

彼らを彼らたらしめた牙。

それが異国からやって来た更に強大な存在によって折られ、更には自ら抜く事を宣言されてしまったのだから。

トラックの積み荷は彼らの抜かれてしまった牙の、ほんの一部であった。

しかし、彼らは絶望している訳では無かった。例え爪を折られ牙を抜かれようとも、長きにわたる戦いが終結しこれから新しい時代が来る。やっと平和な時代がやって来る。

そんな絶望とは対照的な希望が、彼らを包み始めていた。

全てが張り詰め殺伐としていた時代が終わり、人々が焼け野原から立ち上がるうとしていた昭和20年9月の中旬。

彼ら 大日本帝国陸軍に属していたある輜重隊は、進駐軍に牙

武器弾薬を引き渡す為、倉庫から満載した武器を輸送している途

上にあつた。

「ふぁーあ……」

トラック輸送隊の最後尾、その運転席に欠伸をしながら暢気に車を運転する一人の軍人がいた。

彼の目の前には延々と十以上も続くトラックの列。しかもその内の数台は、機動化（車輪をゴムタイヤ化させる事）されていない旧式の大砲を砲弾薬と共に牽引しているため、移動速度は通常より抑えられる事になっていた。

「ふぁーあー……」

もう一度、今度は少し長い欠伸。  
要は退屈なのである。

「折角米軍に良い燃料入れて貰ったつて言うのに……遅くて欠伸がでるぜ……」

目前、彼が運転するトラックの真ん前を走る大砲牽引用に改造されたトラック。それが牽引する大砲に彼の視線が行く。

「克式七糶半野砲か。良くこんな骨董品が良好な状態で残ってたもんだよ」

克式七糶半野砲。

それは当時プロイセンに於いて1873年に開発された75mm口径の後装填式野砲であり、その性能の優秀さから日本軍に輸入、配備されていた大砲である。『克式七糶半野砲』と言うのは、その大砲を製造したクルツプ社に因んで命名された和名だ。しかし、当時の日本軍の技術力では鋼製の砲の製造にコストが掛かった事、そして大砲国産化の気運が高まった為に輸入は少数に終わった。

勿論生産開始から70年以上が経った今では完全に旧式化し、牽引している砲はこの北の大地で本土決戦用として保管されていた物であった。

彼自身、前述の少数生産等の理由から、軍の資料写真の中でしか見た事が無かった。先程までは。

次に、彼は自らが運転するトラックの荷台へ視線を移した。

「それに海軍さんが確か一時期使ってたマルティニ・ヘンリー銃が、こんなに大量にあるとは。はは、まるで旧式兵器のオンパレードって所か？」

先程までいた陸軍の本土決戦用隠し倉庫の中味を思い出し、笑う。ついつい敵国語が口に出てしまうが、もう負けたのだ。解禁でいいだろうと彼は勝手に解釈した。

「しかし殆どの武器弾薬が良好状態のままとはな……」

整備員の話では、自慢げに来たる時に向けて骨董品を磨く気持ちで入念に整備していたとか。後は低温低湿な気候も要因したのかも知れない。でも弾薬まではわからないな。試射とかして無いんだから敗軍なのだから許され無いのは当たり前前だけど。

そこまで考えて一度区切った彼は、この任務の後の事について考え始めた。

「……………まあ道場とか焼けてるのは仕方ないわな。でも家族が皆無事なのは不幸中の幸いか」

家に帰って道場建て直したらまた扱かれるんだろうな。いくら家がやってる槍術の師範代だからって、兄さんや親父には敵わないし。あ、その前に大学に復学しないと。後3年もあるし。

などと彼は全ての任務が終わり、除隊して家へ帰った後の事等を考えてため息を吐いた。今は一応だが弾薬輸送という任務中であり、稀少なトラック運転手である自分にはまだまだ仕事が残っている事に気がついたからだった。

相変わらずの速度で走り続けるトラックの一団。未だ森林地帯は抜けず、代わり映えの無い景色に彼は退屈も退屈だった。話相手でも隣にいればいいのだが、生憎車内には一人。砲を乗せてる車両以外は人手不足で半数位はそんな感じである。

だが、意識が一瞬脇の森へと向いた直後、信じ難い事が目の前で起こった。

「なっ、鏡！？　くそっ！」

前方数m先に突如前触れも無く現れた鏡。その大きさは彼が乗る7  
t積みの大型六輪トラックさえ、飲み込んでしまう程の巨大さだ。

彼は勿論急ブレーキを踏んだ。更に思いきりハンドルを右に切つて  
パーキングブレーキまで入れた。

だが彼が行った全ての努力を無駄にして、彼が乗る六輪大型トラッ  
ク 陸軍名称二式大型自動貨車は、横滑りしながら鏡へと為  
す術も無く飲み込まれていった。

だが、異常はそれだけには留まら無かった。

彼が消えた直後、やはり前触れ無く発生した日食とそれを覆い隠し  
て降った強い通り雨。

それらが全て過ぎ去り、普段の秋晴れへと戻った時。

そこにはただ木達が奏でる静かで優しい音のみが場を支配していた。

あれだけ周りに響かせていたエンジンの重低音も、土煙が舞う埃っ  
ぽい音も、ぎしぎしとスプリングにより車体が軋む音も、もう何一  
つ聴こえ無かった。

そう、それはまるで雨が全て洗い流してしまったかのように。



後日近辺を捜査した進駐軍によれば、ただそこには複数のタイヤ痕と、それらが突然に消えてしまったかのような跡だけが残っていたという。

## ブログ 突然（後書き）

御意見御感想、出してもらいたい兵器等ありましたら遠慮せずにごうぞ。

## 第1話 召喚（前書き）

第1話です。あと小説の題名が他の方と被ってしまっていたので、  
勝手ながら小説タイトルを変更させて頂きました。申し訳ありません  
< ( ) >

## 第1話 召喚

「……………」

彼が目を覚ますと、仰向けに倒れた彼の顔を見知らぬ少女が覗き込んでいた。まだ意識が朦朧としている。

「……………」

見知らぬ少女と目が合った。

赤い縁の眼鏡を掛け、その奥に広がる澄んだ海のような青い瞳。更に視野を広げれば、触れれば割れてしまうような白い肌と、空色の髪がその視界に入った。

顔を一目見て彼は可愛いと思った。だが、その表情は何処か浮かばれない色だった。

傍目で見れば無表情にしか見えないだろう。しかし間近で見ている彼からは、その表情に隠された不安や困惑といったマイナスな部分をしっかりと感じ取っていた。

何故彼女はそんな表情をしている？ そしてここは何処だ？

起き上がり、あぐらをかいた状態で辺りを見回してみる。

彼の視線に映るは、不思議な……だが統一された服装の少年少女達。何処かの制服だろうか？

皆一様にこちらを怪訝と猜疑が混ざった瞳で見つめている。

更には頭がまるつきり寂しくなってしまった、黒いローブに身を包んだ教師らしき中年男性も、今起こった出来事に理解が追い付いて

いないようだ。

彼等が居る場所はただっ広い草原と、遠くに見える中世の城郭の様な白い建築物。短い大学時代に資料で見た事があった。

嫌な沈黙が場を支配する。

彼も訳が分からないと言う風に呆けていた。

「あの雪風のタバサが人間と変な馬車を召喚したぞ!？」

暫くして見ていた少年の一人が叫んだ事により沈黙が破られた。その途端、堰を切ったように他の少年少女達が口々に勝手な事を言い始める。

「でも何あの馬車？ 見た事無いわ」

「人間も変な服着てるぞ？」

変な馬車？ 彼は自らの後ろを振り向くと、そこには自分が乗ってきた二式大型自動貨車がそのままの状態で鎮座していた。自分と一緒にこれまで戦場を駆けて来た愛車の無事な姿を見て、少し安堵する。

だがそれもつかの間。

「どうせ平民だろ。おいタバサ！ 何で成績優秀なのに平民なんか連れて来るんだよ！」

別の少年がそう言うと、辺りは途端に笑いの渦に包まれる。隣にいる海色の瞳を持った少女はタバサと言うらしい。

彼は笑われてとてもいい気はしなかったが、彼の傍らに座り込む少

女　タバサはまるで意に介さず立ち上がると、未だ状況を把握しようとしてフリーズしている中年男性を呼び付けた。

「ミスタ・コルベール。……………これはどうしたら？」

「えっ……………あつ、ああ！　少し待っていてくれミス・タバサ」

固まっていた所へ突然声を掛けられ、コルベールと呼ばれた男性は慌てて確認のために男と後ろの大きな物体に近寄る。どうやら彼がこの場を監督する立場にあるようだ。

平民と思われる人間はともかく、後ろにある大きな得体の知れない物体は多分馬車の一種であろう。荷台の上が幌で覆われている事、そして車輪が付いている事からコルベールはそう判断した。『デイトイクト・マジック』を使うまでも無くこれは生物では無い。コルベールはすぐに決断を下した。

「ふむ……………ミス・タバサ。君はそこに座っている彼と契約をしない。人間を使い魔にしたという前例は無いが、こうなってしまうのは仕方がない」

タバサはコクリと小さく頷いた。

一方当の座り込んでいる男は、自らが承諾しない内に事が進んでいる事。そして何かなんだか、ここが何処なのか、明らかに日本人では無い彼等が何なのかわからず困惑の極みにあった。

いつそトラックで逃げてしまおうか？

混乱の中で一つの答えを導き出したが、それは建設的では無い。得体の知れない場所から逃亡したって、果たしてここが日本なのかもわからない所で……いや、多分日本では無いのだろう。

あんな城20年生きてきて初めて見たし、娯楽施設だとしてもあんなに白く輝くような壁面を持つ西洋式の建築物を、政府が放っておく筈がない。従って、日本ではないこの場所から何処に逃げていいのかもわからない。

よしんば逃げれたとしても、燃料が切れればそれで終わりである。

じゃあ、ここは何処だ？ あいつらは何なんだ？

まさか進駐軍の罠か？ 俺達日本人を舐めやがってあいつら……。

最早訳が分からず、ぶつける先も無い怒りがふつつつと込み上げて来た。

しかしそうだとしてもおかしい。進駐軍の罠だとしても、敗軍を更に罠に掛けるなど馬鹿げているにも程がある。戯れだとしてもあの状況下から見えない鏡を設置する等不可能だ。

例えば米軍が優れた科学技術を持っていようとも、あの鏡は再現出来ない。

あそこに突然現れた鏡は……科学では説明できない。

「……………ははっ」

彼は自嘲気味に笑った。

気が動転している中、そこまで考えられた自分を褒めたくなくなった。しかし結論は何も分からないままである。

ソ連軍が迫る中を撤退した時は、彼はその持ち前の楽観主義と前向きな気持ち、後は何としても生き残るという気合いだけで生き残った。

しかしいきなりこんな理解不能な状況に追い込まれては、もはやダメかもわからんね。そう彼は思い始めていた。

しかし、自決する気はさらさら起きなかった。

訳が分からないのだったら、これから分かるように理解すればいい。幸いこの少年少女達は笑いこそすれ、殺意は感じられ無い。時間はまだまだたっぷり残されている。彼の楽観的　　言うなればポジティブさは、ここに来てても健在であった。

そこでふと、影が射した。顔をあげると、目の前に先程自分を覗き込んでいた青い髪の少女が立っていた。タバサだった。相変わらずの無表情である。

タバサは彼の前に座り込む。何をされるのかと身構えたが……

「……………ごめんなさい」

意外にも、彼女の小さな口から出た言葉は謝罪の言葉だった。

「……………へ？」

完全に虚を突かれた彼を他所に、タバサはぼそぼそと何事かを呟く。

そして、躊躇無く彼の唇と自分の唇を合わせた。

「んむっ!?!?」



「んっ……………」

驚きで目を見開いてタバサを見る。彼女は目をつむり、その表情は少しだけ恥ずかしげに見えた。

タバサが口を離し、表情の無い人形の様な顔に戻る。

同時に、彼の左腕に激痛が走った。

「ぐっ、うあああ！？」

「我慢して。ルーンが刻まれているだけだから直ぐに治まる」

あくまで冷静に言い放つタバサ。確かに、激痛は殆ど数瞬で嘘のようにならなくなった。

「っ……………あんた達は何者だ？　俺の身体に何が起こったんだ！」

怒声をあげる。いきなり痛い目に合わされて怒らない奴はそうそういない。そんな彼にタバサは唇の前に人差し指を立てた。

「……………静かに。事情は全て後で離す。今は……………静かにして」

「……………わかったよ」

周りに聴こえないような声量で言ったタバサに彼も同じ声量で返した。今事を荒立てる訳にはいかない。

タバサは立ち上がり、コルベールを呼んだ。

「ミスタ・コルベール。『コントラクト・サーヴァント』終了しました」

「おお、そうかそうか。ご苦労だったねミス・タバサ。どれどれ…」

コルベールはスケッチを録ろうと彼に近付き、ルーンを捜す。だが、ルーンがあるはずの左腕には何も無かった。

「……………ん？」

いや、何も無いわけではない。良く見ればつつすらとルーンのような文字が刻まれている。だがコルベールは薄すぎてスケッチを録る事が出来なかった。

「……………もういいですか？」

自らの腕をまじまじと覗き込むコルベールに声を掛ける。

「ああ、ごめん。もういいよ。ふむ……………かなり薄いですが確かに儀式は成功したようだね」

実際は人間を召喚する事も、薄すぎるルーンが刻まれる事も前例が無いのだが、時間が圧しているため後に回す事とした。

コルベールは立ち上がり、次の生徒の名前を呼んだ。未だざわざわとしながらも、呼ばれた生徒が進み出て呪文を唱え始める。

「こっちにきて」

邪魔にならないようにタバサに連れられ、彼は生徒達の輪の外へ出た。適当な所に彼女が座り込む。そして自らの隣の地面を叩いた。座れと言う事か？

その通りにすると、タバサがこちらを見てきた。思わずぐつと来てしまった。

「タバサ」

「へ？」

「私の名前。貴方は？」

「ああ、まだ名乗って無かったっけ。俺は本多勇一<sup>ほんだ ゆういち</sup>。陸軍少尉だ」

「ホンダユウイチ？」

タバサは首を傾げた。何がおかしいと言うのだろう。勇一は考えて一つの答えを出した。

「ああ、勇一が名前だ。そう呼んでくれ」

タバサはコクリと頷く。

それから彼女は他の生徒が召喚している時間を使い、勇一にこうなつた経緯の説明を始めた。

ここがトリステインという国の魔法学院である事。

そこで行われた春の使い魔召喚試験で勇一が喚ばれてしまった事。

そして使い魔が持つ能力の事等。

「……………待ってくれ。魔法？　使い魔？　そんなのまるでお伽話じゃないか」

そんな物は日本…………いや、世界の何処にだって実在しない。しかし現に科学では説明出来ない事象を、勇一は身を持って体験していた。頭ごなしには否定は出来なかった。

それを聞いたタバサは再び首を傾げた。今度は眉もひそめて。

「魔法を、知らない…………？」

「ああ、俺のいた所では魔法も、あそこにいる変な生き物達もみんな空想の世界でしか存在しないぞ」

真顔で、いたって真面目にそう言う勇一。

タバサも最初はふざけているのかと、わずかに顔をしかめてみせたが、冗談ではないと気付くと説明を始めた。

勇一が聞き、タバサが答える。

じゃあ、とタバサが舌足らずながらも聞き勇一が答える。

その問答が繰り返される内にも、勇一は違う世界にやって来てしまったようだと思った。信じたくは無いが、これまでの経緯とタバサの説明、それと極めつけのタバサが使った簡単な魔法を見せられれば信用するしかない。

タバサも確信に至るに辺り、少し表情に影が射した。幸い、勇一に

は気付かれ無かった。

「まあ、何とかやってくしかないか……」

脚を伸ばし、息をつく。

その時だった。

最後だと思われる桃色のブロンド髪の少女を中心に大爆発。辺りが煙に包まれた。

## 第1話 召喚（後書き）

御意見御感想お待ちしております。

## 第2話 雪風の綻び（前書き）

忌引等で予想より投稿が遅れてしまいました。では相変わらずの稚拙さですが、どうぞ。

## 第2話 雪風の綻び

煙が晴れると、そこには一人の少年が倒れていた。コルベールや周りの生徒達は、またもや呆気にとられたような表情で少年と少年の脇にいるミス・ヴァリエールと呼ばれた少女を見た。

勇一も立ち上がり、遠巻きにその様子を眺めていた。

「人間だと……？ タバサ、ここでは人間も使い魔として召喚される習慣でもあるのか？」

傍らに一見興味なさ気に座るタバサに問うと、首を小さくふるふると振った。

「違う。私が初めて。そしてあれが2例目」

視線の先には、倒れている少年。

「そうだったのか。偶然もあるもんなんだなあ……」

少年はどうやら気絶しているだけらしい。外見は同じ日本人の様に見えるが、何と言うか……はいからな格好をしている。戦前にあれみたいな格好をした外人を見たな、と勇一は思った。

少女はピンクの見事なブロンド髪を風に揺らしながら、タバサが彼にそうしたように少年の顔を覗き込んだ。表情はわからなかったが、

暫くして、少年が目を覚まし辺りを見回した後少女と問答を交わし始めた。時節怒鳴り声が聞こえ、周りの生徒達もゼロのルイズが平



民を連れて来た等と囃し立て始めたので、辺りは再び騒然とした。

少年と少女　ルイズと言うらしい。彼女達の激しい問答は暫くの間続いていた。どうも二人とも冷静になれないようだった。

ルイズがコルベールに対して叫ぶ。

「ミスタ・コルベール！　もう一度儀式をやり直させて下さい！」

「いや、それは認められ無いなミス・ヴァリエール」

「どうしてですか!？」

ピンク髪の少女……ルイズと言ったか。彼女は懸命にコルベールに対して抗議を続ける。タバサからこの世界に於いての貴族と平民

魔法を使える者とそうでない者の関係を聞かされていた勇一は、彼女がとても高いプライドの持ち主だと見抜いた。だが決まりは決まりである。平民を召喚した試しは無いのかも知れないが、

「確かに彼は平民かも知れない。しかしだがね、この儀式は古来からの伝統なんだ。人間が召喚された例も今まで無かったが、先程ミス・タバサが人間を召喚し契約に成功した。君だけ例外なのは認められない」

ついさつき勇一という先例が出てしまったために、この言い訳も通用しなくなった。最早八方塞がれ手段を無くしてしまったルイズは、早く儀式を続けなさい。日が暮れてしまうとのコルベールから止めの一言を浴び、諦めたように儀式を続けた。

呪文と共に彼女が自らの杖を少年の額に置き、戸惑う少年に半ば強

引に口づけを交わす……。

その光景を見た勇一は、自分の時もああったのかと少し恥ずかしくなった。ちらりとタバサの方を見やる。興味なさそうに本を読んでいた。

勇一は儀式が終わった後も何やら喚いている二人を横目に見ながら、タバサの隣に戻った。

「本読むのが好きなのか？」

勇一がそう聞くと、タバサはページをめくる手を止めて小さく頷いた。そして再び読み始める。

勇一は脇から彼女が読んでいる本を見てみた。何やら不思議な、見た事の無い文字だ。一瞬英語の様な文字も見えたが、少なくとも自分に読める代物では無い。

勇一はタバサに何を読んでいるのか聞こうとしたが、それは止めておいた。何故なら、彼女の目が完全に読書に浸っている目だったからだ。

こういう時に邪魔をするとされた本人はどう思うか。安易に想像がつく。誰にも邪魔されたくない時は、誰にだってあるのだ。

勇一は仕方なくタバサの隣に座ったまま事の成り行きを見守る事にした。

コルベールは少年に刻まれたルーンを珍しいルーンだと言い、スケッチを録っていた。だがそれよりも周りの生徒が野次を飛ばしている、召喚した方の少女が気になった。

容姿は十人が十人可愛いと言う位整っている。だが問題はそこでは無い。

「……………ゼロのルイズ？　ゼロって何の事だ？」

そう言えばタバサも雪風とか呼ばれていたな。あだ名か何かであろうか？

しきりにゼロを強調している所。そしてゼロが持つ意味　0。何も無し。

この二つから、決して良い意味で言われている訳では無い。彼女も言われた生徒に対して激しく反論していた。

一体何がゼロなんだ？

……………胸？　いや違うか。

わからないまま時間が過ぎ、スケッチを録り終わったコルベールが皆を見渡して言った。

「さて、では皆。教室に戻るぞ」

生徒達は明るく返事をして、先生と共に“飛んで”あの白い城のような建物へと帰っていった。もう何でもアリだなと勇一は思った。半分は呆れたというか、諦めもあったが。

その一方で、ルイズと少年は愚痴を言い合いながらも歩いて戻っていった。彼女は飛べないのだろうか？

いや、多分少年が飛べないから一緒に歩いているだけだろう。意外と優しいのか？

そう勇一が考えた時、彼の右腕がくいくいつと引つ張られた。引つ張っていたのは本を閉じて自らの身長よりも長い、大きな杖を持ったタバサだった。

「……………私達も帰る」

呟くようにそう言ったタバサ。

「あ、ああそうだな。……………だけど、ちょっと待ってくれ」

勇一の同意を受けさっさと踵を返したタバサに、彼の待ったの音が掛かった。

訝しげに振り向いたタバサに勇一が指し示した物は、あの不思議な形の馬車だった。

「あれは何処に停めたらいいんだ？」

「馬も無いのに？」

「は？ 馬あ？」

勇一の何言つてんだコイツ？ といった表情に、タバサは少しだけムツとした。

馬車は読んで字の如く馬が引く車である。見た目鉄で出来た幌馬車のような目の前の物体には、引く馬は何処にも見当たらない。しかも重そうだ。かなりの数の馬が無いと引つ張る事も出来ないだろう。引く馬が無い馬車は動かない。何処に停める以前の問題。それを教えてあげたのに、目の前の男は痛い子を見るような目でこちらを見

てくる。それが気に入らなかった。

そのタバサの眉が僅かに吊り上がったのを見た勇一は、何故彼女が怒っているのかわからなかった。どう見ればトラックを馬が引くのかと。

そこまで考えて、一つの結論に至った。

「タバサ……トラック、もしくは自動車って何だかわかるか？」

「トラック？ ジドウシャ？」

予想通りの答えだった。

彼女から貴族や平民、そして魔法の事等を聞かされ、もしかしてここでは科学技術がてんで発達していないのでは無いかと思ったが、その通りだった。もしかしたら積んである200丁のマルチニ・ヘンリー銃も、ここでは強力無比な兵器なのかも知れない。

ならば、先程主従関係を結んだというこの少女に、今度はこちらの世界の事を教えよう。

主従関係云々は全く実感が無かったが。

一度二式大型自動貨車をちらつと見てタバサに向き直る。

「タバサ、これは馬車じゃない。トラックって言うんだ。馬はいらない、自動で走る車なんだ」

「……………魔法？」

「いや、魔法じゃない。見た方が早いな……………」

勇一はそう言って、タバサを二式大型自動貨車の近くに誘った。この世界の言葉を借りるなら、全長8メートルはあるだろうか。とにかく大きく、そして機械的。タバサはドアに触れてみる。固かった。

「ちょっと待っていてくれ」

ぺたぺたとドアやボンネットを触るタバサをよそに、勇一は運転席に乗り込んだ。エンジンは止まっているが、キーは刺さったまま。燃料も十分。その他にも特に異常が見られる箇所は無かった。

キーを一回抜いて再び刺し込む。そしてアクセル脇にあるボタンを踏むと、エンジンは一瞬の身震いのような起動の後、快調に作動し始めた。

辺りに独特の重低音が鳴り響く。

タバサを呼ぼうと外に出ると、彼女は食い入るようにエンジンが作動した目の前の六輪トラックを見ていた。

「これ、動く？」

「勿論さ。乗ってみるか？」

すぐさま頷く。

どうやら興味を持ったようで、その瞳は静かに輝いていた。

勇一はタバサを助手席に座らせ、自分は運転席に戻る。

「マジックアイテム？　でも、こんなの見た事が無い」

「魔法なんかじゃないさ。第一、さっきも言ったように俺がいた所では魔法はお伽話。存在しないんだよ」

「じゃあ、これは？」

「科学、かな。魔法を使わなくてもこれだと1台で馬車数台分の物資が運べる。それも馬車より遙かに高速で。じゃあ動かすぞ」

勇一はブレーキを解除して半クラッチからギアを上げ、アクセルを踏み込む。満載した銃や弾薬の影響で通常よりも踏む必要があったが、それでも二式大型自動貨車は唸りを上げて発進した。その動作の一つ一つを、タバサが興味津々に見つめている。

勇一は更に速度を上げる。周りがただっ広い草原の為走り易そうだったからだ。

それでも速度は30kmに届くか届かないか位。しかし、当然馬車の倍以上の速度だ。

「凄い……馬も無しにこんな速いなんて」

「だろ？　本当は今の更に2倍位出せるけどな」

この六輪軍用トラックの設計最高速度は約70km。積載時の速度なので、空荷時はもっと出るだろう。

タバサはそれを聞いて、更に目を光らせた。流星に空を飛ぶ竜には及ばないが、地上を移動する物体としてはかなり高速な部類に入る。それも魔法の類では無い、平民でも扱える未知の技術……科学によって。タバサの興味は尽きなかった。

数十分後。ぐるぐると草原をタバサを乗せて走り回った二式大型自動貨車は、元の最初に召喚された辺りに停車した。

「よし……。こんな感じだが、どうだった？」

「面白い。こんなのは初めて」

相変わらずの仏頂面だが、タバサはこの未知の乗り物に大いに興味を持ったようだった。

タバサはドアを開けて静かに地面に降り立つと、車の後ろへと回った。勇一が後を追うと、タバサは荷台に積んである大量の箱を見つめていた。

「……………どうしたんだ？」

「何を積んでいるのか知りたい」

「女の子にはつまらない物しか積んでないぞ？」

「構わない。教えて」



タバサの静かな、それでいてじつとこちらを見つめてくる瞳の奥からひしひしと伝わる、何だかわからない迫力に勇一は息を飲む。そして躊躇した。こちらの世界の武器を、彼女に披露していいものかと。

このトラックに積み残されている銃　マルティニ・ヘンリー銃は1871年にイギリス陸軍が採用した単発式の後装ライフル銃だ。日本軍が使っていた三八式小銃や九九式小銃とは比べるべくもない、旧式もいい所の銃だが勇一の推測が正しければ、強力過ぎる兵器に成り兼ねない。

だが、タバサは諦めない。真摯な瞳でこちらの目をがっちり捉えて離さない。

暫くの間無言の睨み合い……いや、見つめ合いが続いた。

が、タバサの率直に訴えかける目に遂に勇一は折れた。

「仕方ないな………わかったよ。だけど、授業はどうするんだ？」

「どうせ今日は使い魔の見せ合いと馴れ合い。今貴方と私がやっている事と変わりはない。よって問題無し」

「（要は教室の中と同じ事してんだからいいって事か。こりゃまた素晴らしい言い訳だな）」

タバサの意外な一直線さを垣間見た勇一は何だか嬉しくなった。ここへ来て、漸く彼女の人間臭さを感じとれたような気がしたからだ。

思わず笑みが零れたのを見られたのか、タバサは首を傾げた。

「ああ何でも無い。ここじゃあの白い建物から見える。何処か周りが困われてて、人気の無い所に案内をしてくれないか？」

「……………ん」

タバサはコクリと小さく、だけど今までで一番大きく頷いた。

## 第2話 雪風の綻び（後書き）

御意見御感想今後出して欲しい兵器等、ありましたら是非お書き下さい。

### 第3話 オモイ（前書き）

相変わらずのグダグダ感120%です。

プロは凄いのう

### 第3話 オモイ

タバサの道案内により、トラックは狭い森道をゆつくりと走り抜ける。

やがて着いた場所。そこは四方が深い森に囲われた小さな池だった。

池の辺にトラックを止め、エンジンを切って勇一は地面に降り立つ。

「へえ……」

そこまで広くは無い、森の中にぽつんと佇むように存在する池。地元精通していなければ見つけられない程目立たない、穴場と言える場所だった。

「ここなら大丈夫そうだな……タバサ、よくこんな場所を知ってたな」

「……偶然見つけた」

「そうか。さて、それじゃお披露目といくかな」

勇一は短く答えるタバサにそう言って、荷台へと足を運んだ。タバサもばたばたと後を追う。

勇一は荷台の転落防止用のドアを降ろして荷台の中に乗り込む。手前には自分の背丈近くまで積まれた大量の正方形の木箱があり、その奥には1m以上の長方形の木箱がこれまたうずたかく積まれていた。

勇一はまず荷台の右端の荷物が積まれていない狭い隙間を通り、長方形の木箱の一つをしっかりと掴む。

「よっ、と！」

そして一気に持ち上げ、肩に大工の様に抱えて荷台から降りる。タバサが近寄って来た。

「それは？」

「銃だよ」

勇一はタバサの足元にそれを降ろし、蓋を開けてやった。

中に入っていたのは、2丁の銃とそれに付属する銃剣。互い違いになる様に入っていた。

勇一はおもむろに1丁を掴み、構えてみる。

「少し重いけど……まあ問題無いか」

全長124・5cmのその銃を、今度はタバサにも良く見える様にしてやる。

「こちらの銃と少し似てる……でも、何か違う」

舐める様に見回したタバサはそう呟いた。

「撃った方が早いな。弾もあるから、やってみようか？」

タバサは直ぐに頷いた。

「頼む」

「よし、ちょっと待ってる」

勇一は荷台に戻り高く積まれた弾薬箱の一つを降ろし、蓋を開ける。中には更に小箱が大量に入っていたが、おもむろにそれらの一つを手にとって戻って来た。タバサが見ている前でその封を解く。そして、中に入っている10発の弾丸を全部出し、内1発を手にとった。

「これは……弾？　でも丸くないし尖ってるし大きい……」

真摯に見つめるタバサの前で、勇一はそれを一度地面に置いて銃を手取る。

「確か……これだったな」

輸送前に興味本位で撃ち方だけ教えて貰った。勇一はわくわくとしながら、銃床下ストックに付いている金属製のレバーを垂直に引く。カチツと小さな金属音がして機関部上にある装填口が開いた。そして地面に置いた弾丸を取る。マルティニ・ヘンリー銃の弾薬である577/450口径実包（11・45mm口径）は、勇一には随分と大きく見えた。

「まるで対空機銃並みだな……」

だが特に思う所も無く装填口から銃身に押し込み、レバーを戻す。カチンツと音がして装填口が閉まった。

ちなみに、このマルティニ・ヘンリー銃は単発式のため1回の射撃

で込められる弾は1発である。

装填作業を終え立ち上がった勇一は、銃をしつかり構えて湖に向ける。

タバサはその先をじっと見つめていたが、勇一に呼ばれて彼の方に顔を向ける。

「タバサ……何を狙って欲しい？」

「……………貴方に任せる」

「いや、タバサが決めてくれ。その方が性能が伝わり易いと思う」

勇一の言葉に納得したタバサは、少し考える。勇一の世界の銃が何マイル飛ぶかは知らないが、自分の世界の銃で狙える距離は精々……。

タバサが示したのは、20マイル程離れた湖面上に突き出る岩だった。

「ん……………そうだな、もっと遠くでも大丈夫だぞ」

「その銃の飛距離はどの位？」

「命中精度度外視だったら大体1200m以上。当てるって言ったら射手の技量にもよるけど……まあ俺なら1000m位だな」

「めーとる？」



タバサは聞き慣れない単位に戸惑ったが、響きやそれに付随する数字からとりあえず大体メートルと同じ位だろうと自己解決。しかし、そう考えるとこの銃は……。

タバサの眉がぴくりと動いた。それならば試してみよう。

タバサは言い様の無い高陽感を内心に秘めながら、フライを使って飛んだ。

勇一はいきなり彼女の行動に眉をひそめたが、そんな事はお構いなしに対岸にたどり着くと、フライを解除。次いで呪文を唱え1メートル程の氷柱を1本出し、地面に突き刺した。得意呪文の『ウインディ・アイシクル』の単発版だ。本当は何十発も撃ち込む魔法だが、慣れるとこう行った使い方も出来る。

しつかり地面に突き刺さったのを確認すると、タバサは再びフライを使って勇一の下へと飛ぶ。

150mは離れているだろうか？ 勇一は対岸に突き立ったキラキラと光る氷柱に感心しながら、戻って来たタバサを迎えた。

「へえ、凄いんだな。あれを狙えって事か？」

「そう。あの距離じゃこちらの銃はまず狙っても当たらない」

150メートル。これはハルケギニアでの標準的なマスケット銃の命中が見込める距離の3倍である。

「そういう事、ね。よし、わかった」

「出来る？」

「勿論」

やると言った手前引き下がるつもりは無い。無論この銃で撃つのは始めてだが、小銃射撃には多少の自信があった。

息を整え、銃を構える。

照門から照星を覗き、その延長線上を氷柱の中心に当たる様に微調整を加えた。

風も微風であり、射撃の妨害と成りえ無い。

後は引き金を引くだけ……。

「ん……？」

その時、勇一は妙に感覚が研ぎ澄まされ、気分が昂揚してゆくのを感じた。

武器を持った時の昂揚感は軍隊に入った頃からの物である。

問題は感覚が急速に鋭敏化してゆく事だ。

集中しているからというのもあるが、それだけじゃない。

それ以上に、まるで肉体と精神、神経全てが完全に一つとなったかの様に集中力が増す。しかも違和感を感じない。昔からそうであったかの様な動きで勇一は更に照準に微調整を加えた。

最早幾分も不安は感じない。キツと気持ちを引き締め引き金を引いた。

ドゥンツと辺りにやや重い発砲音が響く。

撃ち出された弾丸は正確に氷柱の中心に突き刺さり、衝撃で氷柱は命中した所から2つに割れ、呆気無く地面に崩れ落ちた。

予想以上の反動だったが特に肩に異常は無い。ふうと息を吐いて勇一は命中を確認した。

「おっ、命中した！俺もコイツもやれば出来るんだな。どうだったタバサ？」

昂揚感の残滓に浸りながら勇一がタバサに振り向くと、彼女は何やら怪訝そうな瞳をこちらに向けていた。

「……………どうしたんだ？何かまずい事でもやっちゃまったかな？」

「いや、大丈夫。気にしないで……………それよりも」

タバサは視線を対岸に向けた。その先には、真っ二つに折れた自らが造りし氷柱の成れの果て。

「凄……………」

「満足してもらえたかな？」

瞳を静かにキラキラとさせるタバサを見つつ、勇一は苦笑しながら銃床下のレバーを引いた。再び装填口が開き、空薬莖が勢い良く排

出される。

それを見ていたタバサが地面に落ちた空薬莖を指差した。

「これは？」

「薬莖だ。これに弾丸と火薬、信管と銃を撃つのに必要な物が全て入ってるんだ」

排出されたばかりの空薬莖は熱いので弾薬箱からもう1発取り出し、それを見せながら勇一が言った。

「……………だとするとこの銃の装填速度は」

「理解が速いな。そう、実戦レベルの射撃速度となると大体5〜6秒に1発って所か」

「凄い」

そうとしか言いようが無かった。こちらの世界の銃と比べるとこの銃は射程・威力・装填速度等、基本性能が圧倒的に上だ。

更にこちらの銃と同じく、平民でも訓練すれば直ぐに使えると聞いた。もしこれが大量にあればメイジの戦場での優位性等崩れてしまっただろう。タバサはこれが何丁あるのか気になり、荷台を見た。

「この銃は何丁ある？」

「とりあえず200丁。弾薬は……ギリギリまで積んだから10万発ちよいか」

それは積載量7tの大型トラックにはほぼ満載の量だった。それを知らないタバサでさえもその弾薬の多さに目を丸くした。

「この、一台で？」

「ああそうさ。と言ってもこいつが大きいから出来る業何だけどなタバサは一転して黙り込んだ。使用によつてはこの兵器群は私の悲願を達成する事も……ここは一旦帰って良く考えた方がいい。丁度日も暮れて来た。

「ありがとう。学院に帰る」

「ん……ま、そうだな。日も暮れてきたしな。また道案内頼めるか？」

勇一が問うと、タバサは短く頷いた。

勇一は運転席に上り、エンジンを掛ける。すると、タバサが自分から助手席の扉を開けてちょこんと隣に座って来た。勇一はまたも苦笑しながらトラックを発進させた。

あれから学院裏の目立たない所にトラックを止めると、タバサだけがトラックから降りた。自分も降りようとする勇一に直ぐ戻るから待っててと言ひ残し、タバサは一人学院内へと消えた。

そして今、勇一はトラックに戻って来たタバサに連れられて学院の女子寮にある、タバサの自室前に来ていた。ちなみにトラックは地理的にあまり人気の無い所に停めたので、一晩くらい大丈夫とタバサは言っていた。明日対策を考えるそうだ。

「入って」

「……………」

して、だ。この場はどうすればいいのだろう。勇一は真剣に悩んだ。女子寮、と言う響きから察するに男子禁制の場なのは想像に難くない。ここへ来たるまでに一人も他の生徒と擦れ違わなくて良かったと心底思う。

それなのに目の前の少女は自分の部屋の扉を、男を前にして何の躊躇いも無く開け放ち、入れと言ってきた。戸惑い等無く、当たり前前の様に言ってきた。

彼女が並の人とは違う性格の持ち主だというのは理解していたが、それでも見知らぬ“女の子”の部屋だ。入ってと言われても、本当にいいのかどうか……………。

そうして黙っていると、返事が無い勇一を不審に思ったのか、タバサが首を傾げながらこちらを向いた。

「……………どうしたの？」

「いや、男である俺が女子寮に入っているのかなと」

「構わない。私が許可する」

「そうか……………まあ、タバサがいつて言うんならいいか」

トラックで寝る事も考えたが、やはり寝るならちゃんとした壁と天井がある方がいい。それにタバサもまだ話したい事があるようだ。結局勇一は頷いて、タバサに続いて部屋の中に入った。

「座って」

タバサはベッドの近くに置かれた椅子に勇一を誘った。ああ、と言って座り部屋を見回してみる。

「結構何というか……………あっさりしてるな」

城のような建物　タバサが言うにはトリステイン魔法学院と言うらしいが、名前はどうかあれ立派過ぎる外見をしていた。

内装もそれに比して豪華なのかと思っただが、タバサの部屋はベッドに円いテーブルに木椅子。そしてベッドとは反対側の壁に居並ぶ本棚。女の子の部屋と言うよりは、書斎の様な構成だった。

「余計な物は必要無い。あっても邪魔なだけ」

「この大量の本達は全部必要みたいだな」

壁を埋める様に置かれた本棚達に詰め込まれる本の群れを見ながら  
勇一が言つと、タバサは小さく頷いた。

「それより、まずは貴方に言いたい事がある」

タバサは自らのベッドに座り、姿勢を正して勇一を見た。その瞳に  
勇一は見覚えがあった。あの、初めて彼女と顔を合わせた時の瞳だ  
った。

「なんだ？」

それでも真剣さを崩さないタバサに、自分も姿勢を正して彼女の瞳  
を直視する。

2人ともお互いを見つめた状態で、数瞬の時間が流れる。

そして、タバサが意を決した様に膝に両手を当て勇一に対して頭を  
下げた。

「ごめんなさい。貴方を召喚してしまった」

「あ、いや、まあ……最初は驚いたけど大丈夫大丈夫。ほら、気に  
するなつて」



勇一は慌てた。瞳を見た時から予感はしていたが、やはり女の子に頭を下げられては敵わない。

「でも……貴方の生活を、奪ってしまった」

タバサは頭を上げず、絞り出す様に声を出した。

「ん……………ほら、とりあえず頭を上げて。話はそれからだ」

勇一が優しくそう言うと、ゆっくりとタバサは頭を上げた。

「一応聞くが……帰る事は？」

「出来ない。『サモン・サーヴァント』は使い魔を召喚するだけ。帰す魔法は……無い」

「そうか……」

ふと窓の外を見れば、あの草原が遠くに見えた。昼間はあそこで何とか生きてくしか無いと思ったが、帰れる見込みが無いと聞かされるとやっぱり落ち込む。やっと平和な暮らしが訪れると思っていたのに。

「本当に、ごめんなさい」

その声に視線を戻せば、タバサが俯いていた。どうやら感づかれたようだ。

だけど、『サモン・サーヴァント』は召喚する対象は選べないと聞いた。ならば、タバサに罪は無い。

それなのに彼女は、その無表情な顔を僅かに歪めて謝り続ける。

それがどうしようも無く可哀相に見えて。

勇一は気付けば落ち込み等吹っ飛ばして、俯くタバサの頭に手をそつと置き、優しく撫でていた。

「気にするなっって言ってるだろ？ 俺は大丈夫だ。だから、そんなに悲しそうな顔はすんな」

「悲しい……？」

「ああ。隠してるみたいだけど、何でかな。俺にはわかる」

「っ……………」

タバサは驚いた。今まで誰にも見破られた事が無かったからだ。彼女は身構えた。何故感情を隠しているのか、彼が聞いてくると思った。

だが。

「ま、そんな事はいい。俺は大丈夫だ。だからそんな顔はすんな。こっちまで悲しくなるじゃないか」

「……………聞かないの？」

「何を？」

「私が……………そうしている理由」

タバサは齒噛みをしながら言った。少し、思い出してしまったのである。

そして言うてから後悔した。これでは勇一に聞いて欲しいと言っているみたいじゃないか。

しかし、勇一はタバサの頭から手を離して自分の頭を掻いて苦笑いを浮かべた。

「えっと……まあ、気になるっちゃあ気になるけど……いくら召喚されたからって、話したく無い過去の一つや二つあるんだろ？  
は……話せる時が来たらでいいさ」

人懐っこい笑みを浮かべながら恥ずかしげにそう言った勇一に、タバサは久しく感じていなかった不思議な感覚を覚えた。

久しぶり過ぎて何だかわからなかったが、とりあえず一つだけ彼に返事をした。

ありがとう。

「もう夜も更けて来たな。タバサ、俺は何処で寝ればいい？」

あれから二、三話しをし、窓から夜空を見上げた後、勇一が言った。この際月が異常にデカイのと、二つあるのもう突っ込まない。ここは異世界だ。割り切れればいい……ははは。内心で乾いた笑いを零れさせながら勇一は思った。

「……」

タバサが示したのは、部屋に一つしか無いベッド。

「いやいや、流石にそれは悪いだろ。床で寝るよ」

「ダメ」

「でも、それじゃタバサが……」

「私もここ。ベッド、広いから問題無い」

「そついつ問題じゃ……」

勇一は悩んだ。小さい時から女子との交流は無かったわけでは無い。だが床を共にするなど、この19年と9ヶ月生きてきて初めてなのである。

「いややっぱり……というかどうして？ 使い魔は主に仕える者

何だろ？ 一緒に寝ちゃまずいって」

使い魔としての自覚とかは全く以って無かった勇一だが、とりあえず逃げ口上として使う事にした。

タバサは使い魔、と言う言葉に眉を僅かに反応させた。

「……………確かに、契約上はそう。でも、貴方……………勇一は人間。私は勇一を使い魔、下僕とは見ない」

「じゃあ、どういう風に見てるんだ？」

使い魔では無いとしたら何なんだろう、と勇一は思った。

しかし、タバサは答えない。答えに窮しているようだった。

やがて、彼女は静かにこう言った。

「わからない。でも、これだけは誓う。勇一の面倒は私が責任を持って見る」

「だから、俺の事は大丈夫だって……………」

「私がしたいからする。気にしないで」

タバサの海のような瞳が勇一を射抜いた。

その真摯な瞳に、勇一はその中には彼女のプライドが存在している。そう感じた。

「そうか……………わかった。これからもよろしくなタバサ。でも面倒を見るなんて言い方はやめてくれ。俺も小さな子供じゃないんだからさ」

「ん……わかった。でも、寝る所はここ」

頷きながらベッドを叩くタバサ。逃げ口上から話を逸らす作戦が見事に失敗した瞬間だった。

「結局そうなるのね……」

タバサの一直線さに根負けした勇一は、一緒のベッドに寝る事を渋々承諾したのだった。

第3話 オモイ（後書き）

御意見御感想お待ちしております。

第4話 一夜明けて（前書き）

相変わらずなグダグダ具合です^^；



## 第4話 一夜明けて

勇一が眠りについたらのを見計らって、私は起き上がった。

勇一を起こさない様に細心の注意を払って。

勇一が起きていない事を確認すると、私はベッドの縁に腰掛ける。思えば、あれからまだ半日くらいしか経過していない事に気付いた。色んな事がありすぎて、時間の感覚が狂ってしまったのかも知れない。

「勇一……」

静かに、傍らで眠る私が召喚してしまった違う世界の人間の名を呼ぶ。

あの時、私は偽名での召喚の儀式に少しだけ不安だった。けれど、召喚された者と物を見てそんな不安は吹き飛んでしまった。

最初は何が何だかわからなかった。

見慣れない人間と、見慣れない馬車の様な乗り物。召喚にはとりあえず成功したようだった。

だけど……直ぐに私は恐怖した。何故なら、それは同時に彼の生活や家族、それまでの人生の功績を奪い去ったに等しい行為だからだ。それは、私が復讐すると決めたアイツと一緒の行為じゃないのか。

アイツと同等の行為をしてしまった。それだけで私の心は罪悪感で一杯になってしまった。

でも。

そんな私に、彼は優しく接してくれた。

儀式の時も。

それから待っている間も。

あの興味深い乗り物や銃でさえも、彼は快く実演してくれた。

それが、どうしようもなく嬉しくて。

でも、同時に一瞬そんな彼の力を利用して自分が、どうしようもなく煩わしかった。

だから帰って来た後、私はもう一度謝罪した。生まれてからほぼ下げた事の無い頭を下げてまで。

それでも、彼は優しくかった。

頭を撫でて、私のせいじゃないと言ってくれた。自分は大丈夫だと。

「……………お人よし？」

言ってしまうえば、そうなのかも知れない。  
だけど、

「悪くない」

また、不思議な気分になった。気付けば、私は彼の髪をそつと撫でていた。

ハツとして手を離す。

今日の私は何だか変だ。熱でもあるのだろうか？

右手を額に当ててみる。熱っぽくは無かった。

明日も早いし、もう寝よう。

私は勇一を起こさない様にベッドの中へと戻った。

横で眠る勇一。

私は、聞こえていないだろう彼に向かって、寝る前にもう一度誓いを立てた。

勇一的生活 最低でも衣食住は私が全力で支援する。それが私の取るべき責任である、と。

朝日が完全に上り切らない早朝。むつくりとタバサのベッドから起き上がる影が一つ。勇一であった。

「今日も眠れなかった……」

彼の顔色はお世辞にも良いとは言えない。寧ろ寝る前より悪い位だった。

「ったく……これで何日目だ？ 畜生、露助の野郎め……」

思い出されるあの日々。生きる為に必死だった勇一と、殺す為に必死だった敵。

ギリツと拳を強く握りしめた所で、隣で寝息を立てるタバサに気付く。

「……………ふふ」

彼女の寝顔を見てみると、自然とギスギスした気持ちか風に流されて行く様な気がした。昨日、タバサの独り言と誓いをばっちり聞いてしまった勇一だったが、これは黙って置こう。そうしよう。

心にそう言い聞かせて、再びタバサの寝顔を見る。

何と言うか……可愛らしい。てんで女性に縁の無かった彼だが、それでも彼女の白いきめ細やかな肌や眼鏡を机に置き、無防備な素顔を目の前に曝されると何だかとてもモヤモヤと胸が熱くなってくる。

「可愛い………じゃなくてッ！　これは流石にやばい………」

さっと顔を逸らす。

こんなのは日本男児としてあるまじき事……。でも可愛いなもっッ！

「すうー………」

その時タバサの寝息が聞こえ、勇一はびくりと肩を震わせる。そしてゆっくりと彼女へ振り向いた。

そこには変わらずタバサの気持ち良さそうに眠る素顔が。

結局、タバサの寝息が聴こえては覗き聞こえては覗きをしながら彼女が起きるまで過ごす勇一だった。

タバサが起き、着替えるからと言った彼女に自発的に外に出た勇一は先程の行為について懺悔していた。

「やばい………誰も見てはいなかったとは言えあれはまずい。下手すれば、親に『近付いちゃいけませんよ』と言われる部類に仲間入りしかける。今度からは自重しよう………」

「何を自重するの？」

「いやさっきタバサの寝顔を……ってタバサッ!？」

聞こえた声に振り向くと、そこには眼鏡を掛け制服に着替え終わり、杖を持ったタバサの姿。

跳び上がりそうになりながら後ずさる。思わず喋りそうになった……。

「私？」

「い、いや何でも無いんだ。気にすんな」

勇一は必死に苦笑いをしながら頭を掻いた。

「それより、朝飯に行くんだっただな。何処にあるんだ？」

「ん、こっち」

朝飯、と言われて目を一瞬光らせたタバサは杖で道を指して歩き出した。

勇一は何とか話題転換が上手く言ったと胸を撫で下ろしながら、後に続く。

「（勇一、妙に顔色が良かった。けど慌ててた。……何でだろう？）

「タバサはまあそれでも顔色が良いなら良かった。それよりご飯。と、足早に食堂へと向かって行った。」

「うわぁ……………」

食堂に着いた勇一の第一声がそれだった。

食堂は思っていたよりかなり大きく、その規模は無論生まれて来て初めて見るデカさだ。

食堂の中央に3つの長大なテーブルが並び、更にそれとは別に2階にも机と席がある。食堂の壁や天井はきらびやかな装飾で彩られ、テーブルに並べられた豪華な料理と相乗効果で食堂全体を誰に見せても恥ずかしくない位着飾っていた。

「こつち」

圧倒される勇一だったが、タバサの一声で我に返り彼女に続いていく。

タバサはすたすと真ん中のテーブルの空いている席にたどり着くと、当たり前のように座った。そして隣の席を静かにぽんぽんと叩いて勇一を誘った。

「座ってもいいのかよ……………これ」

「全然構わない」

何だか申し訳ない気もしたが、タバサが言うのであればと勇一は隣の席に座った。

「何だか豪華過ぎないか……………？」

目の前に鎮座した鳥のローストやら鱈の形をしたパイやらが勇一を威圧する。冷静になって考えて見ると、毎朝こんな物を貴族は食べて胃もたれとかはしないのだろうか？  
いや、貴族の胃はわからんが少なくとも俺の胃はこんなもんをずっと食べ続ければ絶対爆発する。

そうやって勇一が料理と睨めっこをしていると、背後から声を掛けられた。

「あら、貴方は確か……タバサが召喚した使い魔の殿方でしたわね？」

「ん？」

振り向くと、そこにはタバサと同じ制服を着た燃える様な赤い髪を長く伸ばした女性が立っていた。

しかし、同じ制服を着ていても体格は全然違っていた。

「ッ！？ あ、ああそうだが」

豊満な胸をブラウスの第2ボタンまで外しており、その谷間が勇一の視界に飛び込んで来る。更に彼女の身体から振り撒かれる色気に当てられそうになりながら、勇一は何とか踏み止まった。

咄嗟に目を夢と希望の溪谷から逸らす。

「あらあ……？ 私はキュルケ・フォン・ツェルプストー。貴方は？」



「俺は本多勇一だ」

「ホンダユウイチ？ 変な名前ね」

「ホンダが名字でユウイチが名前だっ！ まあ、好きに呼んでくれよ」

勇一はキュルケの顔を直視出来ないまま言った。

「ならユウイチって呼ばせて貰うわね。私は本名が長いから、キュルケでいいわよ。それと……もっと見ていいのよ？」

「ああ……ってええっ!？」

気付けばキュルケの顔が目の前にあった。視線を落とせばあの溪谷が……。

「いやいやいやッ!？ 遠慮します!」

「ふふふ……赤くなっちゃって可愛いじゃない。ほらほら」

勇一は思わず敬語になりながら後ずさる。それをキュルケが一步踏み出して接近しようとした時

「ッ!？」

彼女と勇一の間にも留まらぬ速さで何か突き出される。

それは、タバサが持つ大きなささくれ立った杖。

「勇一をからかわないで」

キュルケに対していつもの無感情無表情で注意するタバサ。だが、彼女の魔法学院入学以来の友人であるキュルケには、タバサの微妙な表情の変化を読み取る事が出来た。

「……………ふ、わかったわよタバサ。ユウイチもからかったりして悪かったわね。ごめんなさい」

「あ、ああ……………」

タバサ、助けしてくれたのか？

勇一は平静を取り戻しながら、タバサの方を見た。彼女はまた食事へと戻っていた。

「じゃあまた後でねユウイチ……………頑張りなさいよ？」

その様子を見て娘の成長を見届ける母親の様に微笑みながら、すれ違い様に去って行くキュルケ。

耳元で頑張れと言われたが、具体的に何を頑張れと言うのだ？

「……………ま、この新しい生活全体を指してだろうな」

勇一は簡単にそう解して席に着くと、再び料理と睨めっこを始めた。

「……………どうしたの？」

「ん？ ああ……………少し目移りしてな。故郷だと朝っぱらからこんなに豪華な食事は出なかつたし」

「そう……………」

ならば、とタバサは躊躇する彼に少しずつ皿に料理を取って渡してやった。

「こりゃ早急に対策を練らんといけねえ……………」

タバサの気遣いに感謝しながらも、勇一はその美味いけれど胃もたれしそうな料理達を食べ始めた。

あれから勇一はタバサと一緒に教室へと来ていた。

タバサは部屋に入れる使い魔と一緒に来るのだけれど、勇一が嫌なら構わないと言ってくれた。

しかし、勇一はそれではまたタバサが余計な<sup>ひんしゅく</sup>響きを買ってしまいかも知れない、と一緒に授業に出る事にした。それと、彼も一応は徴兵されるまで大学生であった身である。魔法でどんな授業をするのか、気になるものがあつた。

大学の講堂の様な教室には誰もいない。彼等が一番乗りのようである。

最初はタバサの後ろに立っていた勇一だったが、タバサに座っても構わないと言われ彼女の隣に座つた。

「それにしても、タバサは結構食べるんだな」

先程の、体格には似合わない量を朝から平らげていたタバサを見ていた勇一は笑いながら言つた。

「そつ?」

「ああ。普通の2……いや、3倍は食つてたぞ」

「……変?」

「いや、いいんじゃないか? 俺は一杯食べる方が好きだしな」

「好き……」

タバサがぼそりと彼の言葉を復唱してさつと本を読むのに戻ってし

まうが、彼はそれを聞き取る事は無かった。

やがて、他の生徒が教室に入り始め各々自由に座り始める。その中には男子に囲まれるキュルケの姿もあった。キュルケはこちらに気付いているようだが、纏わり付く男子の相手に精一杯のようであった。

「……やっぱり男子には好かれているみたいだな」

勇一も惑わされそうになったあのむんむんと来る色気からしたら納得の光景だ。

「でも、すぐに飽きる」

「そうなのか？」

「熱し易い分、冷め易いと本人が言っていた」

「まじか……」

目を輝かせて金魚の糞の様に集う男子達に哀れな目線を送る。ご愁傷様です。

その時、彼の後ろから怒声が響き渡った。

「ちょっと！  
りなさい！」

アンタ貴族の席に何堂々と座ってんのよ！

降

「あん？」

顔だけ振り返って見れば、そこには昨日自分と同じ人間を召喚したあの桃色の髪の女子生徒がいた。確かルイズ、と言っていたか。彼女は腕を組み、こちらを見下す様に見て来る。何と言うか、勇一には見た事がある光景だった。一方、その後ろにいる少年はこちらを目を丸くして見ていた。

「あん、じゃないわよッ！ 私は何で貴族様の席に平民であるア  
ンタが座ってるのかと聞いているの。早く降りなさい」

「ああ、そりゃ悪かったな」

勇一は口では謝るも、直ぐに前を向いて一向にどこうとはしなかった。貴族と平民の関係はタバサから聞いていたが、自分はその貴族である彼女に許可を貰っている。それと、何だか彼女の言い方が高圧的で腑に落ちないのも理由だった。

「……………ちよつと、何よその態度！」

ルイズは自分が半ば無視された様な気がして一気に苛立ちは頂点に達した。

少年が止める間もなく勇一の肩を掴む。更にあわよくば椅子から引き倒そうと力を入れる。

しかし、その手は彼の肩を掴みこそすれ、そこから先には行かなかった。

「おつと」

勇一の左肩を掴んだ左手が、彼の右手にしっかりと掴まれ動かない。更に右肩を掴もうとした右手は、彼の肩に届く前に横から伸びて来

た違う手に掴まれた。それはタバサの腕だった。

「な、何よ……！」

「私が許可した。貴女に勇一をどうこう言う資格は無い」

静かに言い放つタバサ。だが、ルイズが握られた手首に痛みを感じる程タバサの手は強く握り込まれ、彼女の目も心なしか鋭い光りをこちらに向けているような気がした。彼女の目を見ていると、こちらの心を全て見透かし射抜く様に鋭く、穏やか。更に無表情故に何を考えているか解らず、底知れぬ恐怖心に煽られる。

知らず、ルイズは後ずさりをしていた。

「な、何よ何よ……たかが平民一人に……かか、勝手にしなさい！」  
フンと鼻を鳴らし両手を勇一とタバサの拘束から振り払うと、機嫌悪そうにずかずかと違う席に座った。

「（これがこの世界の常識か……）」

たかが平民。そう吐き捨てた彼女を憚然としながら見ていたが、ふとまだ後ろから己に向けられる視線に気付く。

振り向くと、そこにはあの少年がいた。

「ん、もしかして君も召喚されたのか？」

「と、言う事はあんたも召喚されたのか!？」

そう叫ぶなり、彼は目を輝かせながら勇一に肉薄して来た。思わず引いてしまう程に。

「俺は平賀才人。いやあこの世界に日本人は俺一人かと思ったけど安心したよ。あんたのその服はコスプレか何かか？」

勇一はいきなりまくし立てられて訳がわからなかったが、何と無く思った。

こいつ礼儀がなってねえ。

とりあえず才人の両肩を掴み、ぐいと距離を開けさせる。

「落ち着け。俺は本多勇一。こすぶれが何だかは知らんが、俺は大日本帝国陸軍軍人だった」

「はい……？」

今度は肩を掴まれながら訳が解らないと言った表情をする才人。

「聞こえ無かったか？　俺はこすぶれ何か知らねえ。というかこすぶれって何だよこすぶれって。お前馬鹿にしてんのか？」

少し怒り気味に言う勇一。意味がわかんねえのはこつちだ。

「ひっ……と、言う事はまさか本物の軍人？」

「頭に元、が付くけどな。確かに半年間位は軍人だったぞ」

「でも、ホントに……？」



勇一は才人の肩から手を離し、腕を組む。

「こんな時に嘘言っただうする。それに、俺は君の服装の方が気になるけどな」

勇一から見たら、彼の服装は見慣れない……言うなれば米英と戦争に入る前に見た、外国人の服装のようだった。

戦争が終わったとは言え、こんな服はまず一般庶民には残っていないはずである。

「え、これっすか？　これはデパートで買った安物ですけどね……」

意外、と言った顔で自分の洋服を摘む才人。落ち着いて来たのか、喋り方は敬語になっていた。

「デパート？　百貨店の事か……もう営業再開してたか……？」

その時、才人を呼ぶ大きくて良く通る声が聞こえた。ルイズだ。

「こらッ！　アンタは私の使い魔なんだから、そんな奴と話してないでこっちに来なさい！」

「わかったよ。えっと……本多さんだっけ。じゃあまた後で話聞かせて下さい」

「ああ。お互い大変だな」

いや、大変なのは寧ろ才人君の方が。

勇一はルイズにこっぴどく叱られ、罵られる才人の姿を見て苦々し

げにそう思った。

教室を見渡せば、ほぼ全員の生徒が席に着き授業に備えている。そして、フクロウやら猫やらモグラやらの使い魔達も、中に入る者は勢揃いだ。その中には実際にはいない、大学の文献の中でしか見た事が無い摩訶不思議なる生物達もあり、勇一は半ば感動していた。

「こりゃ凄いな……」

目を爛々とさせて珍しい生物達を觀賞する。

「勇一、動物好きなの？」

その様子に気付いたタバサが、本から顔を上げて聞いた。

「いや、まあ……凄く好きって訳でも無いんだが、バジリスクとかがまさか実物で見れるとは夢にも思わなくて」

「勇一の世界には？」

「残念ながら伝説だけの存在だな。少なくとも4本以上脚のあるトカゲは見た事が無い」

「そう………勇一」

「ん、何だ？」

タバサの言葉のトーンが小さくなる。勇一が応えようと、タバサは勇一の耳を差して指をくいくいと自分の方に向けた。耳を貸せと言う事だ。

「どうした？」

極力声を抑えてタバサの口元に耳を持っていく。

「勇一が持つて来たあの乗り物について話がある。昼休みに停車場所に来て」

「……………新しい隠し場所か？」

「それもある」

「……………わかった」

他には何があるのだろうか。

勇一はそう思ったが、先生とおぼしき女性が部屋に入って来るのを確認し、とりあえず了承だけして席に戻った。

「あー……………皆さん席に着いて。これより最初の授業を始めます」

第4話 一夜明けて（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

## 第5話 科学者

授業が終わり昼休みになった勇一は、タバサの言った通りにトラックの停めてある場所に来ていた。

タバサはその前に寄る所があるらしく、まだ来ていない。

「それにしても……確かに魔法つてのは凄いもんだったな……」

先程の授業に参加しながら、一人思う。

最初は先生に珍しい使い魔と言われ、他の生徒から嘲笑を食らったがそんな物は無視していればいいだけだ。三つも四つも年下の奴らに怒った所で下らない事。

タバサもわかっていたのか聞こえていないのか、完全無視を決め込んでいた。

だが、一方でルイズは我慢出来なかったようで少し太っている風っぴきだか風上だかのマリコルヌとか言う男子生徒と口論を繰り広げた拳句、先生に怒られていたが。

いよいよ授業が始まり、先生が『錬金』についての講義を始めたが、勇一には最初は何を言っているのかちんぷんかんぷんだった。

しかし、先生が石ころにその『錬金』をかけた途端に彼の興味は一気にその石ころ“だった”物に注がれた。

「石ころを真鍮に、か……。物質を全く違う物質に変換する魔法。成るほど、科学が発展しない訳だ」

もつと『錬金』を見たかったが、最終的に先生に指名されたルイズが起こした爆発のおかげで教室は破壊され、先生も気絶したので授業はお流れとなってしまった。

「あの爆発も凄かったな……。そういえば才人に会わずに来ちまったけど……。まあもう会えない訳じゃないし今度会った時で大丈夫か。それにしても……」

勇一は再び今まで見てきた一連の魔法を思い出す。

使用によれば、近代科学をも上回る力を持っているかも知れない魔法。お伽話の中だけだと思っていた力。

だから、魔力を持つ者が貴族として君臨し、持たない者を虐げ支配しているのだ。

タバサの話によると、数千年もの間その構図は変わっていないらしい。

「貴族は驕り平民は虐げられ搾取される、か。まったく絶対王制かそれ以前の時代と変わらないな。しかも魔法があるせいで革命も起きない」

まだこの世界に来て一日の勇一だったが、何となくこの世界 八

ルケギニアの支配構造を理解してきていた。それと共に、その貴族絶対主義社会から来る社会のまずさも。

「魔法があるって言うても、結局魔法は使える人間にしか使えない。習得すれば誰にでも使える科学技術とは差があるか……」

まだこの学院から出ていないので、このトリステインと言う国の状況はわからない。彼の中で出て来たとある漠然とした考えが形になるのは、まだ先の事だった。

「勇一」

「お、タバサか」

声が聞こえた方向に振り向けば、停車場所から程近い所にある扉からタバサが出て来ていた。

だが、扉から出て来たのはタバサだけでは無かった。

「おお！　これがミス・タバサが言っていた異世界の乗り物とやらか！」

歓喜の叫び声を上げトラックに走り寄ってくる男性に、勇一は見覚えがあった。確か、召喚された時に生徒を監督していた教師だ。

「貴方は……コルベール先生でしたっけ？」

「その通り！　君は確かミス・タバサの使い魔君だったね」

「ええ、まあ……」

「君はこれに乗ってきたのかい？」

「はい、そうですけど」

その瞬間、コルベールの目が光り輝いた。

「素晴らしい！　是非ともこの乗り物の仕組みを教えてくださいませんか！？」

再び歓声を上げ、勇一の手を取るコルベール。勇一はその剣幕に後退りした。

「タバサ、これは一体どういう……？」

「彼は科学と言うモノに多大な興味を持っている。力になってくれると思う。私はそう感じた」

「そうなのか……」



タバサの言った通り、彼の自分とトラックを見る目は常人のそれでは無い。タバサもこのトラックには大いに興味を示してくれたが、彼は明らかにそれ以上だ。

科学に素養がある人物はこの世界では多分貴重なのであろう。それならば、少なくともこれを破壊される事は無い筈だ。

タバサが薦めるのなら信用してみよう。勇一はそう思い、コルベールの手を握り返した。コルベールの顔も更に明るくなり、タバサの目の前で二人は固い握手を交わす。

「わかりました。自分が知る限りの事は教えましょう。その代わりに条件があります」

「ん、何だね？　この乗り物のためならば、例え火の中水の中、ドラゴン退治も喜んで名乗り出よう！！」

「いやいや、そんな激しい事じゃないんですが……（ドラゴン退治って何処の英雄伝だよ……）。この乗り物を、人目のつかない所に匿って欲しいんです。誰か他の生徒なんかには悪戯でもされたら、堪った物ではありませんから」

「ふむ……その通りだな。生徒達が好奇心に駆られない保証は無い。よし、ならば私の研究室の隣に倉庫がある。その中に移動してくれたまえ」

「入りますか？」

「心配ご無用。来たる時の為に日々拡張を続けておりますからな！」  
胸を張りながら自信たっぷりと言うコルベール。宗助は頷くと、コルベールから離れてトラックの運転席に乗った。

「隣に乗って下さい。そこまで自力で走って見せますから」

コルベールの研究室も、学院の外にある目立たない場所に建っていた。

勇一は指示された通りに、研究室に隣接して建っている倉庫の中にトラックをバックで入れエンジンを切った。

直後、助手席のドアが開きコルベールが飛び下りる。

「ほほう！ 何から何まで興味深い乗り物だね！ 勇一君の言うこの二式大型自動貨車……トラックとやらは！」

子供の様に騒ぎながらトラックの各部を見物するコルベール。  
その様子を運転席から降りた勇一は苦笑しながら見ていた。荷台に乗っていたタバサも楽しかった様で、じっとトラックの姿を見つめる。

「ほほう……この車輪に使われている材料と車輪の背後にあるバネの様な物が路面の衝撃を緩和し、乗り心地を高めている……そうかね、勇一君？」

「はい、そうですね。先生の言っている事で概ね間違いは無いです」

その後もエンジンの仕組みやら、足回りの説明やら運転席の計器や部品の解説等あらゆる事にコルベールは事細かに勇一に質問をした。あまりの質問の多さに勇一もたじろいだが、それでも教えられる限りの事は教えた。

コルベールの熱心さは本物だった。それに加え彼は、今までのハルケギニアでは考えられなかった事象（エンジンの構造やどうして前に進むのか、更にはエンジンの起動、停止等）をあっさりと受け入れ、それを部分的とは言え理解する聡明さも持っていた。勇一は彼の頭脳は底が知れない様な気がし、内心ワクワクとしてきた。

「ふむふむ……む、そろそろ昼休みが終わるな。続きは放課後にしよう」

「わかりました。ではあの件ですが……」

「うむ、私が必ず何とかしてみよう」

勇一は、話の途中でコルベールにある重大な頼み事をしていた。彼も納得し、その自信の表情と彼の資質を見れば、望みは大きいであろう。

「ありがとうございます」

「なあに、お礼を言うのはこちらの方だよ。ではまた放課後に」

「はい。では……」

勇一は軽く会釈をして、トラックの側に座って本を読んでいたタバサを呼んだ。タバサは呼ばれると静かに本を閉じ、直ぐに勇一の下へやって来た。一緒に倉庫の外へと移動する。

「終わった？」

「ああ。コルベール先生はかなり頼りになる人だ。タバサ、紹介してくれてありがとうな」

「別に構わない。役に立てたのなら幸い」

「……………」

横目でコルベールの姿を追うと、彼は張り切った表情で研究所の中

へ入っていく所だった。

だが、タバサはやはりいつもの無表情。朝起きてから今まで、その表情を一切変える事は無かった。まるで凍っているかのように、タバサの顔色は一定のまま変わらない。

しかし、彼は出会った時や池に行った時、そして寝る前もその水面に張った氷の様な冷めた表情とは違う表情を見ていた。多分、それは彼女が元来持つ本来の表情の欠片なのだろう。

でも、それをクラスで見せる事は一切無い。クラスメートも彼女とは距離を置いている。

何故、タバサはそうなってしまったのか？

勇一は考えた。

考えて、考えて、考えた。

でも、答えなんか分かる筈も無い。まだ彼女とは昨日会ったばかりなのだから。

「……………どうしたの？」

「っ……………あぁいや、何でも無い」

どうやら固まってしまっていたようだ。いつの間にか、タバサが目

の前にいてこちらの顔を覗き込んでいた。

「でも、何だか深刻な顔をしていた」

「ははっ、本当に何でも無いんだ」

「本当に？ 何か悩みや心配事があるのなら言ってほしい。私は……」

「本当に悩んだ時、そうさせてもらっつな」

どちらかと言えばそれを言った本人に心配事があるのだが。

だけど、それでもそんなタバサの心遣いが素直に愛おしく思えて。

気付いた時には自然な手つきで、勇一はタバサの頭を撫でていた。

「んっ……」

小さく声を漏らすタバサ。

「あっ、悪い……嫌だったか？」

それを聞いて、勇一は直ぐに手を離す。だが、彼女の鉄の表情は今日初めて違う物に変わったようだった。

「ん……大丈夫。嫌ではないから」

殆ど変わらない様に見えるが、勇一には頬に朱が射し、俯いたその

表情はどこと無く嬉しそうに見えた。

「そうか。嫌じゃないなら良かったよ。だけど、ごめんな。どうにも手が勝手に動くみたいだ」

勇一はそう言っただけで笑いながら頭を掻いた。

タバサはまだ俯いたままだった。

「大丈夫。……気にしないで」

「ああ、そうだな　ん？」

その時、二人はこちらに近付いて来る一人の少年に気付いた。少年は、二人が自分に気付いたのを認識すると、直ぐに走り寄って来た。

「本多さん！」

「お、才人じゃないか。一体どうしたんだ？」

その少年は先程授業前に出会ったもう一人の召喚された人間、平賀才人であった。

彼は勇一の目の前まで来ると、やっと見つけたあと言いながら肩で息をしていた。

「どうしたもこうしたも無いですよ。授業終わったら話しに行こうとしたのに、ルイズが思いつき切り爆発させたせいで後片付けに付き合わされるし……少しからかったら飯抜きにされるし暇だから本多さん捜し始めたけど中々見つからないし……」

「ははっ、それは災難だったな！」

「全く他人事だからってそんな言い方酷いっすよ……お陰でどんなに捜すのに苦労したか……」

「ははは……まあ、気にするな」

疲れた表情で嘆く才人の肩を慰めるように苦笑しながらぼんぼんと叩く勇一。

しかし全くもって自分を召喚したのがタバサで良かったな。と、内心では安堵している勇一であった。

「はあ……あれ、そういえば本多さん。そっちのコは？」

「ん？ ああ、まだ紹介していなかったな。この娘は俺を召喚した娘で、名前はタバサって言うんだ」

タバサの存在に漸く気付いた才人に、勇一はタバサの方を向きながら紹介してやった。

「そうだったのか。俺は平賀才人。よろしくな！」

才人は努めて明るく自己紹介をする。

タバサも小さく、こくりと頷いてそれに応えた。そして、何か気付いた様に勇一の袖を引っ張った。

「ん？ 何だ？」

「ヒラガサイト……黒髪。勇一もホンダユウイチ……黒髪。もしかして……同郷？」



タバサは交互に勇一と才人の顔を見ながら言った。

「まあ……そうなるな」

「同じ日本人だしな。ちょっと引つ掛かる所はあるけど……」

「確かにな。俺も同感だ。才人に聞きたい事がある」

勇一は思い出した。そして今話して更にほんの少し、違和感を感じた。才人の服装や言動、雰囲気等が少し……自分がいた戦争が終了したばかりの頃の人々とは違う事に。

勇一は真剣な声でタバサに言った。

「タバサ」

「何？」

「次の授業まで後どの位だ？」

「……多分後5分位」

「少し短いな……タバサ、次の授業には俺達は“参加”しなくちゃいけないのか？」

「……絶対、と言う決まりはない」

タバサは少し考えた後、呟く様に言った。

勇一はニヤリと笑った。なら、時間はある。

「タバサ。言い訳頼めるか？」

「……承知」

タバサも意図を瞬時に理解してくれた様で、こくりと頷く。

要はサボりだ。これが生徒ならまずいが、生憎俺達はあくまで使い魔だ。それに、こいつと少し情報交換がしたい。

勇一は才人を見た。しかし、彼は直ぐには理解してくれなかったようだった。才人は困った様に目を泳がせながら俯く。

「あ、あの……でも俺さつきルイズを怒らせちゃったから授業には出てやらないと……」

「それなら大丈夫だ。心配しなくても、手は今打った」

勇一はちらりとタバサを見た。

「だ、だけど……」

「それに、昼食べてないんだろ？     トラックの中に少しだけ食糧があるから、食ってもいいぞ」

「ま、マジっすか!？」

才人がガバツと顔を上げ、飢えた犬の様に勇一を見上げる。勇一はほくそ笑んだ。

「ああ本当だ。腹、減ってるんだろ？」

「は、はい！　朝飯も貧相なモンしか食ってなくて、腹ペコペコっす！」

「よし、なら決まりだな。タバサ、一つお願いするよ」

輝いた瞳で勇一に擦り寄る才人の頭を撫でながら、勇一はタバサに言った。

タバサはこくりと頷いて一言、

「了解した。任せて」

と言つと足速に学院の中へ消えていった。

同じ頃、魔法学院厨房裏。

一人のメイドの様な服を着た少女が、厨房裏に設置された井戸から

水を汲んでいる。

「ふう……………よいしょっと」

黒い髪を肩近くまで伸ばしているその少女は桶一杯の水を汲み上げ、額に何度も何度も井戸と厨房の間を往復しながら、水を運ぶ。

身体は華奢。額には一筋の汗。しかし少女は額の汗を腕で拭い、慣れた手つきで作業を続けた。

そして、水運びが終わろうとした時。

「ん……………？　今、その茂みが動いたような……………」

ふと井戸から目の前に広がる森の一角に視線を移して、少女は訝しげに首を捻った。

厨房裏には井戸がある。更にその外側には、豊かな森林地帯が学院の裏を半月状に囲う様に存在している。

井戸は森と厨房裏までの中間距離にあるのだが、目が良い少女は確かに森の入口にある茂みが動いたのを確認した。

イタチか何かかしら？

少女は少し気になって汲んだばかりの水桶を置いて、音がした地点へと駆け出した。

「うーん……おかしいなあ。確かに音がしたのだけれど……」

何か動物がいたら良いな。

そんな淡い期待と希望を込めながら捜してみたが、どうやらその期待は塵と消えてしまったようだ。

「まあ、人間が来たら逃げてでも仕方ないですよね……」

小動物なんかは人間が来るのがわかってるのなら逃げるのは当たり前前。

でも、見たかったなあ。撫で撫でしたかったなあ。

今日も貴族様に怒られて何回も謝させられちゃったし。ただ、落とされたお手紙をお渡ししたただけなのに……。

でも、貴族様に仕えるのは平民の勤め。

メイド服の少女は心の癒しを見つけられない事に深くため息を吐くと、スカートの裾を払いながら立ち上がった。

まだ、やらなければいけない仕事が残っている。

美しく艶のある黒髪を持つ少女　シエスタはこれも平和な日常の内なのだと割り切りながら、ぱたぱたと井戸の近くに置いたままの

水桶の元に走っていった。

## 第5話 科学者（後書き）

御意見御感想お待ちしております。

第6話 過去と未来（前書き）

グダグダ 150%（汗）



## 第6話 過去と未来

「すげえ！ モノホンのボンネットトラックだ！！」

倉庫の中に入った才人の第一声がそれだった。すげえだとかやべえだとか言いながら、ぐるぐるとトラックの周りをコルベール並に嬉々とした表情で回る才人。

腹が減っていたんじゃない無かったのだろうか？

「ははっ、こちらの世界の物に再び触れるのがそんなに嬉しいのか？」

「あ、いや……それもありませんけど、こういう形の車はテレビの中で見えた事が無かったんで……珍しくてつい」

「てれび？ 何だそりゃ？」

また彼の口から謎の単語が出て来て、勇一は首を傾げる。

「あっ……いえ、何でも無いっす。もうちょっと見てもいいですか？」

「それは別に構わんが……」

「やった！」

一瞬気まずい表情をした才人は、だが直ぐに元に戻りまたトラックを見物し始める。

勇一はそれを訝しげに見つめていた。

やはり、何かがおかしい。

先程から聞かされる、聞いた事の無い横文字。外人っぽい格好。そして、軍用民生問わず巷を走り回っているコイツを珍しいと言った。

彼とは同じ日本人の筈である。

しかし、彼と自分の間には何かわからない……隔たりの様な物がある。勇一はそう考えていた。

「とりあえず……聞かない事にはわからないか。って……？」

才人を呼ぼうと顔を上げる勇一。だが、才人がいない。トラックを見ていた筈であるのに、トラックの周りを見回しても彼は見つからなかった。

「おかしいな……」

「すげえ！　本多さん、もしかしてこれ本物の銃と弾っすよね！」

「ッ!？」

外かも知れない。そう思った彼の思考は、荷台から聴こえた声によつて崩壊した。

勇一は弾かれた様に荷台へと周り、既によつて大量の弾薬箱と銃

箱を見ている才人をやんわりと制止する。

「そこまでだ才人。それ以上は……ストップだ」

「ええー……見せてくれたっていいじゃないですか。俺も武器とか欲しいっすよ」

才人は無然とした表情を浮かべながら荷台を降りた。

「どうしてだ？」

「だって、ここにいる連中は皆魔法が使える。ルイズは違うけど。それに、こんな得体の知れない世界で丸腰ってのは嫌なんだ」

才人は訴えかける様に勇一に言い放った。

「……要は、この先何があるかわからないからとりあえず自衛用の武器が欲しいと？」

才人は黙って頷く。

才人が自分に向ける真摯な瞳に、勇一は少し考えた。

だが彼の首は、

「……………ダメだな」

縦には振られなかった。

「どうしてですか!？」　　「こっただけ一杯あるのに!」

「まあまあ落ち着け。確かに武器自体は銃も、銃剣も銃弾も大量にある」

「だったら……!」

「一つ位いいじゃないか、と目を剥いて抗議する才人を、勇一は努めて優しく制止した。

「問題はそこじゃあ無いんだ。一番の問題は、使う人間の事だ」

「使う……人間？　俺？」

才人は少し冷静になり、自分を指差した。

「そう。過ぎたるは猶及ばざるが如しって言葉は知ってるか？」

「名前くらいは……」

「要は過ぎる力は身を滅ぼすって奴だ。見た所才人は何の訓練も受けていない一般人だ。そんな素人が本格的な武器を持ったって、結果は見えている」

「っ……」

才人は押し黙ってしまふ。それは事実だったから。

「気持ちはわかるが……今はまだ様子を見よう」

「……はい。無理言つてすみません」

そう言つて、渋々トラックの見学に戻る才人。それを見た勇一は、ホツと胸を撫で下ろしていた。

何も、勇一は彼を頭ごなしに批判していた訳では無い。

人間は窮地に立たされ、不安や恐怖に心を支配されると自然に強い力を欲するようになる。“力”と言うのは、それだけ不安や恐怖を打ち消す特效薬に成り得るからだ。

しかし、弱い者がいきなり強すぎる力を手にすると、時として悲惨な自体を招く事も有り得る。だから、勇一は『過ぎたるは猶及ばざるが如し』と言う言葉を使って才人を制止したのだ。

幸い、彼はまだそこまで窮地に立っていた訳では無かった。未知の力に対する好奇心と言うのもあったのかもしれない。だからこそ諦め、またこの二式大型自動貨車を見始めたのだらう。

近い内に俺が“力”の使い方を教える必要があるな。

勇一は運転席に上つてこちらに質問してくる才人に答えながら、一人密かにそう思っていた。

あれから暫くして、勇一は才人を呼んで倉庫の一角に一緒に腰掛けて話をしていた。この話の為に、タバサに頼んでまで才人をこの場に留め置いたのだ。どうしても、聞いておかねばならない事があったから。

「そうか……やはり、とは思ってたけどな」

「みたいですね……」

聞かされた事実。それは、彼と自分が生活していた時間軸が全く異なっていると言う事。住んでいた国こそ一緒だが、時は60年もの違いがあった。

勇一は才人に頼まれて三つ目の缶詰を彼に渡しながら、今聞いた話を整理し始めた。

自分は1945年の9月。

才人は、2004年の4月。

召喚された方法は大きさの違いこそあれど、得体の知れない不思議な鏡。

自分が知らない未来の歴史を才人は語ったが、自分が知っている

歴史は一緒だった。辿って来た歴史が同一と言う事は、世界も多分同じだ。となると……

「(タイムスリップってのと似てるな……)」

馬鹿馬鹿しい。タイムスリップなんて物は夢こそあるけど、現実単なるSFオカルトに過ぎないじゃないか。少し前までの勇一ならそう言っていたであろう。

だが、このハルケギニアと言う世界には魔法が存在する。空想上の生き物が生活している。

貴族なんてモノが未だに存在し、専横を極めている。

この不可思議過ぎる現象も、またこの世界の常識として受け入れなければならぬのか。

勇一はふと横で美味そうに缶詰の中身を頬張る才人に目をやった。

「鰯の油着けと鮭缶がそんなに美味いか？」

「はい！ 日本食なんて、何だか懐かしくなっちゃってんぐむぐ」

「そうか。俺の分もあるから三つまでにしとけよ」

ふぁーいと言いながら食事を続ける才人。

彼は今の状況を、なるようになるとして全て受け入れていた。

全く以って大層な楽道家である。勇一も仲間内ではかなりの楽観主義と自他共に認めていたが、どうやら彼はその上を行くようだった。

しかし、それゆえにこんな世界でも才人は先入観無しに受け入れ、適応出来る。現に時代の違う人間と会っても彼はすぐにそれを信じ、普通に接してきた。そして今は、横で配給品の缶詰をがつついている。

勇一はそんな才人が何だか羨ましく思えた。そして、ある意味で見習わなければいけないとも。

勇一は座りながら倉庫の窓から覗く空を見た。空には、二つの大きな月が薄くこちらを見下ろしていた。

昨日の夜に確認済みだが、あれもまた常識では無い。

魔法に貴族に二つの月に時間軸のズレ。一日でこれだけの常識を見せられたのだ。後どれだけの非常識が待っているのだろうか？そう考えながら才人を見ていると、勇一は心のもやもやが自然と取れてゆく様な気がした。

「才人」

「ふぁい？ んぐ……何ですか？」

「ありがとな。君のお陰で助かったよ」

「俺、何かしましたか？」

「いや、気にするな。ただ礼が言いたかっただけだ」

「そつつすか……？」



首を傾げる才人に、勇一は笑いながら答えた。どうせ帰れないのなら、この非常識だらけの世界を精一杯に生きればいい。幸い“アレ”が完成すれば、トラックを使った仕事も出来るであろう。トラックの有用性を示せば、直ぐにでも仕事はとれる筈だ。

「（銃弾薬も処理しなけりやなんないし、トラックが他の貴族に見つかる恐れもあるが……まあ、何とかなるだろ）」

一時時間軸のズレに対して真剣に悩んでいた勇一は、いつの間にか笑いとその前向きな思考を取り戻し、そんな事を考えていた。

彼もまた、大層な楽道家であった。

授業が終わる鐘が鳴り響き、才人と別れた勇一は未だ倉庫の中にいた。別れる時に才人を送っていかうとも考えたが、それを彼は昼休み走り回ったから一人で帰れると言い、その提案を断った。

よくよく考えて見れば、勇一は才人の主人であるルイズの部屋を知らない。送ると言って最悪二人一緒に迷子になる恐れもあったので、結果的には断られて正しかったと言える。迷子になっていたら、

とても情けない事になっていた事だろう。

さて暇になった勇一はと言えば、倉庫の外で気ままに寝転がりながらひなたぼっこ決め込んでいた。コルベールはまだ仕事のよう  
で研究所には戻ってきておらず、タバサと行き違いになるかも知れ  
ないので無闇に出歩く事も出来ないからだ。

「平和だなあ……陽射しも強すぎ無いし、風も気持ちいい」

さわさわと風に揺れた草が仰向けになっている勇一の頬を撫で、  
広い空には雲が海を泳ぐ鯨の様に流れる。久しく感じていなかった  
心の安らぎ。ついこの間まで戦場にいたのが、嘘の様な平和さだっ  
た。……まあ、世界は違うのだが。

あまりの気持ちよさに段々と眠気が襲って来る。

「あー……やべ、眠くなってきた」

「寝ててもいい。私が見張ってるから」

「そうか。じゃあお言葉に甘えて……ッ!？」

そこまで言っ  
て目を瞑った瞬間、勇一はガバツと飛び起きていた。いつの間にやら隣から聞こえたとても聞き覚えのある声。そちらへ  
目をやれば、すぐそばでこちらを正座しながら見つめるタバサがい  
た。

「タバサか……」

「……ん」

「いつからいたんだ？」

「今。勇一が眠くなってきたって言おうとする直前」

「そうか。気付かなかったよ」

正確には気付かなかったのでは無い。気付けなかったのだ。朝の時もそうだったが、タバサは完全に気配を消してやって来る。それは並の人間では出来ない事だった。

勇一はタバサをよくよく見てみる。その大きな海色の瞳や水色のさらさらとした髪の毛。そしてその肌は白くて艶があり、触るのも躊躇してしまう様な美しさだった。

かなりの美少女である事は誰が見ても間違いは無いであろう。

「（美人には一つや二つ秘密があるとは聞いてたが……タバサは秘密だらけだな）」

「……………どうしたの？」

「いや、何でも無い。それより作戦は成功したのか？」

「……………ばっちり」

勇一は探っていた事を悟られないため話題を作ると、タバサは静かに親指を立てて答えた。

あの作戦とは、偏にルイズに才人を怒らせない為に、彼女をタバサが説得する事だ。人と話す事が苦手なタバサに出来るかどうか不安だったが、彼女はちゃんとやり遂げたようだった。

「どうやってやったんだ？」

「……丁寧に話せば分かってくれた」

「そ、そうなのか……」

何か言葉のニュアンスに違和感を覚えた勇一だったが、まあ気のせいだろうという事にしておいた。とりあえず成功したことを確認出来ればいい。

勇一はそれからすつくと立ち上がると、倉庫を指差した。

「少し相談したい事があるんだが……いいか？」

「勿論。何でも協力する」

タバサも直ぐに立ち上がり頷く。

「よし……じゃあちょっと来てくれ」

「……ん」

そして二人は倉庫の中に入っていった。

「相談したい事ってというのは、こいつらの事なんだ」

倉庫に入った勇一は、タバサを連れて荷台の上を指した。

「こいつら……昨日見せてくれた銃と弾薬？」

「そうだ。ずっとトラックに積んで置く訳にはいかないし、他の人間に見られてもまずい。だからこの倉庫の隅に一度移したいんだが、手伝ってくれないか？」

勇一は荷台から続いて倉庫の一角を指した。流石にコルベールが豪語していた倉庫も、大型トラックが1台入ってしまうと容積は圧迫される。だが、まだ銃と弾薬が置けるだけの空間は十分にあった。タバサはわかったと言って頷く。

「よし、じゃあ……」

「待つて」

だが腕捲りをしながら勇んで荷台に飛び乗ろうとした勇一を、タ

バサが制止した。

「どうした？」

「私に任せて」

タバサは持っていた大きな杖をスツと前に出す。そして何事かを  
呟くと杖を軽く小さく振った。

すると

「へえ、こりゃあ凄いな。それも魔法って奴か？」

「うん。これは……レビテーション。重い物を動かしたり出来る」

勇一の目の前でふよふよと浮き始める弾薬箱。タバサが杖を更に  
振るとそれは一度に十数個が、まるで風船の様に荷台から離れて宙  
を舞い、勇一が指定した場所に収まる。

手伝おうとした勇一をよそにタバサは『レビテーション』をかけ  
続け、ほいほいと弾薬箱や銃箱を倉庫の隅に整然と積み上げてゆく。  
勇一はその様子をただただ見守るばかりであった。

「凄いな。あれだけあった箱が一つ残らず……」

暫くして勇一は『レビテーション』によってトラックから運ばれ

た木箱の山を見上げる。確か、400箱はあつた筈だ。それが、たった一人の細身の少女によって驚く程短時間で積み上げられたのだ。

勇一はまた一つ『錬金』に続いて魔法の威力を、そして有用性を垣間見たのだった。

正に人手要らず。勇一はタバサの方を向いた。

「さつき見た『錬金』や昨日見たタバサの魔法もそうだが……『レビテーション』だったっけか？ 何だかまだ不思議な気分だな」

一人でに氷が現れ、石が真鍮になり、木箱は宙を飛ぶ。勇一は起こる現象が日々凄すぎて全てを受け入れる覚悟は出来ていても、流石に呆気にとられてしまっていた。

「魔法が無い世界は私には解らない。だけど、魔法はそんなに万能じゃない」

「どっという意味だ？」

「例えば……ん、精神力を使うから使用し過ぎると酷く疲れる」

タバサは小さく息を吐きながらトラックの荷台に腰掛けた。

「そうなのか……今かなり連発してたけど、大丈夫なのか？」

「あれ位ならば問題は無い」

その時、倉庫の中に誰かが入って来た。黒いローブに寂しい頭。

そう、彼だった。

「やあ勇一君！ 待たせてしまった様ですまなかつたね。では先程の続きといこうか！」

タバサはまたふつと小さく息を吐いた。

「コルベール先生！ 少し遅かったですね」

「いや何、少し調べていてね……時に勇一君。これらは一体何なんだい？」

コルベールは倉庫の隅に積み上げられた箱の山を見て言った。

「これはトラックに積んでいた物で、こちらの世界の銃とその弾薬です」

「何と！ これ全てがこの1台のトラックとやらにかな？ 一体どれくらい積んであつたんだい！？」

コルベールはまたもや興味の炎を燃やしながら勇一に詰め寄る。勇一はとりあえず軽くそれをいなしてから答えた。

「そうですね……ざっと銃が200丁、専用弾薬が9〜10万発と言った所でしょうか？」

「200丁……10まん、ぱつ……？」

それを聞いたコルベールは啞然として木箱の山を見ていた。



勇一も苦笑いしながら、良くこんなに積めたもんだと思った。陸軍が誇る7t自動貨車でも、流石に積載量一杯に積んで大丈夫なのかと。しかし速度こそ低下したが、案外大丈夫なもんなんだな。

勇一が頷き感心しながらトラックを見てみると、コルベールが何やら唸りながら呟いているのに気付いた。

「コルベール先生、どうしたんですか？」

「いやはや……200丁の銃に10万発もの弾丸。俄かには信じ難いが、これだけの量を見せられると本当なのだろう。君は一体何故こんな大量な武器を運んでいたんだい？ 武器商人か何かだったのかい？」

コルベールは訝しげに勇一を見た。

「あれ？ 話していませんでしたっけ。俺は軍人だったんですよ。それで軍の輸送部隊にいまして……」

「何と！ 君は軍人だったのかね。通りで制服の様な服を着ているし、雰囲気も普通の平民とは違うと思っただけなのだが……」

「平民、ね……対して変わりませんよ。俺は後方で専ら支援ばかりしてましたから。敵が来たら逃げ回るだけですよ」

「しかし、これだけの銃と弾薬……一体何処へ運んでいたのですかな？ 前線？」

興味深く木箱に触れたり重さを確かめたりしながら聞いてくるコルベールに、勇一は少し苦い顔になった。前線、と聞いてあの絶望的な戦場を思い出してしまったからだ。

「っ……いえ、まあ武器庫の中身の移し替えみたいなものですよ」

それもあったのか、勇一は適当に答えた。本来ならば米軍に明け渡す任務だったが、明け渡した武器は米軍の武器倉庫に一時保管されるのであなたが間違いでは無いだろう。

「ふむ……いや、興味深い。実に興味深い。良ければ私に見せてくれないかね？」

「いいですよ。じゃあ、一度倉庫の外へ行きましょうか」

見せるだけならば問題は無い。それにいい気分転換にもなるだろう。そう思った勇一は、箱の中から銃を1丁取り出すとコルベールを連れ、外へ出て行った。

「いやはや素晴らしい仕組みだね！　そのまるでいにへんりー銃とやらはー！」

勇一による説明を受けた後、コルベールは歓喜していた。ここは

学院の敷地であるから実射こそ出来なかったが、装填の仕組みやら弾薬そして薬莖の構造やらを話して聞かせたのである。

「しかしだ……簡単に装填、撃つ事の出来る銃。1分で10発だったかな？　こんな物が200丁もあり、弾薬が10万発もある。これは今までの戦闘の方式を変えてしまうな……」

「そうですね……出来ればここに隠して置きたいのですが」

「この世界の軍事常識を根本から変えてしまうような代物を、勇一は公に出す事を躊躇していた。

出来るならば、使わなければいけない様な時が来るまで使いたくない。隠しておきたい。勇一はそういう思いだった。

「コルベールもそれを理解してくれた様子で、勇一が話す少し悩んだ後にこの倉庫に隠しておく事を了承してくれた。

「ふむ……倉庫に置いておくのはわかった。ならば、トラック共々『固定化』を掛けてみてはどうかね？」

直後、コルベールが言った。

「コテイカ……ですか？」

「ああ、そういう魔法があつてね。万物の劣化を防ぐ事が出来るのだよ。例えば『固定化』を掛けておけば、何十年経とうと鉄が錆びる事は無い。殆どは物に使うのだが、まあ稀に上流貴族が魚等の生鮮品を輸送する際に使う時もあるがね」

「そんな魔法が……」

もし本当だとすれば、これ程理に適った魔法は無い。劣化による故障も交換の必要も無くなるとすれば、帝国陸軍にとっては喉から手が出る程欲しい力であった。

なので勿論

「ではお願いします。トラックの方を優先的に」

勇一は承諾した。眉唾物の魔法だが、交換部品は無く修理工具も最低限な物しか無い現時点では、頼らない手は無かった。

「わかった。では『固定化』については私が責任を持って掛けよう。そして、その代わりに欲しい物があるのだが……いいかな？」

「欲しい物……ですか？　トラック以外なら……」

「勿論、君の愛着のある物は頂かないさ。何、ちよつとその銃を1丁と弾薬を10発程欲しいんだ。仕組みをもつと理解したくてね」

「……わかりました。交換条件ですし、それならば差し上げましょう」

一瞬悩んだが、コルベールの真摯な瞳と『固定化』の余りにも大きすぎる魅力に負けた勇一は条件を飲み領いた。

「ありがとう。では改めて言うが『固定化』は私に任せてくれたまえ。では、このトラックの仕組みを理解するために昨日の続きといこうか」

「了解です」

それからコルベールにトラックや銃についての講義を依頼された勇一は、西日が射し日が暮れる前まで彼の果てしない探究心の手伝いをした。

「ふう……」

トラックの荷台にもたれ掛かり息を吐く。

何時間経つただろうか？　コルベールは飲み込みも理解も速いが、質問も比例して多い。彼が嬉々とした表情で銃と弾薬を持ち研究所へ戻った今、勇一はかなり疲れてしまっていた。

「さて……」

こんな日は早く帰って風呂に入って寝たい。風呂があるのかはわからないがな。そう思って両手を上に上げて伸びをした勇一は、ある事に気付いた。

「ん……？　タバサは何処だ？」

そう、コルベールが来るまで一緒にいたタバサがいなくなっていたのだ。

「ん？　んん？　何処に行つたんだ？」

まさか一足先に部屋に帰ってしまったのかとも思ったが、彼女が何も言わずに帰るとは思えない。

だが、倉庫の中をくまなく捜しても、タバサは見つからなかった。

やっぱり帰ってしまったのか？

勇一はそう考え、倉庫の外に足を向けようとしたその時だった。

「すー……すー……」

「……ん？」

「すー……んう……すう」

何処からか聴こえる気持ちの良さそうな寝息。

耳を澄ませば、それは荷台の中から聴こえた。

勇一は静かに、音を立てない様にして荷台に回り、寝息の発信源に忍び寄る。

すると、そこには。

「すう……すう……」

「……」

杖を抱き枕のようにして眠るタバサの姿。その何とも気の抜けた、愛らしい寝顔に勇一は自然と何だか心が暖かくなった。

「さてと……じゃあもう一仕事しましょうかな」

部屋の場所は……一応覚えている。疲れてはいるけれど、それは

それ。これはこれだ。勇一は入念に部屋への経路を思い出しながら、杖と一緒にタバサを背中と膝裏に腕を回して抱え上げた。いわゆるお姫様抱っこである。

そして彼は静かに倉庫を後にするのだった。

## 第6話 過去と未来（後書き）

御意見御感想お待ちしております！

些細な事でも良いので是非！



## 第7話 事件（前書き）

暴走したっていいじゃない。人間だもの

## 第7話 事件

次の日の朝食後、勇一は何気なくコルベールの研究所及び倉庫へ行こうと歩いていた。ちなみにタバサは勿論授業のために今は一緒ではない。

だが、勇一の今考えている事はトラックの事でもコルベールの事でも無く、今ここにいないタバサの事であった。

「ふむ……全部包み隠さずに話すのは流石に恥ずかしかったが、効果はあったな」

今朝早くに目覚めたタバサは、またもやあまり眠る事の出来なかった勇一に自分は何故ここに寝ているのかを聞いてきた。勇一は当初恥ずかしくて適当にはぐらかそうとしたが、ある思いから全て話したのだった。それも、抱き上げ方をわざわざ実践してまで。

すると、寝起きの氷面だったタバサの表情が明確に変化したのだ。そしてそれを隠すようにぶいっと後ろを向いてしまったのである。それは勇一がまだ見たことの無い反応だった。

それから食堂に向かって歩いている時も、朝食を食べている時もタバサは勇一に意図的に視線を合わせようとしなかった。

「俺の羞恥心を犠牲にした賭けだったが……やっぱりタバサにも人並みの感情はあるんだな。やったかいがあったもんだ」

一昨日から今朝まで彼の前にだけそっぴい表情を見せて来た夕

バサ。

だが、まだタバサが意図的に表情を顔に出さない理由は全くわかっていない。というか初めて召喚された夜にそんな話が出たが、勇一は敢えて時期尚早として聞かなかった。

しかし、勇一も人の子。タバサの氷面以外の表情が見たくなつたのだ。結果、羞恥心を犠牲に多分成功。これからも合間を見つけてやってみようかな。

そんな事を勇一が考えている時だった。コルベールの研究所へ向かう扉がある廊下を歩いていると、廊下に面した階段の上から何やら大量の洗濯物を抱えた人物が下りてきた。それこそ、こちらからは相手の顔が隠れてしまう程の量だ。

洗濯物の脇から見えるメイド服の様な服と細腕から、女性である事はわかった。

「な、何だありゃあ？」

何にせよあのまま階段を降りて来るのは危険過ぎる。とりあえず声を掛けなくては、と勇一は階段の下へと向かう。

しかし、勇一が声を掛ける前にその予想は……

「えっ……きゃあああッ!？」

「ッ!?!? 危ない!」

案の定、予想通りのものとなった。

盛大に洗濯物を前方に吹っ飛ばしながら、階段の下へと悲鳴を上げながら落ちて来る女性。勇一は急いで彼女の落下点を予測して待ち受け、雹ひょうの様に降ってくる洗濯物に構わずしっかりと彼女を抱き留める。衝撃で床に転げ尻と腰を打ってしまったが、両腕でしっかりと護ったため彼女に怪我は無いだろう。

「痛たた……っ、大丈夫か？」

「え………あ、はい大丈夫です……？」

勇一の腕の中でもぞもぞと動きながら顔を上げる彼女。やや長めの黒髪とぱちりとした黒い瞳を持つ彼女は、タバサと同じか、少し上位の少女に見えた。

そして顔を上げた事によって、少女と勇一の距離は一気に近づく。

「……………」

「……………」

暫し固まる二人。傍目から見れば、それは座りながら抱き合っている間近で互いを見つめるという、かなり誤解される様な体勢になっていた。

そして数秒後勇一の硬直が解けた瞬間、

「わ、わわわわ……も、申し訳ありませんッ！」

少女の硬直も解け、顔を真っ赤にしながら立ち上がり後ずさった。そして後ずさりながら頭を下げた。

「い、いやいいんだよ……君、怪我とかは無かったかい？」

勇一も頭を掻きながら立ち上がる。何と言うか……凄く可愛い。

「い、いえ私こそ前を見ていなかったもので！ 貴族様にとんだ

粗相を致しました！」

「ん……？ 俺は貴族なんかじゃないぞ。何か誤解していないか？」

「え……？ でも、貴方様の様な服は見た事ありませんし……使用人でも学院の衛士にも見えませんし……」

小首を傾げ、訝しそくに勇一を見る黒髪の少女。彼女はどうかやら勇一を貴族だと勘違いしているようであった。

「ああ、俺はそのどれでもない。まあ強いて言うならば……使い魔、と言えばいいのかな」

「んう？ ……あ！ あなた、もしかして今期の春の使い魔召喚儀式で召喚されたって言う……」

勇一が言葉を選ぶ様に言うと、少女はぱんと手を叩いて言った。どうかやら納得したようだ。

「そうそう。俺はタバサに召喚されたんだ。というか、君は知ってたのかい？」

「はい。前代未聞の平民を、それも二人も召喚したって私ども使用人の間でも噂になってますわ」

疑問が晴れた少女は一転して明るい笑顔になった。その笑顔は素朴で、彼女が持つ“凄く可愛い”と言う美貌に絶妙の調味料となる。それは勇一もつつ、ときてしまう程に。

「っ……そうだったのか」

「はい。ところで、本当に危ない所を助けて頂きありがとうございます。私はこの学院で働くメイドのシエスタと申します。お名前をうかがってもよろしいでしょうか？」

少女はぺこりと的確な角度で頭を下げて完璧なお礼を見せ、自己紹介をする。

「俺か？　俺の名前は本多勇一。よろしくな」

「……？　変わった名前なのですな。でも、本当に助かりました。あのまま落ちていたらお仕事が出来なくなっていたかも知れません」

少女　シエスタは若干青くなりながら階段の上を見た。

「たまたま通りかかったただけだよ俺は。男だったら当然の行いさ。それに　君の持っていた物までは救え無かったしな」

勇一は苦笑しながら辺りを見回す。

「あ……」

シエスタも同じく。

そこにあつたのは、階段からその下の床まで所構わず散らばる大量の洗濯物。上着もあれば下着もある。靴下もある。シエスタがしているようなエプロンもあった。

そして一様に汗で汚れたそれらは、床の汚れが付着して更に状態を悪化させている。

一つ幸いだったのは、それらが今から洗う所だったという所か。

「こんなもの、洗う手間が少し増えただけですわ。謙遜しないで下さいな」

シエスタは一通り惨状を確認すると、勇一にそう笑いかけて落ちている洗濯物を拾って桶に入れ始めた。

勇一もそれを見てすぐに一緒に拾い始める。

「手伝うよ」

「大丈夫ですよ。一人で出来ますからお気になさらず……」

「いや、助けて自己紹介してはいさよならじゃいかんだろ。折角だから手伝うよ」

「そうですね……ではお言葉に甘えさせて頂きますね」

親切心もあり、良い経験になりそうだという事もあったが、勇一にはどうにもシエスタが赤の他人とは思えなかった。髪の色と瞳の色のせいだろうか？ 勇一は彼女の容姿に、何だか少しだけ故郷日本の匂いを感じ取っていた。

結局洗濯物を洗い、干す所まで手伝った勇一はシエスタと別れた後、タバサと合流し『錬金』の授業と一緒に受けた。

魔法の授業自体はよく分からないものばかりだが、今のところ『錬金』の授業だけは面白く感じたからである。石ころや土が呪文一つで金属に変わる等、元いた世界では絶対に体験出来ないものだった。

そして更に少しばかりの時間が過ぎ、勇一は今タバサと共に昼食をとっている最中であった。

「……………」

勇一が食している料理はまた彼には慣れない脂を使った洋食ばかり。味は悪く無い。というか貴族が使う食堂だけに、かなり美味い部類に入るだろう。



しかし、和食が食べたくなるのもまた事実。  
味噌汁とか豆腐とか納豆とか……………だが、どうするべきか。

「……………勇一」

勇一が食べながら和食について考えていると、隣に座るタバサから声が掛かった。

「ん……………何だ？」

思考を中断してそちらを見る。タバサはまたべらぼうな量の料理を食べていた。

表情は無表情に戻っていたが、一体その小さな身体の何処にそんな量の食べ物が入ると言うのか。相撲取りも負かすんじゃないかと勇一は思った。

「さっき食べる前に何をやってたの？」

「何って……………何を？」

「こつやって手を合わせてた」

タバサはそう言ってスプーンを置き、自分の胸の前で手を合わせた。

「ああそれは食べる前にやる事なんだ。こつちでもなんか始祖ブリミルだの女王陛下だの言ってるだろ？　じゃなくて俺がいた所では、手を合わせて『いただきます』とやるのが昔からの慣わしなんだ」

「イタダキマス？　それはどういう意味？」

「それはなあ……………今、こうして食べている物達は誰が作ったんだ？　そして、元は何だったんだ？」

勇一は料理を指しながら言う。無論、タバサにそれが分からない訳は無い。

「作っているのは厨房で働いているコックやメイド達。そして元は……………魚や豚や鶏や野菜」

「そう。作っているのは料理人だ。一つはその作って貰った人達や、食材を生産した人達に感謝する為に言うんだ。だけど、もっと大事なもう一つの意味がある」

「もう一つの意味？」

タバサは復唱し、首を傾げながら勇一の話の聞いている。どうやら興味を示したようだ。

「コックの後に言った食材達は、元は何だったのか。それはわかるな？　それは俺達と同じ」

「生き物？」

「そうだ。魚も鶏も豚も、野菜も皆元は生きていたんだ。それらたくさん命を貰って俺達は生きながらえている。だからいただく命を『いただきます』なんだ」

勇一がそう言うと、タバサはハツとした顔になった。

今までそんな事は考えた事も無かった。だが、考えて見ればそうである。タバサが好きなハシバミ草のサラダも、元はハシバミ草と言う植物であり“生き物”なのだ。

「別に始祖ブリミルも女王陛下も飯を直接作ってくれた訳でも、自分で食料を生産して出荷した訳でも無いだろ？　まあ、でも国によって思想の違いはあると思うけどな。俺がいた所ではそう考えるっただけだ」

「……いや、その考えは悪くないと思う。寧ろ、その発想は無かった」

トリスティンでは始祖ブリミルと女王陛下に対する感謝を捧げながら食事をする。それはガリアでもほぼ同一だ。

だが、勇一の言う事の方が正しい事のように……いや、正しいのだとタバサは思った。

「そうだったのか？」

「ん。考えてみれば、勇一の言う事は正しい。私も今度からはそうしたい」

「そう思ってくれるのなら嬉しいが……いいのか？　俺の国の慣習だぞ？」

「全然かまわない。作法を教えて」

周りを見ながら確認を取る勇一に、タバサは周りを見ずにぴしゃりと言いつ切る。こうなっては、ここでも彼女は動きそうに無い。

「そ、そうか……なら、次からは自分の胸の前辺りで両手の平を合わせて『いただきます』だ。これだけでいい」

「わかった」

そんなに簡単に自分の国の慣習を捨て去ってもいいのだろうか？

勇一はそう思ったが、内心は嬉しくもあった。だから彼はすぐにタバサに作法（といっても作法と言えない位簡単なものだが）を教えたのだった。

さて、事件が起きたのは二人が食後に出されるデザートを待っている時であった。

勇一は遠くから良く聞いた事のある怒鳴り声が聴こえたのでそこらを見ると、何やら人だかりが出来ている。その中で怒鳴り声の主平賀才人ともう一人、多分学院の生徒であろう貴族の少年が対峙していた。そして、才人の後ろで震えるシエスタの姿も。

これはただ事では無いな。そう思った勇一は静かに立ち上がった。

「タバサ、向こうで何だか揉めてるみたいだ。少し様子を見てくる」

タバサは騒動が起こっている場所には見向きもせず、ただデザートを待つ間の暇つぶしとして本を読んでいるだけだったが、コクリと小さく頷いた。

勇一はずんずんと歩き、人だかりの中へと半ば強引に入って行く。野次馬な生徒達から文句が飛び交うが、そんな物は気にしない。

そして、中心にいる今にも相手に噛み付こうとしている才人の肩に手を置いた。

「一体どうしたんだ才人。何があつたんだよ？」

「あつ本多さん！ 聞いてくださいよ。コイツが

」

才人が勇一に気付き、相手を指差しながら子供が他人の悪戯を報告するようにまくし立てる。相手が全くコイツとは何だねと抗議しているが気にするだけムダだ。

才人の言い分を聞くとこうだ。

曰く、昼食時に近くで他の生徒と話していたコイツが落とした小瓶を、メイドが拾ったのを見た。

曰く、メイドが渡しても、コイツがそれを見て見ぬフリをしていた。

曰く、結局コイツと話していた他の生徒がそれをモンモランシードとか言う恋人に貰った物だとばらし、コイツの二股がバレてしまいいコイツがダブルピンタを食らって周りの笑い者となった。

「……………で、“コイツ”がメイド シエスタに八つ当たり同然の折檻をしようとしたのを、才人が止めてこうなったと」

「そうなんですよ。落とし物を拾ってくれた女の子に手を出そうとするなんて“コイツ”ありえねえ！」

「ああ、男とは思えない程ありえねえな」

勇一は話を聞いて悪ノリしたのか、共に目の前の 何と云うか目を覆いたくなる程痛々しいキザな立ち方と格好をしている生徒を嘲った。周りも「ギーシュ、お前が悪い！」等と煽り、更に悪ノリの渦は拡がっていく。

当然、その渦の中心にいる生徒は面白く無い訳で、ぶるぶると肩を震わしていた。

「なな、何だねキミは！ いきなり入って来て無礼じゃ無いのかね！？」

「おっとそうだったな。俺はタバサの使い魔の本多勇一だ。だが、二股バレル要素を持ち歩いて自爆するアホに無礼も何もねえだろ」

周りがどつと笑いに包まれる。才人も指差しながら腹を押さえて笑っていた。

生徒の顔が羞恥心と屈辱感で真っ赤になる。

「ん、どうしたんだ“コイツ”？ 熱でもあるのか？」

「コイツじゃない！ 僕にはギーシュ・ド・グラモンと言う素晴らしい名前があるんだ！！」

遂に爆発し、食堂中に響く怒声で名乗りを上げるギーシュ。だが、彼は自分に辛酸を舐めさせてくれた二人の顔を交互に見ると、コホ

ンと咳をして腕を組んだ。

「フン……そういえば何処かで君達を見た事があると思ったが……先程の名前を聞いて思い出したよ」

そしてスツと悪い意味で目眩がする様な仕草で、右手に持った薔薇を勇一に向ける。

「君達は確か『雪風』のタバサと『ゼロ』のルイズが呼び出した平民だったね。平民風情に貴族の崇高な意思と行いが理解出来る筈も無かったね。ほら、今なら見逃してあげるからさっさと行きたまえ」

勇一はその言葉に怒るでも無く反論するでも無く、ただ溜息を吐いてやれやれと首を振った。何かもう色々手遅れじゃねコイツ、と。

「はあ……そこまでアホだと逆に称賛したくなるよ。勲章ものだ」

「そうだぜキサザ野郎。一生薔薇でもしゃぶってる」

才人もそれを援護する。ただ、彼は単純に頭にきていた様だったが。

ギーシュの目がすうっと細められる。

「なん……だと……？　どうやら君達は貴族の慈悲さえも理解出来ないみたいだな」

「生憎、俺達は貴族が支配している権力社会なんかはもう時代遅れになった世界から来たんでな。それに、お前達貴族はその平民風情

のおかげで生きて、食っていけるんだろうが」

ギーシュに対して静かに言い放つ勇一。それは彼だけじゃない、今ここにいる全ての貴族に向けられた言葉だった。

辺りが一瞬の静寂に包まれる。

「……………ここまで反抗的な平民は初めてみたね。言いだろう、ならば僕が君達に貴族の礼儀を教えてやるう」

「決闘とか言う気か？ そんな思想自体時代遅れだ馬鹿馬鹿しい」

「そつだそつだ」

相槌を打つ才人と一緒に、付き合いきれんとシエスタの方に行こうとする勇一。

それを見たギーシュは勝ち誇った様に髪をかきあげて薄く笑った。

「逃げる気かい？ 『ゼロ』のルイズはともかく、『雪風』のタバサは優秀だと聞いていたんだが……使い魔がそんな様子じゃあ大した事は無いんだろう。まあ、僕は昼休みの間ヴェストリの広場で待っている。気が変わったのなら来たまえよ。二人纏めて相手をしてやるう」

ピタリと停止する勇一と才人。しかしギーシュは二人の“地雷”を踏んだとは気付かず、キザっぽい高笑いをしながら取り巻きと共に食堂を出ていった。



「……………平賀氏」

張り詰めた空気が解け、駆け寄るルイズとタバサを他所にとつてもなく低い声を出したのは勇一だった。

「……………何でしょうか本多氏」

そして同じ位低い声で返す才人。心なしか二人の喋り方はおかしくなっている。

「今まであまりにも低レベルなので耐えて来たが……ここまでコケにされて立ち上がらない日本男児はいると思うか平賀氏？」

「いいえ本多氏！　そんな日本男児はおりません！　おるとすればそれは最早日本男児ではありませんまい！　臆病風に吹かれたただのヘタレであります！」

「平賀氏。貴様は誉れある大日本の漢か？」

「勿論であります本多氏！」

何やら二人から漂う異様な空気に、心配そうに近寄って来たルイズが瞬く間に引いていく。残っていた貴族の生徒もタバサとシエスタを除いて同様に。

「ならばもう言わずともわかるな？」

「無論！　あの我ら日本の漢を汚した憎き異教徒を、我らが神八百万の正義の光を用いて叩き潰しこの世界からデリートしてやりましょうぞ！」

「よし。それでこそ日本男児だ」

勇一は逃げようとしていた監視役の生徒を蛇の様な腕の動きで捕えると、ひいっと小さな悲鳴を上げて怯える彼からヴェストリの広場の場所を聞き出す。そして異様な空気をその身に纏わせたまま、才人と共にヴェストリの広場へ向かう方向とは違う方へと出ていく。

残されたのは、それを見ていた生徒達とシエスタ、タバサ、ルイズの被害者&当事者の主人達。

「な、何なのよ今は……」

呆然と二人を見送るしか無かったルイズ。しかし……

「カツコイイですわ……」

「……同感。そして面白そう」

「ええッ！？　つか何でそうなるのよ！」

何故か羨望と好奇の瞳で見つめるメイドと雪風に、反射的にそうつつこむのだった。

「状況は？」

「まだよくはわかりません。しかし付近の偵察に赴いた鈴木一等の話によると、ここから北に10km程行った地点に大きな西洋建造物及び、使用人と思われるメイドを発見したそうです。」

「そうか……ご苦労。つたく、一体何なんだよ……このクソツタレな世界は！」

副官と思われる部下の報告を聞き終えた男は、悪態をついて窓が全開だった運転席のドアを荒々しく開けて地面に降り立った。衝撃で男が乗っていた大型六輪トラック　二式大型自動貨車が左右に少し揺れた。

続いて男　この部隊の隊長である瓜生正利うりゅう まさとしは、筋骨隆々とした逞しい腕で無精髭を撫でながら辺りを見回した。

あの突然前触れも無く起こった日食と、それに続いて降ったそこだけ小さな台風が通過したかの様な豪雨。

気付けば、何処とも知れぬ森の中を走っていた。

直ぐに状況の把握と部隊点呼を行ったが、付いてきていたトラックは全13両中4両のみ。隊員も総員30余名の内半分以下の11名。それでも混乱に陥ろうとした残存部隊を纏め上げ、状況把握と情報収集に努めたのだが……、

「はっ、でっけえトカゲに空飛ぶライオン。極めつけはドラゴンに二つの月ときた。ったくいい年こいてメルヘンチックな夢でも見てんじゃないかと自分の頭を疑いたくなるぜ……」

全くもってわけがわからなかった。これが夢ならば、幻覚ならばどれだけ幸せだった事だろう。しかし、隊員全員が同じ物を同じ場所と同じ時間に見ている辺り、これは『現実』だ。ここがどんなにお伽話な世界でも、それを認めなければ部隊を纏める人間はやっていけない。

瓜生は無精髭から手を離しめんどくさそうに舌を打つと、声を張り上げて号令を掛けた。

直後、一列に並んだトラックのドアが開き、隊員達が開いたドアや後方の荷台から素早く飛び降り瓜生の前に整列する。まるで事前に打ち合わせが済んでいたかの様な行動の素早さと正確さ。軍上層部からどれだけ軽視され冷遇されようと、彼等もれっきとした“軍人”なのだ。

整列した隊員達を端から端まで一瞥し、瓜生は腕を組む。隊員達もまた、色々な意味で逞しい男達ばかりであった。

「昨日この近辺で大型建造物と人間が発見された。こんな驚き桃の木な場所だが、人間が住んでいるのが確認出来たのは幸いだ。そして……桜井一等！」

「はっ！」

瓜生が呼ぶと、整列した隊員の中から坊主頭に軍帽を被った長身の兵士が応えた。

「昨日この湖畔で見つけた物を皆に報告しろい！」

「はっ！ 昨日この小さな湖の対岸に於いて、複数の足跡と真鍮製の薬莢……そして我が軍の自動貨車と思われる轍わだちを発見したであります！」

桜井の報告に、隊員達がどよめく。

「よし。推察するに俺達以外にもこの世界にやって来た奴らがあり、おそらくはあの建物の中にいる。部隊員なのが望ましいが、昨日の鈴木一等の偵察では使用人のメイドしか確認出来なかった。更に、我が隊の食糧も心許ない。よってこれより前進し、確認と食糧調達を兼ねて現地人と接触する！ 野郎共、忘れ物はするんじやねえぞ！」

「うおおおおおおお！！」

隊員達が腕を振り上げて獣の様に叫ぶ。別にこれから攻めに行くわけでも無く、しかも自分達は輜重隊だ。なのに場を支配する熱もとい暑苦しさは、隊員達のストレスや鬱憤のせいなのかもしれない。

それを満足げに眺めていた瓜生は、思い出した様に腕を組み直すと隊員達の熱を冷まし、再び隊員の名を呼ぶ。

「解散の前に聞きたい事がある。鈴木一等！」

「はっ！」

隊員の中から黒髪を大雑把に伸ばした青年が一步前に出て来た。

「貴様が見た使用人はどうだった！　話は通じそうだったか！」

「はっ！　見た目は日本人の様でありました！　話している言葉も日本語でしたので、話は通じると思っています！」

それを聞いた瓜生は少し言葉のトーンを落として、

「……………容姿は？」

「はっ！　可愛かったであります！　後、私の予想であります  
が……………」

鈴木がわきわきと両手の指を動かし、続いて自分の胸の前で円を描く様に両手を動かした。

「あれは大きかったですであります！」

「よし野郎共解散だ！　めんこい娘に会いに行くぞ！　急行で準備しろい！」

うおおおおおお！！

それは確かに、この残存部隊の士気が最高潮に達した瞬間だった。

同じ頃トリスティン魔法学院に於いて、食堂で何回もくしゃみをして怒られるメイドが一人いたとかいないとか

## 第7話 事件（後書き）

御意見御感想お待ちしております。



第8話 変化(前書き)

こんにちは久しぶりです。

いつもながらのグダグダ具合ですが、どうぞ。

## 第8話 変化

「何？ オーステンデの沖に見知らぬ船団が現れただと？」

「はっ。昨日住民が沖にある島に停泊している数隻の船を見たとの事です」

勇一達が決闘の準備をしている頃。

トリステイン王国の首都『トリスタニア』にある王宮に複数存在する執務室の一室。枢機卿用に拵えられたその部屋の中で、一人の男性が使者の報告を聞いていた。

坊主がかぶる様な丸い帽子をかぶり、灰色のローブに身を包んだ頭も髭も真つ白な男性だ。手も骨張り、刻み込まれた様な深いしわは歴戦の老人を思わせるそれだが、それでもまだ彼は四十代。先王亡き後の激務が、彼の姿をすっかり変えてしまったのである。

「陛下のゲルマニア訪問がもうすぐ先だと言うに……何処の国の船でも無いのだな？」

漸くレコン・キスタに対抗するためのトリステイン・ゲルマニア同盟が軌道に乗ろうとしていたこの時期に、トリステイン北部にあるオーステンデ沖に不可思議な船団の来訪。また年甲斐も無くしわが増えると歎きながら、彼 マザリーニ枢機卿は確認した。

「はっ。我らが乗る船と形は似ているようですが、あのような船は

見た事がありません。また、水上に留まり翼が無い所を見ると空を飛ぶ事は出来ないようです。これから察するにアルビオンは勿論、ガリアでもゲルマニアでもロマリアでも無いでしょう」

「では一体何処の国だと言うのか？」

東方世界『ロバ・アル・カリイエ』との交流は絶えて久しく、ゲルマニアの東も幻獣や竜が跋扈する大森林で未だその先に交流がある国は無い。

「はっ……目下調査中ですが、最初にコンタクトを取ろうとした漁民が弓矢で追い返されてしまい、領主が手勢を率いて監視するとの事です」

「……………その船団に動きは無いのだな？」

「はっ。私が現地を出立した時までは表立った動きはありませんでした」

「ならば、なるべく穏便に済ませよと領主 あそこは確かカツセル伯であったな……彼にそう伝えよ。今はそれよりも重要な事が目前に迫っているのだ」

目前の事。それは勿論ゲルマニアとの同盟締結ための婚姻外交の事だ。

レコン・キスタが勢力を急速に拡大している今、衰退に転じているトリステイン王国を生き延びさせるには、他国と結ぶしか無い。生き延びれば復興の道も模索する事が出来る。今は謎の船団に構っている暇は無かった。

「しかし……攻撃を仕掛けてくるかも知れません」

「それでも、こちらからは断じて仕掛けてはならぬ。しかし、もし攻撃をはつきりと受けたならば反撃してもよい。だが深追いはするな。同盟が結ばれるまで他のどの勢力とも事を荒立てるような行いはしてはならぬ。よいな？」

二度は言わせぬと、マザリーニは使者に目を細めながら言った。

「はっ……仰せのままに」

使者はそれ以上は何も言えず、恭しく礼をすると足早に執務室をでていった。

マザリーニはそれを確認すると、執務机に用意された豪華な装飾が施された椅子に座る。座ってから目を閉じ右手で瞼の上から両目をグリグリと軽くほぐした。

「……………姫様にはお気の毒だが、これしか伝統ばかり優先して状況を省みず衰退した我が国を救う方法は無いのだ。頼むから同盟が締結されるまで、何も起こってくれるな……………」

レコン・キスタに姫様 アンリエッタの我が儘に、謎の船団。マザリーニはまた頭が痛くなる要因が増えるかもしれないと嘆き、深い溜息を吐いたのだった。

場所は変わってトリスティン魔法学院にある広場の内の一つ、『ヴェストリの広場』に生徒達が集まっていた。

少し前に貴族であるギーシュ・ド・グラモンに喧嘩を売った平民二人を、彼がどう料理するのか見物で来たのだ。貴族同士の決闘は御法度だが、相手が平民であれば問題無い。もし教師に咎められても“制裁”という言葉で片が付く。

そして決闘とはそれ即ち闘い。

女子はともかく、血気盛んな男子にこれ以上の娯楽は無いだらう。生徒同士の賭けも行われていたが、とある罰ゲーム的に平民へ賭けさせられた一人の生徒を除いて、賭けに参加した生徒全員がギーシュへと金銀銅貨を投じていた。

がしかし、決闘の開始直後から生徒達のギーシュへの期待は粉々に打ち碎かれる事になる。

「なっ……ワルキューレツ！」

ギーシュは焦っていた。

開始直後に自慢の青銅ゴーレム『ワルキューレ』を2体出して1体ずつ平民の使い魔達に向かわせた。平民は銃と短剣で武装していたが、所詮は銃等威力が弱い上に単発式。短剣等は論外だ。直ぐに決着は着く。僕の自慢の戦乙女達が愚かな敵を可憐に蹂躪するのだ。

ギーシュはそう思って疑わなかった。

……それなのに。

「どうしたア、もう終わりか貴族様？」

「はっ、日本男児舐めんなよキザ野郎が」

何故、2体のワルキューレが一瞬で崩れているんだ？ 何故胸体に大穴を開けられ、胸に短剣を突き立てたれ脆くも崩れ去っていくんだ？

「おいおい……貴族様がわざわざ私達の様な“平民風情”に礼儀を御教授下さると言っていて受けてみれば……何だこりゃ。おままごとか？ まだあのクソ教官の指導の方が厳しかったぞ」

銃を持った平民が、懐から出した円筒系の良くわからない物を銃の中に込めながら言う。

「ほらほら掛かってきなキザ野郎。俺も拳にはちょい自信があんだぜ？」

「くっ……平民風情が馬鹿に……調子に乗るなよ！」

短剣を持った平民に手の平をくいくいと曲げて挑発され、ギーシユはキレた。易々と乗ってしまったのである。

ギーシユは薔薇型の杖を降り、5体のワルクユーレを出現させる。そして、その内1体を短剣を持った平民に向かわせ、残りの4体で銃を持った平民を取り囲む。

激昂していても危険度の高い敵を優先的に攻撃する辺り、流石は軍人の家系であるグラモン家と言った所か。

「僕は伊達に『青銅』を名乗っている訳では無い。さあやってしまえワルクユーレ。今度こそ戦乙女の舞いによって終幕にしよう」

ギーシユはほくそ笑みながらワルクユーレ達へ杖を水平に降って指示を出す。

4体の集中攻撃で銃を持った平民を倒し、続いて牽制に短剣を持った平民へ放った1体と共にそいつを倒す。完璧だ、今度こそ勝てる。僕に、貴族に盾突いた平民を正義の名の下に成敗できる。

ギーシユはそう、思った。二人の左腕の一部分が光っている事は気付かなかつた。

「4体がこっちに来たか……だが、甘いなあ」

マルチイニ・ヘンリー銃に弾丸を装填し、トリガーガードの下に付いたレバーを上げて装填口フロックを閉めた勇一は、4体のワルキューレが向かって来る事に気付く。気付いて、ニヤリと笑った。

そして彼は言いよつの無い昂揚感に浸りながら、取り囲むワルキューレの1体に躊躇無く引き金を引いた。

重く轟く銃声。正面のワルキューレは胸に穴を穿たれ、弾かれた様に倒れながら消滅する。

「銃は装填するまでが弱点？　甘い、チョコ乗せたケーキの如く甘いなッ！」

後ろ左右から迫るワルキューレに言い放つ。言い放ちながら、振り向きざまに右から迫るワルキューレに銃を“突き刺した”。

銃に“バスターにナイフを刺すかの様に”貫かれあっさりと消え去るワルキューレ。勇一は崩れ去るワルキューレから銃を抜き、左から来るワルキューレが彼の顔を狙って振るった右の拳を姿勢を低くして避ける。そのまま一步踏み込み、懐に入る様にして銃を青銅製のワルキューレの腹に突き刺した。腹部を貫かれたワルキューレは、やはりあっさりと崩れ去ってゆく。

辺りがどよめき始めた。皆が皆才人と勇一、そして勇一の持つ武器を見ている。

「タバサ、あなたの使い魔……ユウイチってすごく強いじゃない！　しかもあの見たことの無い銃の性能も凄いわね！　まさか銃の先に短剣が取り付けられる様になっているなんて凄い発想だわ



！」

タバサと一緒に見に来ていたキュルケが後ろからタバサの肩を掴みながら興奮していた。

だが、タバサは答えない。剣を着けられる銃も凄い物だが、それよりも目を奪われるものがあつた。

「何見てるのよタバサ。んー……ユウイチの左腕？　何か光ってるわね。ルーンが輝いてるのかしら？」

確かに、ここからでも分かる位勇一の左腕の一部が輝いている。キュルケからはそのルーンが何て書いてあるのかまではわからなかった。しかし、タバサはキュルケの問い掛けにも応えずただジツとその左腕を凝視していた。

一方才人が牽制役のワルキューレを撃破した事で闘いの帰趨は決まっていた。勇一と才人はゆっくりとギーシュへ歩み寄る。

「ひっ……わ、ワルキューレッ！　僕を護れッ！」

恐れをなしたギーシュが半泣きで勇一に差し向けたワルキューレの最後の1体を呼び戻し、自分の前に盾として配置する。しかし、顔を見合わせて頷いた二人の繰り出した銃と短剣の同時突きにより、あえなく最後のワルキューレは消え去った。

「ひいッ……」

「まさか『銃剣』も知らないとはなあ。いや、それも想定範囲内  
つちゃあ範囲内だが。それはそうと、まだやるか気障な貴族様？」

恐怖のあまり尻餅を着いて後ずさるギーシュの面前に、勇一は容  
赦無く銃の先に装着された銃剣の切っ先を突き付けた。全長63  
5cmあまりの銃剣の刀身が鈍く光り、ギーシュは息を呑む。

才人は後ろで天誅！ 天誅！ とか言いながら下卑た笑みを  
浮かべていた。

「い、いや……参った、降参だ！」

「平民如きがなんだって？ さつきそう言っただけ無かったか？」

「す、すまなかった！ 訂正する！ もう言わないから助けて  
くれッ！！」

ギーシュは半泣きになりながら両手を高々と上げ、薔薇の形をし  
た杖を地面に捨て置く。

勇一はその目の前数cmに銃剣を突き付けたままギーシュを睨み  
つけ、

「もうメイドや使用人、その他の平民を蔑まないと誓え」

「は、はいッ！ ちち、誓います！」

ギーシュはふるふると首を上下に振った。もう戦意は完全に喪失  
していた。

「その言葉、確かに聞いたぞ。もし違えられた時は……分かってるな？」

勇一の突き付ける銃剣が、銃口がキラリと光る。

「は、はいッ！！」

「よし。才人もそれでいいな？」

確認した勇一はちびりそうになっているギーシュから銃を放し、肩に担ぎながら後ろの才人を振り返る。

「ちよつと不満すけど……何だか気持ち良かったからそれでいいですよ。良かったなキザ野郎」

才人が吐き捨てる様に言うと、ギーシュがビクリと肩を震わせた。

「よし、この勝負俺達の勝ちだな」

勇一が才人に言う。顔はニヤリと嬉しさを押し殺したような笑みを浮かべていた。

「ふふふ……大和魂はファンタジーなんかには負けはせんのですよ  
才人も同じ様に笑う。」

そして二人はどちらからでも無く、固く手を握り合い握手を交わす。

お互いの健闘を（ちよつとちびつてしまったギーシュ抜きで）讃えあつた二人の身体を、心地好い春の風が吹き抜ける。続いて、見えていた生徒達の歓声が沸き起こつた。

「勝つてしまいましたね」

「そうじゃのう……」

トリスティン魔法学院の学院長室。そこにコルベールともう一人、この魔法学院の学院長を務めるオスマン氏がいた。彼等は一部始終を『遠見の鏡』と呼ばれるマジックアイテムで覗き見た後、一様にして信じられない物を見た様な表情を浮かべていた。

「やはり、あの少年は君の言っていた通りのようじゃつたのう」

オスマンが白いたつぷりとした髭を弄りながら言つた。

「そうですねー!? やはり彼は伝説の使い魔『ガンダールヴ』

「！」

「ふむ、確かにのう……だが……」

「そうですね……」

ルイズが召喚した平民の使い魔が限りなく『伝説』の使い魔である事を確信したにも関わらず、彼等の心は釈然としないままであった。その原因は、もう一人の“平民の使い魔”にある。

「……正直に言ってあの少年よりも、一緒に戦った青年の方が明らかに強かったのう。ミスタ・コルベール。君は彼と親しくしていたそうじゃが、これをどう見る？」

「そうですね、彼の乗っていた乗り物……これは馬が無くて馬以上のスピードで走れる素晴らしい物なのですがそれは追々。それと積んでいた荷物と彼の服装から察するに……彼は間違い無く軍属の人間でしょう」

コルベールが頭の中でトラックの事が暴走しそうになりながらも冷静に言った。

「ふむ……ならばあの動きには納得じゃのう。だが、どうも彼もルーンの影響を受けておるようじゃな。ミスタ・コルベール、彼のルーンも調べたのかね？」

「いえ……実は、彼のルーンは少々特殊でして。見えないのです」

「なんじゃと？」

オスマンがぴくりと左眉をひそめる。

「いえ、完全に見えないわけではないのですが……通常では薄過ぎる何と書いてあるのかわからなかったのです」

「そんなルーン聞いた事無いわい。おぬし、髪に続いて視力まで無くなったと違うか？」

「なっ……私の目はこの通りちゃんと見えてますよッ！」

コルベールは憤然として言った。確かに頭は寒々しくなってしまったが、目までもうろくしたつもりは無い。

「ほっほっほ……軽い冗談じゃよ冗談。それについては追って調べるとしようかの」

「は……」

冗談は年齢と精力だけにしろよエロジジイ、と言いそうになったがコルベールは何とかそれを押し止めた。

「ところで、ルーンはともかく彼が使っている銃を見たかね？  
王軍が使っている銃に似てなくも無いが、性能は段違いじゃ」

「はい。実は私、彼から最近その銃を見せて貰った事がありました  
……」

「ほう、どうじゃった？」

「確かにオールド・オスマンのおっしゃる通り威力・射程・連射性  
……そして先端に剣を装着し近接戦も行える等、王軍のマスケット  
を遥かに超える性能を持つ事は明らかです」

「ふむ……」

オスマンは『遠見の鏡』を棚にしまい、両手の甲を顎につけて考える人となる。

「どうしますか？ 伝説の『ガンダールヴ』の事だけでも王室に報告した方が……」

「いや、それはならん」

コルベールの提案をオスマンは即座に切り捨てた。

「何故ですか？ 我が国に取ってプラスとなる要素ですぞ？」

「馬鹿者。それでまたぞろ王室の腐った貴族共が戦争でも始めんと躍起になったら何とする。臭い物の蓋を開けてしまえば、トリステインはプラス所か破滅じゃ」

「確かに……では、どうされますか？」

「暫くは様子見じゃ。じゃが、決して王室の馬鹿共知られてはならん。よいな？」

オスマンが眉を上げて言う。その眼は老いたりと言えども、確かな光を持ってコルベールを見ていた。

「……はっ！ では私はこれにて失礼致します」

「うむ」

コルベールは一礼すると、静かに学院長室を出ていった。

「さて……………モートソグニルを呼ぶとするかのう」

「……………あのー、タバサさん？」

「……………ん」

ヴェストリの広場を後にし、タバサの部屋へ戻る道中。

「……………」

「……………」

結論から言おう。

彼、本多勇一は今タバサに抱き着かれた状態のまま歩いていた。

「なあ……………そろそろ離れてくれないか？」



「やだ。漸く巡り会えた。絶対に離したくない」

ヴェストリの広場の出口でタバサと合流してからずっとこんな感じだった。自分の左腕に抱き着いたまま、一向に離してくれない。

勿論、勇一には何故彼女が愛しそうに抱き着いてくるのか、何故頬を赤らめているのか等さっぱり解らない。というか今までと変わりすぎだろ！ と勇一は声を大にして叫びたかった。

助けを求めたい。しかし、才人は広場から出て早々にルイズに耳を引つ張られながら何処かへ連れていかれ、キュルケはにやにやと意地の悪い笑みをこちらへ浮かべた後、手を振りながらやはり去っていった。

結論。現状打破の策はナシ。このまま天国の様な地獄、地獄の様な天国を味わうしか無いのであります。

結局、タバサに抱き着かれたまま、他の生徒達に奇異の目で見られながら勇一は部屋へと帰り付いたのだった。

その日の夕方。タバサの部屋。

「なあ、いい加減に離れてくれないか？ そろそろ色々な意味で限界が来るのですが」

「まだこうしていたい」

ベッドに座る勇一と、彼の腕にすぎるタバサ。帰ってからも続くこの状態に勇一は未だ色んな意味で耐えていた。

「わかった。じゃあ理由だけでも教えてくれないか？」

「……………勇一は勇者。私の待ち望んでいた者」

勇一がほとほと困った様子でそういうと、タバサは静かに彼の左腕の上腕を指差した。そこにはうっすらと何か文字が刻まれているのが見える。それは勇一が契約の時に刻まれたルーンだ。何が書いてあるのかは分からないが、それがタバサを激変させたきっかけなのだろうか？

「これか？　これがどうかしたのか？」

「……………『アインヘリヤル』」

「アインヘリヤル……………？」

「そう。高潔な勇者の魂や心を総じてそう言う。先程の決闘の時にルーンが光った。そして確信が持てた」

タバサは言い終わると、再び勇一に擦り寄って来た。今までと全く違う、まるで恋人の様に頬を赤らめて縋<sup>すが</sup>るタバサを、勇一は今になっても愛らしく思った。

だから勇一はタバサの清流の様な水色の髪を撫でた。撫でながら、

小さなため息を吐いた。

「勇者……か。俺は軍人だが、ただの輜重隊のトラック運転手だ。そんな華々しい戦果も無ければ、勇者と言われる程強くも無いぞ？」

「……………それは謙遜。決闘の時のあの動きは素晴らしかった。明らかに実戦を積んだ戦士の動き」

「確かに実家は槍術だったし、銃剣術も習ってはいたが……………」

正直な話、あそこまで機敏に動けたのはルーンのお陰かも知れないと思っていた。

お呪いと言ったら変だが、戦闘をする時や武器を持った時に発生する異常な集中力、そして恐怖感の欠如が起こるのはそうとしか考えられ無い。ルーンも魔法の一種だと言うから、こういう身体系を強化する魔法もあるのだろう。

そんな事よりも。

暫くタバサの頭を撫でていた勇一は、ふと自分の服装を見て顔をしかめる。そして頭を撫でるのをやめ、彼女の両肩を掴んで静かにこちらへと向けさせた。

「タバサ……………正直に答えてくれ」

「……………何？」

タバサは勇一の真摯さに気付いたのか、瞬時に冷静さを取り戻す。

勇一はそんなタバサに切実な思いを込めて、

「……………風呂は何処だ？」

「……………え？」

「いや、だから風呂は何処にあるんだ？ 汗かいたしもう何日も水浴びすらしてない。タバサは俺の臭い気にならないのか？」

「え……………た、確かに」

タバサは改めて勇一の身体の臭いを嗅いでみると、確かにかなり汗臭い。今まで気付かなかったのが不思議な位だ。

タバサは恥ずかしげにちょっと離れると、

「一応風呂はある。でも……………」

そう言ったものの少し迷ってしまった。勇一には使用人用の粗末な蒸し風呂でなく、ちゃんとした生徒用の風呂に入って貰いたい。

しかし、自分は許しても他の生徒が許さないかも知れない。タバサは考える。

「でも、何だ？」

「いや、何でも無い。案内するから一緒に来て」

幸い今は昼過ぎの選択授業。タバサは自分の目的にあまり関係無いその授業は取っておらず、本を読む以外特にする事は無い。そしてこの時間に入る生徒もあまりいない。

ならば、自分が案内して陰から見張っていればいい。誰か来たならそれとなく私の魔法で吹っ飛ばせばOK。タバサは考えた末、そんな結論に行き着いていた。

「そうか。なら早く行こうっ！」

「ん」

そうとは知らない勇一は意気揚々とタバサについていく。風呂に入れば何でもよかった。

……だが。

「……………何か聞こえる」

部屋を出て女子寮の扉を開けた時、タバサが言った。

「本当だ。これは正門の方からだな……………ツ！？」

自分達が今いる寮塔と水の塔の間に正門がある。その外から響き、段々と近づくその音に、勇一は気付けば走り出していた。

そして正門に出た時、それらは幻聴でも幻でも無く確かに勇一の視界に入ってきた。

黒い6つのゴムの車輪に陽光に鈍く光るカーキ色の塗装。

フロントグリルの中心に今は無き栄光を表す金色の星印。

それが4台、形と大きさは違えど隊列を組み旋回しながらやって来る。

そして先頭車のドアにでかかど描かれた『ゴキブリ』のマークを、勇一は忘れる筈が無かった。

それは、まさしく

「俺の部隊だ……ははっ、俺だけじゃなかったのか！」

第8話 変化（後書き）

「ご意見ご感想はいつでもお待ちしておりますよ」

## 第9話 瓜生輜重隊（前書き）

グダグダ感は健在です。

後感想欄は出して欲しい兵器、感想、アドバイス、賛成批判等何でも受け付けていますので気軽に書いていって下さい。



## 第9話 瓜生輜重隊

学院の正門に4台の大きな鉄の馬車が現れたという一報は、直ぐに学院中を駆け抜け抜け大きな騒ぎとなっていた。

馬も無しに移動するその馬車達に、教師生徒使用人を問わない野次馬達の視線が集中する頃には、学院長オールド・オスマンにもその報は届けられていた。

「ふむう……。今期の使い魔試験の折に召喚された青年と共に現れた馬無し馬車……。いや鉄の車と言った方がいいの。それと同じ物が4台もやって来たと？」

「はい。そのようですわオールド・オスマン」

椅子に座り深刻そうに言ったオスマンに、隣に立っている眼鏡を掛けた女性が答えた。長くすりと伸ばされた緑髪と眼鏡が知的な雰囲気醸し出す彼女は、オスマン氏の秘書を勤めるミス・ロングビルだ。

ミス・ロングビルはこの短時間で生徒や他の教師から聞いた話を纏めた紙を見ながら、続けた。

「大きさは多少違えど間違い無い様です。更に召喚された平民と同じ服を着ているとか」

「同じ服を？　もしかして彼らも軍人なのか？」

「わかりませんが、教師達が『馬車が大砲を引っ張っている。他国の襲撃かも知れない』と騒いでいますが、どうなさいますか？」

ミス・ロングビルの報告に、オスマンは彼女の尻を撫でようとした手を止めてうむむ……と考え始めた。

何としても穏便に済ませたい。ガンダールヴの件にしても今回も、外部に漏れる事は避けたい。

悩んだ末に、オスマンは搾り出す様に言葉を発した。

「……………そういえばミス。ミスタ・コルベールは今何処におる？」

「彼等が正門に現れたと聞いた瞬間、大喜びで飛んで行きましたわ」

そ  
れ  
だ。

眉間に皺を寄せていたオスマンの目が開いた。

「よし！ 彼等は一旦ミスタ・コルベールの研究の協力者として迎え入れるのじゃ。処遇もミスタに任せる事とする。そしてこの事を一刻も速く学院中に告知するのじゃ！ 彼等はコルベール先生の個人的な研究の協力者であり、大砲みたいな物は研究材料である」と。良いな！」

「し、しかしそれはいくら何でも強引なのではありませんか？」

オスマンのあまりに無理矢理な策と彼自身の迫力にうるたえながらも諫めるミス・ロングビルだったが、

「カーツ！　嘘も貫き通せば真じゃ！　この位のハツタリかませなくてはトリステイン魔法学院学院長の名折れじゃわい」

ここまで言い切られるともう説得は無理だと思った。無茶ぶり、ここに極まったと。

「……………わかりました。学院の生徒、教師には学院長命令でそのように告知致します」

「おお、可及的速やかに頼むぞい　　あいだッ！」

ミス・ロングビルは自分の尻に伸びるオスマンの手をひっぱたいてから貼紙の作製に入った。コルベールには悪いが、これも学院の余計な騒動を防ぐためなのだ。

ミス・ロングビルが作ったオスマンの署名と印入りの貼紙は直ぐに『土』系統の魔法によって数十枚に刷られ、各教師から生徒に告知された事により、とりあえず騒動は鎮静化したのだった。

その夜、コルベールの研究所兼倉庫では。

「はっはっは！ まさかこんな所でお前に会えるなんてな！」

「瓜生隊長、痛いですって！」

倉庫の隅に置かれた木箱の山に座り、瓜生がその丸太の様な腕を勇一の首に回してほお擦りをしていた。スキンシップのつもりなのだろうが、半ば首と頭を絞められた状態で髭面を押し当てられるのは堪ったものではない。

「はっはっは！ 大事な部下に対する愛情表現だ。この位堪えて見せろい！」

「ちょ、やめッ！？ アッー！」

そんな中、かなり暑苦しい彼等の行動を目の前で見せられていたタバサは流石に耐え兼ねたのか、

「……………そろそろ止めておいた方が」

瓜生にそう言った。

「ん…………？ おい本多、そう言えばさっきからお前と一緒にいるこの嬢ちゃんは誰だ？」

瓜生がタバサを見る。その隙に勇一は痛すぎるスキンシップから

辛くも脱した。

「ふん！　　と痛たた……そういえばさっきのごたごたで説明していませんでしたね。というか説明しようところを訪れた間もなく隊長に拘束されたんですが」

「そりゃ悪かったな！　　それでこの嬢ちゃんは本多のコレかい？  
異世界に来てまでやるじゃねえか」

瓜生がニヤニヤとしながら小指を立てた。

「ち、違いますよ！　　彼女は　　」

瓜生の邪な想像を全力で否定しながら、勇一は話し始めた。

突然目の前に鏡があつてその中に入るとこの世界に来ていた事。

そしてそこで最初に出会ったタバサが勇一を使い魔として召喚し、あの鏡は召喚の儀式で使い魔と主人を結ぶ鏡だったと言う事。

それから成り行きで使い魔になり、この2日間学院で過ごした事等、勇一はタバサの紹介も交えて今まであつた事を瓜生に要約しながら話した。

話しを聞き終えた瓜生は、腕を組んで首を振った。

「なんだ、異世界に1人ぼっちで寂しいから彼女作ったのかと思っ  
たぜ……」

「だから違っつて……ってタバサも何赤くなってるんだ」

見ると、横でタバサが頬を赤らめて何処か上の空だった。

「はっ……ごめんなさい。少し考え事をしていた」

タバサは勇一に言われてハツとなると、直ぐに元の仏頂面に戻る。

そして瓜生も冗談はここまでと、ニヤニヤしていた表情を真剣な  
それへと引き戻した。

「所ですよ。召喚された本多はともかく、何で俺達までこっちに来ち  
まったんだよ？ 嬢ちゃんはわかるかい？」

「……………ごめんなさい、私もそのような現象を聞いたのは始めて」

タバサはゆつくりと首を横に振った。

「そうかい。まあ、本多の話と、外で鈴木達と一緒にいるコルベ  
ルって言う先生の話からしてここがメルヘンたっぷりな異世界だっ  
て事はわかった。それで、だ」

瓜生は一度身体を伸ばしてほぐすと、背後の木箱に寄り掛かった。

「俺達はこれからの行動方針を決めなきゃいけない訳だが……本多、  
何か案あるか」

「そうですね……やはり、当面の間衣食住の調達と情報収集に限るのでは？」

勇一は殆ど即答だった。あらかじめ考えていたからだ。

「ま、そうなるわな。とりあえずはこの世界の把握と、隊員の安全を守らなきゃならん。幸いこの学校の奴らは友好的だから円滑に進められると思う。何せ……」

そう言って、瓜生は立ち上がって倉庫の外を指した。

その先では入口に止められたトラックに、コルベールと他の隊員達と一緒に何かをやっていた。どうやら隊員達がトラックの仕組みや操縦方を彼に教えている様だ。勇一の時よりも突っ込んだ説明らしく、コルベールも熱心に隊員達に手ほどきを受けている。

「まさか、あんなにウチの装備を見て狂喜乱舞する人間がいるとはな。てつきりメルヘンだから科学なんて目もくれないと思ってたから、たまげたもんだぜ」

「俺もそう思いますよ……ただ、心強い味方なのは確かですね」

「そうだな。不幸中の幸いって奴だ」

2人はコルベール達を見て納得した様に頷く。

確かに、こんな訳のわからない世界に来て今まで損害が出なかったのは、そしてこのように受け入れてくれる人々と出会えたのは奇跡……なのかも知れない。だが、2人にとっては未だ消息のわからない残りの隊員の事も気掛かりであった。

そんな時、不意に勇一の着ている軍服が引つ張られた。タバサだった。

「ん、どうしたタバサ？」

「そろそろ寝ないと。明日も授業があるから」

「ああ、もうそんな時間だったか……隊長」

勇一は少し眠そうなタバサを見て、窓から外の夜空を見上げた。それから瓜生を呼んだ。

「おうわかってる。こっちはこっちでやってるから、お前は嬢ちゃんに傍に居てやんな」

瓜生はひらひらと手を振りながら木箱にドカツと座る。

「……………はっ。ありがとうございます」

「いいっていいって。早くその可愛い“ご主人様”を寝所へ連れてってやんな」

敬礼する勇一に瓜生が茶化した様に言うと、

「ははは……では失礼します」

勇一は苦笑いしながらタバサと共に倉庫をでていった。



誰もいなくなった倉庫で、瓜生は1人髭をさすりながら立ち上がった。そして倉庫の入口まで行き、そこから周りを見回し部隊を確認する。

今日の前でコルベールと隊員達が弄っているトラックは、勇一が乗ってきた二式大型自動貨車より少し小さい。これは名前を一式六輪自動貨車と言い、陸軍が昭和16年　1941年に採用した5t積みの軍用トラックだ。

更に倉庫の横に整列する様に止められた残り3台のトラックの内、2台がこれと同型の軍用トラックである。

だが、1番奥に止められた瓜生が乗ってきたトラックは、勇一と同型の二式大型自動貨車のため、整列しているとまるで背くらべをする兄弟の様に見えた。

軽く見渡して異常は無さそうだと感じた瓜生は倉庫に足を戻す。

そしてまた木箱に腰を落ち着けようとして、

「お………そういえばこいつも持ってきてたんだな」

視界の墨に映った1門の大砲に歩み寄った。

魔法で燈された明かりに照らされ黒光りする砲身を、彼はそっと撫でた。

克式七糎半野砲。1873年にプロイセンで開発された、今では旧式化著しい大砲。

……だが、この世界では。

「王様に貴族に平民ねえ。ハン、倉庫で埃被つてたお前さんにも、また光が当てられるかもな」

瓜生はまるで子犬を扱うかのように大砲を触ると、また木箱に腰掛けた。

「ふう……それに召喚、か。全くメルヘンだぜ……」

女子寮、タバサの部屋に帰還した2人。今は並んでベッドに座っていた。

勇一は椅子に座ろうとしたが、タバサの無言の“袖引つ張り”によって阻止されこのようになっていたのである。

「勇一」

暫くして、勇一の袖を離したタバサが言った。

「何だ？」

「……………仲間の所に行きたかったら、いつでも行っていい」

「は？」

「別に、私の所にいなくても……………私は、構わないから」

「馬鹿。なあに言ってるんだよ」

ぴしっ。タバサの白い額を勇一の指が叩いた。所謂でこぴんとい  
う奴だ。

「ッ！？ な……………？」

突然の痛みに額を手で押さえ勇一を見上げるタバサに、

「確かに仲間も隊長も大事だ。けどな、今はタバサも大事なんだ  
よ」

勇一はそう言ってわしゃわしゃと頭を撫でた。

「ん……………でも」

「俺が嫌いになったか？」

「そんな事はない……むしろ……いや、何でも無い。……でも、私は勇一を拘束したくは無い」

……はあ。

勇一はタバサの頭から手を離して、ため息をついた。いくら何でも、ここまで自我を出さないとは。

やはり永久凍土の様な彼女の心を解かすには自分から攻めていくしかない。女性経験が少ない勇一にとってこれは難しい事であったが、何とかタバサの肩を掴んでこちらを向かせると、

「ったく、俺と一緒にいたいからここにいるんだよ。まだ召喚されて2日半しか経ってないが、俺はお前と共に居たい。これは使い魔だからとかじゃない。1個の人間『本多勇一』として、タバサ……お前を放っては置けないんだ」

言い切った。言い切って、くるりと顔を背けた。何だかものすごく恥ずかしかったからだ。やばい、元気付けるつもりが告白みたいになってしまった、と。

そう思った直後、勇一の身体に重しが掛かった。

見ればタバサが自分に寄り掛かっていた。顔は俯き加減だが、頬は少し朱くなっているようだった。

「……でも、私は勇一に隠し事ばかりしている」

タバサがゆっくりと口を開く。

「お、話してくれる気になったか？」

「……………もう少し待って」

「そうか。ま、前も言ったけど無理強いはしないから、言える時に言ってくれればいい。それと、あまり無理はしないでくれよ？」

勇一は慈しむかのように微笑みながら、タバサの頭をさわさわと撫でた。

「ん……………わかった」

「うん。分かればよしよし」

より一層くつついて来るタバサ。どれだけ感情を表に出さなくても、彼女はちゃんと喜怒哀楽を持つ1人の女の子なのだ。

普段は氷点下の雰囲気でキュルケ以外の生徒を寄せ付けないタバサが、今はこうして自分に身体を預けてくれている。身体はともかく、容姿抜群な彼女がそうしているだけで、頭を撫でている勇一は内心どうにかなりそうだった。脳髓を刺激されたとか、意図してないのに股間が俄かにきつくなってきたとか……………。

「（俺に幼女趣味は無い筈何だが……………さっきあんな事言っただしなあ。それに、可愛すぎるのは事実だしなあ）」

確か昨日もこんな感じだった気がする、と勇一は思った。それでも平然と理性を保っていられるのは、男としてのプライドというかタバサのためを思っているというか。

「……………ま、でも俺はタバサを支える事が出来ればそれでいいんだけどな」

「……………何か言った？」

「いや、何でもないぞ」

お節介かも知れない。しかし、勇一の“タバサの力になりたい”と言う思いは変わらない。それは、大事な戦友達と再会しても揺るがない程に。

暫く、2人はそうやって互いの温度を感じていた。そして互いの臭いに気付いて離れるのは、もう少し後の事であった。

## 第10話 任務

それから2日半が経ち、勇一がハルケギニアに来てから5日目の朝を迎えた。

「ん……………？」

軍人としての性が彼は朝いつも決まった時間に起きるのだが、今日はそれにも増して身体に妙な違和感感じ、目を覚ました。

「……………」

「すう……………すう……………」

その違和感の正体 勇一の上に乗っかって寝ているタバサを確認し、勇一は何とも言えない気持ちになった。

「……………今日は上か」

初日からタバサに勧められて同じ布団で寝ている勇一だが、あの夜からタバサは更に寝ている時に無意識なのか、半ば抱き着いて来るようになった。

— 昨日は右。

昨日は左。

そして今日は上、と言つ具合に。

「む……………」

タバサは身体も小さく体重も軽いため重くは無いのだが、上に乗られると如何せん息がしづらい。勇一は何とかタバサを起こさないように行動を開始する。

だが、

「ん…………？」

タバサは勇一が行動を開始して僅か2秒で目を覚ました。

「……………おはよう、タバサ」

「ん、おはよう勇一」

「そしてとりあえずどいてくれないか。流石にこれは色々な意味で  
厳しい」

コクリと若干寝ぼけが混じりながら頷いたタバサを退かすと、勇一はベッドから起き上がり、従軍してからずっと履いてきた靴を履き立ち上がる。傷みはあるがまだまだ履ける事を感じると、大きく伸びをした。

「ふう……………やっぱり風呂に入って洗濯をした服を着て寝ると気持ちいいな」

今まで日に日にとても香しくない臭いが増していた勇一だったが、



この数日はちゃんと風呂に入っているのもう臭いはしなくなっていた。

着ていた軍服もシエスタに試しに洗濯を頼んだ所、喜んで承諾してくれたので久しぶりに気持ち良く着れた。襟に付けられた階級章の2つの銀星が朝日に照らされ光っていた。

余談ではあるが、瓜生と他の隊員達もコルベールの要請により学院長命令で貴族用の大浴場を使う事が許された。最初は他の教師達に反対されたが、コルベールの真摯さと何よりオスマン自身がコルベールに隊員達の世話を押し付けた責任もあつたので、比較的速やかに要求は通つたのだつた。

さて、伸びをした勇一は一度部屋の外に出た。タバサを着替えさせる為だ。別にタバサに言われたからでは無い。何故ならどうにも彼女は勇一に対する羞恥心があまり無く、放っておくとそのまま着替え初めてしまうのだ。

初日から自主的に外に出ていた為気付かなかったのだが、一昨日試しに部屋の中にいたらタバサが平然と着替え始め慌てて飛び出したのは記憶に新しい。

暫くしてドアが開き、いつもの姿となったタバサが出てくる。

「着替え終わったか？」

「うん」

「じゃあ朝飯に行くとしますか」

「ん」

ほぼ全員の生徒が朝食に行くと言ったら、まず学院の本塔にある『アルヴィーズの食堂』を指す。

だが、2人が向かったのはその大多数の行き先に反してコルベルの研究所だった。と言っても目的地はその隣にある倉庫だ。

2人が倉庫に着くと、その前に1人の屈強な体躯の男性が立っている。

「よう！ 今日良い天気だな！」

「隊長もいつにもまして元気ですね」

「2割増しで光ってる」

「おうよ！ 朝昼晩の飯こそ俺達の至高よ！」

丸太の様な太い腕を組んで、身長180cm超えの大男『瓜生正利』は豪快に笑った。

この男その伸び生やした山男の様な髭と、前を全開にした軍服の着方からはおおよそ予想が出来ないが、それでも敗戦前は輜重中隊を束ねていた帝国陸軍“大尉”なのである。終戦後の特進で階級は中佐となっていたが、今でも階級章は大尉のままだ。

更には陸軍士官学校出の本来ならエリートな筈が、何故落ちこぼれとされる輜重隊に配属されたのは、素行不良が祟ったとか何とか。

そんな瓜生はひとしきり笑った後、後ろを振り返った。

「しかし魔法つてのも案外すげえもんなんだな。一晩で倉庫をデカくしちゃった」

「『錬金』でしたっけ。俺も最初は驚きましたよ」

彼らの見つめる先には、勇一のトラックが止められていた倉庫。

だが、その横の長さが前よりも3倍以上に伸ばされている。縦の長さも拡大され、今では倉庫の中に5台全てのトラックが整然と鎮座していた。

また観音開きだった扉も、トラックの数に合わせて5枚に増やされている。

これだけの事をたった一晩で行ってしまうのだから、勇一と瓜生を含めた隊員達の驚嘆と感心もひとしおであった。ちなみにこれを行ったのはコルベールの個人的なコネで呼ばれた土メイジで、彼も科学に興味があり、倉庫を改築する代わりに存分にトラックを見学していったのだとか。

「うーん、うちの軍にこれがあれば色々と楽だったのにな」

「まあ……………終わった事を言っても仕方ありませんよ」

勇一の脳裏に過ぎる光景があったが、それはもう終わった事なのだ。今考えても仕方がない。

「……………そだな。所で嬢ちゃんも魔法使いだっただよな？」

瓜生は深く頷いた後、タバサに視線を向けた。見下ろすと言った方が正しい程の身長差だ。

「うん。確かに私は魔法使い……メイジだけど、それが？」

「いやなに、嬢ちゃんもこういう便利な魔法が使えたりすんのかい？」

瓜生の問いに、タバサはふるふると小さく首を振った。

「私は『土』系統は得意じゃないから、これと同じ事は出来ない。でも、『水』と『風』系統は出来るから暑い時に部屋を涼しくする事は出来る」

「ふーん、そうかい。それなら今度暑い時に是非見せてもらいてえな」

「ん、構わない」

2人の会話を聞いていて、勇一は何だかそれいいなと思った。要は人間扇風機だ。夏の暑い時期には必須の業だろう。

「さてと、そろそろだな」

瓜生が言うとはほぼ同時に、倉庫の脇から兵士が1人出て来てこちらに向かって来るのが見えた。

その兵士は瓜生の前まで来ると姿勢を正し、ピシッと敬礼をする。

「小隊長殿、朝食の用意が出来たであります！」

「おう！　だがな、もう軍隊は無きに等しいしここは軍だとか憲兵とか関係ねえ“異界”だ。そんなにガチガチに畏まん無くてもいいからな？」

「し、しかし……」

「ま、わざわざ報告してくれてありがとよ。だが次からはもちっと肩の力抜いていいからな？」

「は、はあ……」

「よし。わかったら行っていいぞ。俺達もすぐ行く」

瓜生に開口一番にそう言われた兵士は、勇一とタバサに会釈をしながら去っていく。終始うるたえているようだった。

「隊長、あの一等兵は確か……」

「そうだ。終戦後に生き残りて再編成した時に他の隊から引っ張って来た奴なんだが、どうにも硬くなりすぎてみるみてえな。異界くんだりまで終始気張って無くてもいいのによ」

「やっぱりそうですか。まあ、うちの隊が元々隊長のせいであつと砕け過ぎてる面もありますかね」

「うるせい。ほら、さっさと飯食いに行くぞ！」

瓜生はめしいとか言いながら子供の様に倉庫の奥へと駆け出した。

別に壊れている訳ではない。壊れていたら“大尉”にも“中隊長”にもなれない　　はずである。

「勇一。隊長は結構個性的？」

「まあ上官にとっちゃ珍しい特性の人ではあるな。だが良い上官だよ。ほら、俺達も飯食べに行こう」

「うん」

2人は歩いて倉庫の脇へと消える瓜生の後を追った。

朝食後、授業が始まるまでの小休止の時間、2人は自室へと戻り各々の時間を過ごしていた。

タバサは椅子に腰掛けて本を読み、勇一もまた対面に椅子を置いて本を読んでいる。

勿論勇一にこの世界の字は読めない。なので勇一は基礎をタバサに教えてもらってから読書に臨んでいた。それでも分からない所は

多々あるので、その部分をタバサに教えてもらおうと言った形で何とか読んでいく。読書と言っても勉強と同じ様なものだ。

暫くして、タバサがページをめくる手を止めて顔を上げた。

「勇一、共和制って何？」

「ん？　いきなりどうしたんだ？」

「勇一の仲間達が話してる時に聞いた」

「ああ、あの時か……」

あの時とは、先程の朝食の席での事だ。

タバサはこの数日勇一と一緒に朝食を他の隊員達と摂っている。タバサは基本的に勇一とキュルケ以外の人間とは滅多に話さないが、彼等の話が異国情緒に溢れたものであり勇一の仲間だと言う事から、彼女も少しずつ会話に参加する様になっていた。

して、今日の朝食の時隊員の1人がこの世界の政治体制について言及した時、その様な話になったのを勇一は覚えていた。

「共和制って言うのはだな……まず、王様がない。そして貴族も平民も無い、原則的には国民全員が平等な政体の事だ」

「王も貴族もない……？　そんな事が可能なの？」

タバサが怪訝そうな瞳で勇一を見つめた。

「ああ、確かに簡単な事じゃない。だが一般階級の人々……平民や共和制を望む貴族が一致団結すれば、必ずしも不可能では無いな。ちなみにそうやって短期間で政体がガラリと変わる事を『革命』って言っただけだな」

「革命……。それで、政治はどうやって進めるの？」

「国民の中から選挙をして代表者を選び、その代表者達が政府議会を作り、話し合って決めるんだ」

勇一は地球にあったフランス共和国や、アメリカ合衆国、南アメリカ諸国等を思い浮かべながら話した。これは厳密に言えば真の共和制では無いのだが、民主主義を採り共和国と言える国が皆このよ  
うな政体を取っているため仕方がないのだ。

「そう……ありがとう」

「ああ。でも何でいきなりそんな事聞いたんだ？」

「うっん、少し興味があっただけ。気にしないで」

「そうか。それじゃあちょっとこの意味教えてくれないか？」

勇一は開きっぱなしだった本の、ある部分を指差した。

「わかった。どこ？」

そしてタバサが頷き勇一の元へ身体を寄せた時……。



開け放たれた窓から勢い良く1羽のフクロウが飛び込み、その勢いのまま勇一の頭の上に着地した。

「うおっ、何だこいつぁ!？」

「……………ちよっとじっとしてて」

タバサはそのフクロウの足に付けられていた書簡を取る。フクロウはそれを確認すると、一鳴きして窓の外へと飛び去っていった。

「ったく……………伝書鳩ならぬ伝書梟かよ？」

髪の毛を直しながら勇一が唸る。

一方、タバサは書簡を読み終わると杖を取りすたすたと扉へ向かった。

「出掛けて来る」

「何処へ？」

「勇一はここで待っていて。すぐに帰ってくるから」

タバサは勇一の方を見ずに、さっさと話を切り上げて部屋を出ていこうとする。明らかに普通では無い彼女の雰囲気、勇一は何かを感じ取った。

「……………待て、俺も一緒に行く」

ベッドに掛けてあった軍帽を取りながら、扉を開けようとするタ

バサの肩を掴んだ。

「でも、勇一には……」

「関係無いなんて言わせないぜ？」

「……でも、危険」

「だったら尚更だな。お前を1人でそんな所に行かせられるか」

「……………」

タバサは口ごもってしまふ。

これは自分に課せられた運命の様なもの。召喚してしまったとはいえ、そこまで彼を巻き込んでいいものか？

そして更にタバサは自分を信じ優しくしてくれる勇一に、これから見せる裏の顔を見せたくは無いと言う気持ちもあった。

なぜなら……それを見せてしまう事によって、勇一が自分を見る目が悪い方へ変わるのが恐かったから。

しかし、勇一はそんなタバサを嘘偽りの無い、本当に真摯な瞳で見つめていた。

タバサはハツとして考える。勇一は自分の側にいたいと言ってくれたでは無いか。だからこそ危険な目に合わせたくないと思うが、

彼は軍人だ。そんな事くらい覚悟の上だろう。

“巻き込みたくないから” “怖いから” は言い訳で、彼を信用していないのと同義だ。

考えて、タバサはゆっくりと顔を上げた。

「……わかった。一緒に来てくれる？」

「勿論だとも。断る筈が無い」

待っていた答えに、勇一が即答する。

そして2人は互いの信頼を確認するかの様に薄く笑い、部屋の外へと出ていった

## 第10話 任務（後書き）

御意見御感想、お待ちしております。

## 第11話 プチ・トロワ

「えー、タバサとユウイチどっか行っちゃったの？」

トリスティン魔法学院、コルベール研究所の隣の倉庫前。

そこに立ち、やや落胆した声を上げる褐色肌の巨乳美女が1人。名をキュルケ・フォン・ツエルプストー。

「ああ、何だかあの嬢ちゃんにとって重要な用事なんだとよ。ま、3日4日で戻って来るって言ってたから大丈夫だろ」

その対面に立ち、野太い声色で応対する無精髭の濃い偉丈夫が1人。名を瓜生正利。

初対面の2人が何を話しているのかと言うと、それはタバサ達についての話だった。

「もっつ。最近自分の部屋以外ではここにいる事が多いみたいだから来てあげたのに……。あの子、たまにこうやって授業サボってどっか行っちゃうのよねえ」

「ほう。……ま、それだけ大事な用事なんだろ」

瓜生はあっけらかんと言った。

彼も詳しい事は知らない。何処へ行くのかも聞かされていないの

だから仕方ない。ただ、危険な任務であると勇一から言われただけだ。

「ふうん。貴方、彼の上官だったんでしょ？　　気にならないの？」

「俺は部下を信頼してるからな。帰ってくるってんなら帰ってくるんだろうよ。ま、帰って来たら報告は全部聞くがな」

瓜生は髭を撫でながらニヤリと笑う。

「ま、そうね。あの子がいつまでも帰って来ない時は無かったもの……それはそうと、折角だからあのひとりで走る鉄の車を見せてくれないかしら？」

「構わんぜ。だが壊すんじゃねえぞ？」

「勿論よ。私の炎は興味ある物を壊したりはしないわ」

キュルケはある胸を張って言った。

貴族からしたら平民が乗ってきた得体の知れない乗り物に過ぎないかも知れない。だが、キュルケは野次馬根性で間近でそれらを見た者の1人として、少しトラックに興味が沸いたのだ。そしてここへ来た目的の1つでもあった。

「はは、綺麗な嬢ちゃんには特別に乗せてやってもいいぜ？」

「本当？　　それは嬉しいわ」

こうして、2人は倉庫の中へと入って行ったのだった。

「なあタバサ。これ、本当に落ちないか？」

「大丈夫。落ちても私が魔法で勇一を助けるから」

「そういう問題じゃなくて……」

一方、勇一とタバサは先程トリステインの国境を越え、今はガリア上空1000メートルを飛んでいた。

「大丈夫ですって。旦那が騒がない限り俺たちの火竜ちゃんは旦那を振り落としませんから」

勇一の不安を聞き、前に座り火竜の手綱を握る30代程の男性が軽快な口調で答えた。

「うーん……けど、竜で人を運ぶ事業があるなんてなあ」

「他に大貴族様や王族方が使う竜籠つてのもありますぜ。ただ俺たちみたいな竜騎士崩れの竜使いは普段、運び屋をしてるんですけど

ね

「運び屋？」

「そうです。連絡を受けて金を貰ってあっちへ運びこっちへ運び。竜なら人じゃ運べない重い物を馬車より早く運べますからね。ま、最近では竜騎士の連中が小遣い稼ぎでこっちの仕事に割り込んで来たおかげで仕事が減って困ってるんですけどね」

なっはっは、と男性は軽快に笑った。

タバサと学院を出て数時間。

最初は南にある大国『ガリア王国』の都にある『ヴェルサルティル宮殿』へ向かうとタバサが言ったので、高速な公共交通機関が無いこの世界だとどれだけ時間を消費するのかと勇一は思っていた。

しかしタバサと共に学院からトリスタニアへ向かう街道から少し外れた場所にあった小屋へ行き、この男性と火竜と出会い話を聞いた勇一は成る程納得した。この火竜の最高速度は150キロメートル程。それならばあまり時間は掛からない。

問題は竜そのものであったが、この火竜見かけに寄らず物凄く大人しく、男性の命に素直に従い勇一達を乗せて力強く飛び上がった。

そして、今に至る訳である。



「（安全設備皆無……いや、タバサが魔法使うって言ったな）」  
でも、怖い物は怖い。時折風でぐらつくのが最も怖い。しかし、  
この男性もタバサも平然としている。タバサなんか本を読んでいた。

……………慣れれば大丈夫なのだろう。多分。

そう自分に言い聞かせた勇一を乗せた火竜は、一路ガリア王国首都『リュティス』へと向かって飛んでいった。

ガリア王国首都『リュティス』の東の端に王族が住まう宮殿『ヴェルサルテイル宮殿』がある。人口30万　ハルケギニア最大を誇る都市にあるその宮殿も、その名に恥じない巨大さと壮麗さで有名であった。

そのヴェルサルテイル宮殿の主たる薔薇色の大理石で組まれた『グラン・トロワ』より離れた場所にある薄桃色の小宮殿、『プチ・トロワ』に於いて1人の少女が退屈そうに居室の1番上座にある上

質な椅子に座っていた。

細い蒼色の瞳を持つ目に、背中に端正に整えられて垂らされた長い水色の髪。それだけで彼女　イザベラ・ド・ガリアは王族の血統を持つ由緒正しい家系の出身である事が分かる。

「ふああああああ………全く、まだ来ないのかしらあの人形娘は」

イザベラは白く、タバサと同じ触れば汚れてしまいそうな程美しい頬に手を当てて肘を椅子の肘置きに突き、けだるげな表情で大あくびをする。それは彼女の芸術の様な身体とそこから溢れ出る気品さを、一瞬で台なしにした。

暫く足などを組みながらそうしていたかと思うと、イザベラは椅子の脇に垂らされていた紐を引っ張る。

すると、すぐに部屋に3人の侍女達が駆け込んで来た。

「お呼びでございますか？　殿下」

3人の内、真ん中に立っている侍女が恐る恐る口を開いた。

「退屈でしょうがないわ。あの人形娘はまだ来ないの？」

「じゃ、シャルロット様ならもうそろそろ御到着する頃かと……」

侍女が言った。そして言うてから自らの“失言”に気付いた。

あ………と言う間もなくイザベラの細い目がキッと吊り上がる。

「だから、あの子はガーゴイルで十分！ “人形”で十分よ！  
何度そう言ったらわかるの!？」

トロール鬼の様な剣幕でまくし立てるイザベラに、侍女達は竦み上がりひっ……と短い悲鳴を上げる。

イザベラは怒鳴り終えると、また気だるげに椅子に肘をつき始めた。

「まったく、折角久しぶりにベッドでは無く玉座で待っていてあげていると言うのに！ それに父上も父上だわ！ 私はほんとうに王家のお役に立ちたいのに、与えられた任務がこの『北花壇警護騎士団』の団長任務だなんて……。こんな裏方で地味な仕事、退屈でもううんざりだわ！ 父上は一体何を考えるのかしら!？」

侍女達は再び震え上がり、出来るならば頭を抱えたい気持ちになった。

この高慢で短気、それでいて意地悪なイザベラとは接するだけで寿命が半分になる程神経を使う。王家に仕えるという事は大変な名誉であるのだが、それを差し引いても侍女達は一樣に心の中でうなだれていた。不幸だと。

「あ、あの……イザベラさま……」

そんな時、イザベラから見て右に立っている侍女が震える声をあげた。年のころは15、6歳であろうか。まだ目新しいメイド服に身を包んだ、初々しさが抜けていない侍女であった。

「うん？」

「少々、イザベラさまに恐縮ながらお聞きしたい事がありました…」

年若い侍女の言葉に、他の2人の侍女はぎよつとして彼女を見た。

この暴君姫に質問など、それこそ恐れ多くて侍女達の中では禁忌タブーとされている事だ。彼女は最近ここへ配属された新人であったから特に厳しく言い付けていたので、まさか実行してしまうとは思ってもみなかった。

しかし、当のイザベラは意外そうな顔をしていた。

「へえ……あなた、新入りかい？」

「は、はい……1週間前にここへ来たばかりです」

「そうかい。どれ、顔を良く見せてみな」

イザベラが扇を閉じてくいくいと自分の方へ来る様に彼女に指図する。

彼女ははい、と頷いてゆっくりとイザベラが座る椅子に近付いていき、彼女の手の届きそうな距離でひざまづき顔を近付けた。

「（な……なんて大胆な）」

「（い、命知らずだわ……）」

他の侍女が堪らずに顔を覆う。やはり、仮病を使ってまで逃げ出すこの傍仕え役に新人を用いるべきでは無かったと。

しかし、イザベラは椅子から乗り出して侍女の顔を間近で覗き込んだ後、怒る所か逆に笑い出した。

「ふふ……あつはつはつは！ 一見怯えてる様に見えるが、その蒼い瞳は違う。そりゃもう“何されても覚悟は出来てる”目だ！」

「へ？ そ、そうですか？」

「ああ。それじゃなきゃ私がこんな近くで圧力掛けてるのに、普通に首なんか傾げてそうですか？ なんて聞いてくる召使なんていないわよ」

「は、はあ……」

確かにそうだ、と他の侍女達が心中で頷く。

もういつ何時逆鱗に触れるかわからないのに、そんな事出来る筈が無い。

イザベラはきょとんとした顔を浮かべるその侍女を見て、ニヤリと笑った。

「ふふ、私は私に脅える者が好きだけど、逆に新人のくせに妙に

度胸が据わってるあんた……気に入ったわ」

その言葉に、再び他の侍女達がぎよっとする。

対してその侍女はぱあっという位に顔を明るくさせて、

「あ、ありがとうございます！」

大きく頭を下げた。

「ふん、わかりやすい子だね。で、私に何が聞きたいの？ 言っ  
てもらんなさい？」

「はい。では」

侍女が口を開こうとしたその時、部屋の入口に控えた騎士がイザベラが待っていた人物の来訪を告げた。

「シャルロット……いえ、人形七号さまが参られました」

「漸く来たわね。あんた、残念だけど偉大なるガリア王女に対する  
質問はまた今度よ」

「うー……わ、わかりました」

侍女は残念そうに頷くと、一礼して他の侍女達の元へと戻る。そして、その2人にイザベラに見えない様にしてぶん殴られた。

一方その頃のプチ・トロワの前庭。

「宮殿に行くとは聞いてたが、まさか首都の中樞だったとはね……」

「あれ？ 旦那は『ヴェルサルテイル』を知らないんですかい？」

「まあ、この地には来たばかりだからなあ」

勇一は御者の男性と話しながら『プチ・トロワ』の宮殿を見上げる。

日本の城には無い美麗壮麗で、王族の威厳をこれでもかと民に知らしめる西洋風のお城。これでも小宮殿で、更にデカイ宮殿が近くにあるのだから、この国の国力は相当な物であろう。

「でも……やっぱり姫路城とか、松本城とかの方が俺は好きだな……」

「旦那、何か言いました？」

「いいや、何でも。それより、貴方の竜は何処に？」

見渡しても、火竜らしき姿は見えない。先程衛士に連れていかれたきりだった。

「ああ、飯に行かせたんです。腹が減ってはなんとやらですから」

御者の男性は事もなげに答える。

「ふうん……だけどいいんですか？　ここは他国の宮殿なんですよ？」

それに、よくよく考えて見ればトリスティンの竜がガリアへ。まるで遊びにでも行く様に何事も無く来てしまったが、普通であれば“領空侵犯”では無かろうかと勇一は思った。

すると、御者の男性がニヤリと笑った。

「実は、どうにもあの貴族のお嬢様はここガリアにある“花壇騎士団”のお方みたいですね。最初はおっかなびっくりで行きました。が、ガリア王室が許可証を出してくれて今ではこの通りです。おまけに飯も食わせてくれる……おっと、この話はトリスティンの貴族様方や王室には内緒ですぜ？」

「あ、ああ……それはわかりましたが、花壇騎士団って何ですか？」

「花壇騎士団ってのはガリアの王室が持つてる精鋭騎士団の事ですよ。確か、この『ヴェルサルテイル』にある花壇の花になぞらえて3つだか4つだか花壇騎士団があるって聞きましたぜ」

「ふむ……“騎士団”ねえ……」



中世に存在したテンプル騎士団とかドイツ騎士団を想像した勇一だったが、王室直属となると少し性格が違う。大学で習った事を思い出してみると、確か彼等は国家に縛られない独立した意思を持ち、後には自分達の領土まで得る様な巨大な組織だ。

それに対し、ガリアの騎士団はあくまで王室に属している事からそのような権限は無いのだろう……多分。

「（まあそれはどうでもいいとして……タバサがガリア王国の騎士団の一員だと？ 謎が減っては増えるな……）」

勇一は薄幸そうで、常に無理をしていそうなあの少女が抱えている物は自分の予想よりも大きい様に感じ始めていた。

暫く勇一が男性にこの世界の事を聞く等して会話をしていた二人だったが、『プチ・トロワ』の宮殿からタバサが出てきた所でそれは打ち切りとなった。

「終わった」

「そうか、どうだった？」

勇一が言くと、タバサは一枚の書簡を取り出した。

「サビエラ村で竜と吸血鬼が現れたから、退治する」

「は？ 今何て？」

「サビエラ村で竜と吸血鬼が現れた。だから退治しに行く」

「……今すぐにか？」

勇一が困惑しながら問うと、タバサはコクリと頷いた。そして勇一の返答を待たずに御者の元へ行き、火竜を連れて来させる。

何やら急いでいる様に見える。竜はともかく、吸血鬼が相手ならばそれなりに準備をしてからの方がいいのではないだろうか？  
にんにくとか、銀の弾とか木の杭とか……。

勇一がそんな事を考えている内に、連れて来られた火竜に御者とタバサが飛び乗り、後は勇一が乗るだけとなっていた。

「勇一、早く乗って」

「ああ……だがタバサ、準備とかはしなくていいのか？」

勇一はぎこちなく頭（うぶ）を垂れた火竜の背に登りながら聞いてみた。

タバサは一瞬逡巡した後、

「事情は行きながら話すから。とりあえず乗って」

「……………わかった」

宮殿から放たれる緊張した空気の中、3人を乗せた火竜は力強く空へと飛び上がる。

勇一が吸血鬼の存在に疑問を持つ事は、もう無かった。

第11話 プチ・トロワ(後書き)

御意見御感想、お待ちしております。

第12話 竜と吸血鬼 上(前書き)

ようやっとできた……

## 第12話 竜と吸血鬼 上

ここは再びガリア上空1000マイル。

勇一とタバサ、そして御者を乗せた火竜は、王都リュティスより南東500リーグにある目的地サビエラ村に向かって一路、南下の途上にあつた。

「なぬ？　じゃあ吸血鬼は銀の弾とか杭では死なず、更に人間と見分けが付かないと？」

「うん。というか、そんなに弱点があつたら私達人間から恐れられてない」

勇一は火竜の飛行姿勢が安定してから、タバサに任務の標的である『吸血鬼』の事を話した。

曰く、こちらの世界に伝えられている吸血鬼と姿形は一緒なのかとか、弱点は一緒なのか？　等だ。

だが、タバサは姿形は人間と一緒にある事や目立つた弱点は無い事、そして血を吸った人間を1人だけ手先として使役できる事等を勇一に伝えた後、前述の通り勇一の吸血鬼に対する想像をにべもなく否定したのだった。

「そうだったのか。そこはやっぱりお伽話だったんだな……。じゃあ、弱点はあるのか？」

勇一が少しがっかりしたように呟いた後そう聞くと、タバサは少し考えたあと、

「……吸血鬼は確かに人間に比べて耐久力がかなり高い。でも、不死身じゃない。頭を潰すか首を飛ばしてやっぱり潰すか、拘束して炎で燃やしてしまえばそれで終わり」

「結構えげつないんだな……」

「それだけ人間に恐れられてるから。油断したらやられるのはごっちだから、容赦しちやダメ」

タバサは真剣な表情で勇一に言った。それはまるで戦いに赴く寸前の、歴戦の戦士みたいな表情だった。

「……わかった。タバサ、くれぐれも言うが無茶はするなよ？」

勇一が苦笑混じりに言って、

「……………ん、わかってる」

タバサが頷く。どうにも薄い返事だったが、彼女はいつもこうなので仕方がなかった。

火竜は時節鳴き声を上げながら飛び続ける。

もうかれこれ半日以上も全力に近い速度で飛び続けているが、火竜は疲れた様子は見せていない。御者の自慢の竜だけあるな、と勇

一は思った。それから、標的の中に竜もいる事を思い出してタバサへと視線を向けた。

タバサは器用にも竜の背びれに寄り掛かって本を読んでいた。

「なあタバサ。今回退治する竜はどんな竜なんだ？ 勝てるのか？」

勇一は言ってからちらりと背びれの内の1枚に目を向けた。そこには、今回持ってきた小銃が1丁、肩掛けベルトを背びれに引っ掛けられた状態で置かれていた。半ば吊られている状態のそれは火竜が起こす振動でカタカタと揺れている。

勇一はその様子を一瞥して視線をタバサに戻すと、彼女は本を静かに閉じて、

「……正直な話、情報は入って来ていない。ただ不可解な情報はある」

「それは？」

「竜は人間を食らう者もいる。だから人間をさらうのも解る。けど、それは複数の人間をさらっておいて食べるどころか、危害を与える事すらしないんだとか。後、殆ど動かないでじっとしているって」

「……………それじゃ別に退治しなくてもいいじゃないか」

理由は全くわからないが、住民に危害が加えられていないのであれば退治する理由にはならない。寧ろ、過剰とも言える行為に思え



た。

しかし勇一がそう言うのと、タバサはすうっと目を細めた。

そして、

「確かにそう。でも、既に派遣された花壇騎士が1人殺されている」

その言葉に勇一はピクリと反応した。何だつて？ 殺された？

「……本当なのか？」

「ん、確かな情報。やったのは全身の血が抜かれていたから十中八九吸血鬼。見つかったのは竜の棲み家の途上にある森の中」

「……………」

「吸血鬼と竜の関連性はわからない。けど、吸血鬼によって二ヶ月前に人が襲われている。未遂に終わったけど、今度は騎士が殺された。そして竜も人間から恐れられている」

「……………どうするつもりだ？」

花壇騎士は御者から聞いた話だと、ガリア王国の精鋭中の精鋭だと言った。正体不明の竜はともかく、吸血鬼はそれを食ってしまつたのだ。勇一はそれを感じてか、唇を真一文字に結び、気を引き締めながら聞いた。

「竜はまだわからない。説得して帰ってくれるのならばそれがいいと思ってる。でも吸血鬼は違う。何としても捜し出して討伐する」

「……そうだな。俺も勿論最大限協力する。2人で協力すれば必ず勝てるさ」

勇一が拳を握りながら腕を突き出して言つと、

「協力………うん」

タバサは目を逸らしつつ、コクリといつもより小さく頷いたのだ。つた。

「旦那、ちよいといいですかい？」

相変わらず変わらない速度で飛び続ける火竜の上で、御者が勇一に話し掛けた。

「ん？ 何ですか？」

勇一は敬語で答えた。何故敬語なのかと言つと、それは御者が明らかに自分より年上で、尚且つ退役軍人であるからだ。御者は最初がいいと言ってくれたが、目上年上を敬う心意気がある勇一は変えずにいたのだった。

御者は勇一の傍の背びれに引っ掛けてあつた小銃を指差して、不思議そうな表情を浮かべていた。

「旦那、その銃は一体何て言うんですかい？　これでも俺たちは長い事軍にいたんで武器には詳しいつもりですが、そんな銃は見た事ねえや」

「ああ、これですか」

勇一はその小銃を手に取り、御者に見せた。

御者はそれを火竜の首に付けられた手綱を離して受け取ると、細部まで注意深く見始める。

「あの、手綱離しても平気なんですか？」

「大丈夫ですぜ。こいつと俺たちはもう15年以上の仲でさあ。それよりも……」

勇一の一抔の不安を他所に、御者は小銃を最後になめる様に見渡した後勇一に小銃を返した。そして再び手綱を取る。

「やっぱりわかんねえですぜ。マスケットに似ちやあいるが、火繩もフリント（燧石）も見当たらねえ」

「あはは……まあ、ちょっと……いやかなーり東の方にある俺の故郷から持ってきたもんですよ」

勇一は彼の疑問に苦笑交じりに答えるしか無かった。これはマル

ティニ・ヘンリー銃と言ってレバーアクション金属薬莖式の小銃ですよと言っても解る筈は無いし、“この世界に存在する筈の無い武器”をまだ学院外に詳しく教えたくは無かった。

ならば持っていないと言う選択肢もあつたが、危険な所での丸腰状態は自殺行為であるため、そこはやむを得なかった。

「ふーん……そうですかい。東方とはあまり連絡が取れねえとは聞いてたが、変わった銃もあるみたいですね」

御者はそう言ったつきり、それ以上は何も聞いて来なかった。単に興味が無いだけなのか、それとも勇一の放つ“空気”を察してくれたのか。どちらにせよ勇一は内心で安堵しながら、御者に対して頷いたのだった。

サビエラ村。人口350人程のこの小さな山間の寒村に着いた頃には、既に日は傾きはじめていた。

今は2人。御者は村から少し離れた所に2人を降ろすと、自らの愛竜と共に飛び去っていった。迎えには、彼の住居に伝書フクロウ

を飛ばせば1日以内には来てくれるようだ。

村に入るなり、既に追加の騎士が派遣される事を知らされていた村人達は、ジロジロと2人を見つめた。

「おいおい、今度の騎士さまは子供だぜ……」

「従者は見た事の無い制服を着ているが、平民の銃士かね？ 彼の方がよっぽど強そうに見えるじゃないか」

「こんなんでも本当にあの化け物達を追っ払って、あの人達を救い出してくれるのかねえ……」

2人を見る村人達は一樣に不安そうに溜息を漏らす。それもそうだ。村の近くに吸血鬼と竜という恐ろしい生物が2つも棲んでいると言っのに、頼りの騎士は平民を連れたか弱そうな少女なのだから。

そんな後ろめたい視線を四方八方から感じながら、2人は粛々と歩き続ける。

2人が目指していた村長の家は、段々畑が連なる村の一番高い目立つ場所に存在していた。

2人が通されたのは1階の居間。部屋の真ん中に設えられたテールの椅子に座りながら、勇一は息を吐いた。

「ふう……ああいう視線はどうも慣れないな」

任地先の満州や、終戦直前の朝鮮等で感じた視線。この村の住人達の視線はそこまで重くは無いものの、やはりいい気分はしない。

一方で、隣に座るタバサはケロリといつもの無表情であった。

2人を居間まで案内した白髪の人が良さそうな老人が2人が座るのを確認すると、対面に回り深々と頭を下げた。

「いやはや、遠路はるばるお越しいただき真にありがとうございます騎士様。私がこのサビエラ村の村長でございます」

「ん、私はガリア花壇騎士のタバサ。そして隣の男性は従者の勇一。タバサが紹介するのに合わせて、勇一は座りながら村長に軽く頭を下げた。本来は使い魔であるのだが、話がこじれるために従者と言う事にしてある。」

案の定村長は勇一の名前を聞いて口には出さないが、きよとんとした表情を浮かべた。

「気にしないで。早速だけど、詳しい状況は？」

「え……あ、はい。では……」

「待って下さい」

疑問を解決出来ぬまま先へ進まれ、少々困惑しながらも“立ったまま”説明しようとした村長に勇一が待ったをかけた。

「はい？ 何でございましょうか？」

「村長さんも座って下さい。その方が話がしやすいでしょう？」

勇一がそう言つと、村長はいきなり慌て始めた。

「い、いえ！ 花壇騎士様と同席する等とてもとても……」

本来ならばあらかじめ用意していた上座に座らせ、自分が下座に座ればいい。

……いいのだが、今回は2人共どっかりと下座に座ってしまったので、勇一の言葉に村長は余計に混乱してしまっていた。

だが、勇一はそれを見てタバサに意地悪げに微笑んだ。

「だつてさ。騎士様はどうお考えですか？」

タバサはその意図を察し、コクリと頷いて村長を見た。

「私は全然構わないから、どうぞ座って」

「い、いやでも……」

「座って」

「し、しかし……」

「座って」

「で、ですが」

「座って」

「……………やれやれ、騎士様には敵いませんな。では……………」

タバサの有無を言わさない攻撃に村長は負け、苦笑いを浮かべながら漸くタバサ達の対面にある椅子に座った。ここからは、真正正銘任務の話だ。

「実はですな……………正直に申しますと、まだ村に犠牲者は1人もでていないのですじゃ。……………亡くなったのは、数日前に王室から派遣されてきた騎士様ただ1人なのですじゃ」

「じゃあ、どうして騎士を呼んだの？」

タバサが疑問を投げ掛けると、村長の顔に静かに影が射した。

「皆恐ろしいのですじゃ。事は二ヶ月前、村に住んでおる1人の娘が吸血鬼に襲われましてな。その時は丁度空を飛んでいた竜の雄叫びで難を逃れたらしいのですが……………」

「その竜も棲みついた」

タバサが言うと、村長は頷いた。

「そうなのですじゃ。そして時を同じくして変な服と眼鏡を引っ掛けた帽子を着た人間達が村に食料を恵んで貰いに來ての。今まで何度か食料を恵んでいるのじゃが……………哀れ、さらわれて竜の奴隷にされてしまっているのですじゃ」



「どろろしてそう思うの？」

「勇気ある村の若者が見てしまったのですじゃ。竜の身体を懇切丁寧に布で拭いている所を……」

「（変な服……？ 丁寧に布で拭く……？）」

脇で聞いていた勇一は、村長の言葉に何か引つ掛かりを感じていた。

しかし、まだ村長の話は途中だ。

「それで、恐怖に耐えられなくなって騎士を呼んだ？」

タバサが村長の胸の内を代弁するかの様に言うと、村長はまた、静かに頷く。

「このままでは恐ろしくて森に入る所か、農作業も手が付かなくなる恐れがありましたからな。ですが、結果は騎士様も知る通り……」

二ヶ月ぶりに現れた吸血鬼によって、騎士は身体中の血を吸われて絶命した。それはタバサも勇一も既に知っている事実だ。

「私ども、力の無い村人には騎士様におすがりする事しかできません。どうか、この村を、強いては竜にさらわれた人々をお救い下さい……」

そう言って、村長はもう一度深々と2人に頭を下げた。勇一はタバサと目を合わせた後、頷いて席を立つ。

その時、小さな影が居間を駆け抜けて玄関へと向かって行った。

それに気付いた村長が、玄関へと消える前にその小さな影を呼び止める。

「こらエルザや。騎士様達にご挨拶もしないで外に行つてはいけな  
いよ」

その小さな影が止まり、こちらへと振り向く。

それは小さな女の子だった。5歳位の金髪を肩程までに伸ばした人形の様に可愛らしい女の子であった。

勇一は素直に彼女を可愛いな、と思った。変な意味では無く。

女の子は村長に挨拶しなさい、と言われてどぎまぎオロオロとしていたが、やがてペコリとお辞儀をするとそそくさと玄関脇の廊下へと消えていってしまった。

「彼女は？」

壁に掛けてあった長い杖を取ると、タバサは振り向き様に村長に言った。

「あの子はエルザと言いましたな。身寄りの無い子で、1年程前に寺院に捨てられていたのをわしが拾って育てているのですじゃ。聞けば両親が目の前でメイジに殺されて、ここまで逃げて来たのだと

か。恐らくはメイジの盗賊に襲われたか、無礼討ちにあったのか……」

「……………」

古今東西、動物の本能として『弱肉強食』と言う言葉が存在する。それは冷静な思考能力を有する人間にも当て嵌まり、時節盗賊や統制の取れていない軍隊による掠奪や強姦、虐殺等の惨劇が引き起こされる。どうやらこのメルヘンでファンタジーな世界でもそれは変わらない様だ。

勇一は惘然としながら村長の話を聞いていた。

「身体も弱く殆ど喋らない子でしたが、最近……ここ数日は少しずつ元気を取り戻して来ているようです。じきに笑顔も見せてくれるじゃろう……さて、それでは騎士様、よろしく願いますじゃ」

「うーむ……やっぱりどうしても引っ掛かるな」

「どうしたの？」

翌日の朝方、2人は竜の棲む場所へと続く森道を歩いていた。昨日は結局話が終わったのが夜になってしまっていたため、安全を考慮して一晩村長の家で休む事になった。従って、今日が調査始めの日だ。

本来ならば村人に色々と聞く所であるが、彼等は違った。

2人は竜への道のりを聞くと、直ぐにそこへと歩き始め、今こうして歩いているのだった。

調査始め速攻竜に突撃など無策も良い所だが、勇一は村長に聞いた話から、妙に竜は多分安全なモノ何じやないかと思っていた。

「いや、違和感と言うか半ば確信と言うか……」

「????」

タバサは歩きながら勇一をきよとんとした表情で見つめる。

「単刀直入に俺の考えを纏めた結果を述べると、村人達が見た竜は多分竜では無いと思う」

「じゃあ……村人は竜に似た何かを見間違えた？」

「そうだな。竜は1匹。変な服と帽子、眼鏡を付けた人間は複数となる」

勇一の言葉が止まる。視線の先、森と草原の切れ目の更に先にかを見つげ、勇一は走り出した。

「ゆ、勇一？」

タバサが何事かを聞く間もなく。仕方なしに走って追い掛けると、勇一は丁度森と草原の境目で止まって全貌の明らかになった“何か”を見ていた。

「あれは……」

タバサがそれを見てそれだけ言い、勇一を見た。

それは確かに竜に見えなくも無い。しかし、それは明らかに巨大で翼は水平に伸ばされ動かず、翼の後ろには赤い円が描かれている。

全身茶褐色で、身体に絵が描かれている竜など見た事も無い。それに足が細く先は車輪になっており、両翼に4枚羽の風車が付いている時点で生き物かすら怪しいものだ。それよりも、どこも無くあの『トラック』とやらと同じ匂いがする。だからタバサは勇一を見ていた。

「……勇一。あれはもしかして」

「ああ。そうだタバサ、あれは……」

まさかこれがこの世界にいるとは、勇一も思っただけいなかった。しかし、目の前に“それ”は夢想でも幻想でも無く確かに存在する。

それは。

「四式重爆撃機……俺の世界の、俺の国の飛行機だ」

「四式重爆撃機、通称『飛龍』。

この世界に存在する筈の無い、大日本帝国陸軍の最期にして最良の双発重爆撃機。

それが、勇一とタバサの前で静かに翼を休めていたのだった。

第12話 竜と吸血鬼 上(後書き)

ご意見感想待ってます！

第13話 竜と吸血鬼 中(前書き)

大変長らくお待たせしました……………



### 第13話 竜と吸血鬼 中

「勇一の世界の……ヒコウキ？」

タバサが首を傾げて言った。目の前の竜もどきが機械で出来ている事は理解できたが、あれがどのように使われるのか、そしてヒコウキと言つ言葉が何なのかまでは流石にタバサでも解らない。

「ああ、飛行機つて言つのは……要は人が作った空を飛べる機械だ」

「あれが？」

「そつだ」

タバサは飛行機 四式重爆撃機を興味深そうに見つめる。そして、

「……もっと近くで見たい」

「ああわかった。だが、少しここで待っていてくれ」

「どうして？」

「あれの持ち主が必ず近くにいる筈だ。彼等に話を聞かないとな」

軍帽を被り直し、服に着いた埃や葉っぱを払い落として勇一はゆつくりと歩き出す。

見渡した限りでは機の周辺に人影は見えない。しかし、もしかしたら機内に息を潜めているのかも知れず、不用意に近づく事は賢明では無い。

だが、勇一の今着ているのは陸軍の詰襟型の軍服。彼等がそれを確認すれば、取る行動は自ずと予想が付く。

そして、それは事実その通りとなった。

「ん……？」

機体まであと10m程という時、四式重爆撃機の胴体に設けられた乗降扉がガチャリと開き、人間の姿が現れる。

「あなた、まさか同じ軍人か？」

出て来たのは、真ん中に星を象った印の付いた飛行帽を被り飛行服を着た男性。彼は勇一を信じられないと言った様子で見っていた。

勇一はそれを見てニツと笑い、姿勢を正して右手を最適の角度に曲げて頭の脇につけて、

「はっ！　大日本帝国陸軍軍曹、本多勇一であります！」

「はっはっは、まさか俺達の他にもこっちに来てる奴らがいるとはな。全く、生きてみるもんだぜ」

高らかに笑う飛行服を着た男性。

「いや、自分も驚きましたよ。まさか重爆が停まってるとは思いませんで」

ここは四式重爆撃機の機内。真っ先に名を明かした勇一は今、こうして彼に導かれ機の中に入り、床に座って彼の祝福を受けていた。

「おっと、そういえばまだ名前を言ってなかったな。俺は飛行第62戦隊所属の山岡弘中尉だ。よろしくな」

「はっ、改めて自分は元第123師団第123輜重連隊所属の本多勇一軍曹であります」

「ふむふむ、君は輜重隊だったのか。ん、元……？」

聞いた後、山岡は怪訝そうに声の語尾の高さを上げる。

「は、実は……その前に中尉殿がこちらに来たのはいつですか？」

「そうだな……確か昭和20年の7月19日だな。それがどうした？」

「いえ、実は」

これで山岡は終戦を知らない事がわかった。それを踏まえて、勇一はゆっくりと順を追って話し始める。

8月15日に日本は連合国に無条件降伏し、戦争が終わった事。

自分はその前に内地に戻って来て、終戦後に連合軍の要請で武器引き渡しの為のトラック輸送任務に就いていた事。

その途中で部隊ごとこちらに飛ばされ、今までの生活と、最近その部隊の一部と合流した事。そして、ある任務を帯びてここに来た事。

全て話し終わると、神妙な表情で山岡は頷いた。

「そうだったのか……戦争はもう……。まあ、予想はついていたけどな」

「ええ……自分も終わりが近いとは」

「だが、まさか君がこちらの女子と同棲してるとは予想が付かなかったな。タバサさん、だったね？」

「なっ……!？」

山岡はぎよつとしている勇一の隣に座るタバサを見て言った。タバサは今まで物珍しそうに機内を見ていたので、会話には加わっていなかった。

そんな彼女は、山岡に呼ばれた事に反応して彼の方へと向き直る。そしてコクリと頷いた。

「彼と一緒に生活は楽しいかな？」

「……悪くない」

彼の問いに、タバサは数瞬遅れて答える。ほんのり僅かにタバサの頬に朱が差したのを、彼は見逃さなかった。

「ふむふむ。なら、もう一夜を共にしてしまったのかい？」

瞬間、ぶふツとタバサの横で盛大に噴き出す男がいた。

「ちゅちゅ、中尉殿！？　　なな何をそんな血迷ったことを！！」

勇一である。彼はタバサの比で無いくらいリンゴの様に顔を赤くして、完全に上ずった声色で叫んだ。

「ん？　　その様子だともう床を共にしたのか。見掛けによらず旺盛だな」

「ち、違います！　　彼女とは先程申した通り自分の生活の恩人でありまして、決してそのような意味では！」

別の意味では既に床は共にしているのだが、それは誰であろうと口が裂けても言えなかった。ばれれば勇一が今まで築き上げてきた何か、音を立てて崩れるような気がした。

「そのわりには顔が赤いようだが？」

「それは、中尉殿が変な事をおっしゃるからであります!!」

まるで戦場の真つ只中の様に必死の形相を浮かべている勇一を見て、山岡はニヤリと笑い、

「ああ、確かに冗談だ」

「は……?」

「いやいや、あまりにも君が過剰反応するもんだからさ。つい調子に乗ってしまったんだはっはっは!」

「……………」

脱力。勇一はタバサの隣に座り込みながら、階級が下だったらコイツぶん殴りたいと思った。そして隊の中にもう一人似た様な性格の人物を思い出して、更に脱力した。

「ねえ勇一……………」

そんな勇一にタバサが何やら神妙な表情をしながら話し掛けて来た。

「ん……………何だ?」

「一夜を共にするってどういう意味?」

「タバサ、君はまだ知らんでよろしい!」

「じゃあ俺が手取り乳繰り教えて」

「中尉殿も変な事言わんといて下さい！　つうか手取り乳繰りって何だよ！？」　　いい加減階級関係なくぶん殴るぞアンタ！？」

「乳繰り……？」

「それも知らないなら知らんでよろしい！」

四式重爆撃機内に、必死のツツコミを敢行する勇一の怒号が響き渡る。

重厚で厳格な筈の日本軍機の機内は、一転して瞬時に明るい空気に包まれていたのだった。

暫くして、とりあえずの落ち着きを取り戻した機内。

「はぁ……はぁ……話を变えましょう。中尉殿はどのようにしてこちらに来られたのでありますか？」

1人、息も絶え絶えになった勇一が切り出した。気になっていた事なのだが、まさかここまで下の事で山岡とタバサに翻弄されると

は思ってもいなかった。しかもタバサは素で聞いてくるので余計に夕チが悪かったりする。

「何だもう終わりか。だらし無いな」

「……………いい加減本当に力の限り怒りを込めてぶん殴らせて頂きますよ?」

勇一は苦笑いを浮かべながら血管が浮き立つ程右腕に力を込めて見せた。

「全く冗談だと言うに……………さて、」

山岡は胡坐をかき直し、冗談は終わりだとばかりに真摯な瞳で2人を見る。

「俺達は昭和20年7月15日の早朝、飛行場を飛び立った。四国沖の敵機動部隊に攻撃を加える為にな。だが、乗員数と武装を極限まで減らして軽量化した拳げ句に掩護戦闘機無しで突っ込めなんて言う無茶苦茶な命令だったけどな」

山岡は何か苦い物を思い出したのか、吐き捨てる様に言った。

当時、制空権制海権共に米軍に掌握されていた日本にとって、米機動部隊にたどり着く事は爆撃機はおろか、戦闘機でさえ至難の業であった。機動部隊の外周で優秀な電探に探知され、自分達より遙かに多い数の戦闘機に襲われ、それを辛くも潜り抜けても今度は対空砲火の雨あられ……………。

確かに、見てみれば側面銃座や上部銃座に機銃は無くやつつけ仕



事で造った様な蓋で閉じられている。いくら軽量化とは言え、これでは突っ込む人員を少しでも削減しようとしている様にしか見えない。乗員を2名程にまで減らし800kg爆弾を2発内蔵した、『ト号機』なる敵艦への突っ込み 特攻専用機が存在するのは終戦後に聞いた事があつたが、これはそれより酷いなと勇一は思った。

どう考えても、米機動部隊にこんな防御武装を減らした双発爆撃機が入り込める隙は無い、と。掩護戦闘機がないでは尚更だ。

「……………それで、中尉殿の機はどうなつたので？」

「うむ……………飛び立った直後だったなあれは。急に空が有り得ない位に明るくなつたんだ。そして目の前……………もう鼻先にどでかい鏡が現れてな。避けようも無くそれに突っ込んだらこの近くを飛んでいった訳だ。それで広そうなのこの草原を見つけたから1度状況確認のために着陸した。ま、夜だったから大変だけどな」

山岡は話の最後にさらつとそう付け加えたが、夜間着陸は相当の腕と経験を持った操縦士しか出来ない筈だ。この男、もしかしたら大変な操縦士なのかも知れない。

だが、勇一は話の中である1つの単語が引つ掛かった。タバサも同様なのか、2人は顔を見合わせる。

「ん、鏡……………？ タバサ、それって」

「うん。召喚の儀式と似てる」

勇一は思い出す。6日前のあの日、自分がこちらへ召喚された時の事を。その時も自分の前に現れたのは、高そうな装飾が施された

どでかい鏡だった事ははつきりと覚えている。ならば山岡中尉も……

「……中尉殿、信じられ無いかも知れませんが我々はもしかしたら召喚されたのかも知れませんか」

「召喚？ ああ、さっき言った魔法の一種の事か。だが、一体誰が俺達を召喚するんだ？ 君を召喚したのは隣にいる彼女だろうっ？」

そう言っつて山岡はタバサへ視線を向ける。向けられたタバサはんと小さく頷いた。

召喚魔法は召喚する“術者”がいる事が大前提だ。そして、召喚された“モノ”は“術者”の前へと召喚される。

「しかし……タバサ、術者が離れた所においても召喚は出来るのか？」

もう1度、タバサに聞いてみる。今この場で魔法についての造詣ぞうげいが深いのは、断トツで彼女しかないからだ。

しかし、タバサは珍しく難しそうな顔で考えた後、力無く首を振った。

「……ごめん、わからない。召喚魔法は基本的に術者の前に召喚する事しか出来ないから、お互いに離れた2点を繋ぐ魔法は私の知っている限りでは見つからない」

そこで一息ついたタバサは、次に山岡へ顔を向け、

「鏡はどんな形で、どんな色をしていたの？」

「そうだな……確か長方形をしていて、何の飾りつけも無い安っぽい鏡だったかな。後、枠は黒かったね」

タバサはふむ……と黙り込んでしまふ。どうやら自分の頭の中に詰め込んだ膨大な知識から、それに該当する魔法を探しているようであった。

だが、やっぱりタバサはお手上げとばかりに首を振るのだった。

「タバサ、鏡に何か関係があったのか？」

「うん。召喚する時に現れる鏡は個人による違いはあれど、大なり小なり装飾がついている筈。何の飾りも無く、まして黒色の鏡なんて文献でも見た事無い」

「ごめんなさい、と続けてタバサは山岡に頭を下げる。

「あー、いいんだいいんだ。君が謝る事では無いよ。来てしまったものはしょうがないからね……ま、むざむざ犬死にを強要する任務から逃げられたのは不幸中の幸いだったか」

苦笑いをしてタバサを諫めた後、山岡は司令の野郎ざまあみるとばかりに意地悪く笑みを浮かべた。ははは……と勇一も釣られてか苦笑いを浮かべる。

「……さて、他に何か聞きたい事はあるか？ 無いなら次はこっちからするぞ」

「あー、はい中尉殿。もう1つ聞きたい事があります」

「何だ？」

「中尉殿は魔法を信じるのでありますか？ いや、先程から妙に順応している様に見えまして……」

そういえばさっきから山岡は魔法を何の違和感も無く受け止めている様に見える。勇一もこの約1週間で嫌と言う程魔法を見てきたが、未だに少し、ほんのちよっぴり信じられ無い節はあったのである。

「魔法か……。まあ、最初は俺も信じられなかったが、俺達の助けとなってくれた村の子供が魔法を使えてな、それで色々見せてくれたんだ。手品かと思って上着脱がせて薄着1枚にさせて見たが、流石にその状態で何回も見せられると信じざるを得なくなったな」

山岡がそう言うと、タバサがピクリと反応を見せた。

「村の、子供……？」

「ああそうだよ。10に満たない女の子で金髪で、色白な肌をしているな」

「いやいやいや中尉殿、幼女脱がせちゃまずいでしょー!？」

「何、知的探究心が生んだやむを得ない犠牲と言う奴だ。大丈夫、大事な所までは脱がせてないぞ?」

「そうですか………」

平然と犯罪スレスレの問題発言を繰り出す山岡に、勇一は頭を抱えたくなった。ダメだこの中尉、早く何とかしないと。

しかし、タバサだけは今までに無い位真剣な表情で山岡に続ける。

「それで、どんな感じでどんな魔法を使っていた？」

「あー……確か、精霊が云々とか言った後に地面から木が生えてきたりしてたね。センジユウ魔法、だったっけか？」

瞬間、タバサの放つ気が明らかに変わったのが勇一にはわかった。タバサは静かにそう……、と呟く。そして傍らに置かれた自らの杖を握りしめた。

「タバサ……？　もしかして、犯人がわかったのか？」

10にも満たなそうな金髪で色白の女の子。そんな女の子を、確かに勇一は“村長の家”で見た気がした。

だが、まさかそんなと思う思いが勇一の判断力を鈍らせる。彼女を見たのはほんの一瞬であったし、人間にしか見えなかったじゃないか。

タバサはそんな勇一の表情を横目で見て、それから目を閉じて暫し俯いた。

そして、意を決した様に顔を上げて、

「……まだ確信を持っている訳じゃない。けど……中尉、その子に会う事は出来る？」

「ふむ……わかった。申し訳無いが、夜まで待って貰えるかな？」

「ん、それは全然構わない。勇一は？」

タバサは直ぐに頷いて、勇一に目をやった。

「ああ、全然大丈夫だ」

「そうか。じゃあこれで一旦解散しようか。タバサさんも色々この機体を見たい様だし」

勇一が答えたのを見た山岡は、そう言って立ち上がる。2人も続いて立ち上がるが、固い椅子にずっと座っていたためお尻が少し痛かった。

「軍曹、ちよつと外まで付き合ってくれないか？」

「私ですか？ 別に構いませんが……」

「よし、ならタバサさんはこの機体の近くにいてくれ。計器に触っては駄目だよ？」

「ん、わかった」

タバサを残し四式重爆の中から外に出た勇一は、山岡に釣られる様にして近くの森と草原の境界へとやってきた。

境界の程近い所に立っている大きな木の幹に、山岡は腕を組みながら寄り掛かった。

「ふう……この空気は美味しいな。軍曹、そう思わないか？」

「……そうですね。あの埃臭かった場所とは段違いです」

勇一が思い出しながら言うと、山岡は薄笑して、

「そうか、確か君は支那にいたんだっただな。俺はずっと内地だったからそっちは良くわからん」

「そうでありましたか。まあ……良い所では無いのは確かですよ」

さらさらと心地好い風に揺れて森の木の葉が優しげな音を奏でる。普段はピリピリとした緊張感に包まれていそうな軍服だが、今はこの景色と相まって妙な哀愁が漂っていた。

勇一はそれをうつすらと感じ取り、少しの拍を置いてそれと続けた。

「中尉殿、自分に話があるのでは無いですか？」

瞬間、山岡の眉がピクリと動き、次いでフツと笑った。

「何だ、わかっていたのか」

「ええまあ。それでなきゃタバサをわざわざ機に留め置かなくてもいいですし」

「まあな。……じゃあ単刀直入に言っぞ？」

「はい」

山岡は寄り掛かっていた腰を離し、四式重爆を一目見て勇一に視線を戻す。そして、

「お前達、ガリア王室の要請でここまで竜と吸血鬼退治に来たんだろ？」

「は……？」

一瞬、勇一は何を言われたのかわからなかった。

でも、目の前に佇む山岡中尉の表情は変わらない。

「冗談では無かった。そもそも、冗談で言える事では無かった。

漸くそれを理解した勇一は絞り出す様に声を漏らした。



「……………どうして、わかったのですか？」

「何、実はこの前もガリア王室からの使いとか自分は誇り高き花壇騎士団の騎士だとか言う奴が来てな。直ぐにピンときた」

「それって……………」

勇一は思い出す。確か、自分達より前に1人の花壇騎士が派遣されていた筈だ。そしてその騎士は吸血鬼のいる森へと赴き

翌日、身体中の血を抜き取られた死体で見つかった。

山岡中尉はその彼とその日会ったのだろう。

と、言う事はつまり

「中尉殿、まさか……………」

「まあな。ま、全ては夜になったらわかるさ。俺が聞きたかったのはそれだけだ」

そう言って、山岡は重爆へと戻りだす。

「ですが……………」

「あ、それともうひとつ」

追う勇一に山岡は立ち止まって、

「俺は吸血鬼じゃないぞ？ 屍人でもないし」

笑いながら言った。

そんな中尉に勇一もため息混じりに中尉を見返しながら、

「わかってますよ」

即答したのだった。

それから時間は過ぎて、太陽が森の奥に姿を隠し、辺りが暗くなると共に月が昇ってきた。

勇一とタバサは雑談等をしながらも、まあ静かに待っていた。たまに山岡が割り込んで小さな騒動を起こす事もあったが。

そして月が一際高く昇った頃

「そろそろか……」

そう一言呟いて、山岡が勇一達と共にいた重爆から扉を開けて外へと出ていった。それでも、残された2人は静かに待ちの態勢を維持する。

さらに少し時間が経って、外から聴こえて来るこちらに近づく“複数”の足音。

足音は扉の前で止まり、ガチャリと円形の扉が開かれる。

「やあ、待たせたね」

そう言いながら努めて明るい感じで入って来たのは山岡。続いて複数の飛行服姿の男達が機内へと入って来る。

そして、最後に入って来たのは

「…………お兄ちゃん達、また会ったね」

「君は…………村長の家にいた」

あの、金髪の幼い少女だった。

第13話 竜と吸血鬼 中（後書き）

ご意見感想、お待ちしております。

第14話 竜と吸血鬼 下1（前書き）

長くなったので分割します。

やっぱりグダグダ……

## 第14話 竜と吸血鬼 下1

「お兄ちゃん達……またあつたね」

開け放たれた扉から入り込む月の光が、幼い少女を優しく照らし、暗い機内にその姿を浮かび上がらせる。

その生まれ持った綺麗な金髪と透き通る様な白い肌が光を受け、まるでお伽話に出て来る天使の様に光っていた。

「……………」

勇一は暫し、少女の幼さなど関係無しにその姿に見惚れる。しかし、タバサはその右手に持つささくれ立った杖をギュッと握り締めていた。

「まあ、まずは自己紹介だよな」

その状況を見ていた山岡が声を上げる。続いて少女の後ろに立つ隊員達に暗に促す。

隊員達は頷き、

「はっ。私は爆撃手の相田軍曹であります」

「私は通信・航法手の加藤兵長です」

「後方機銃手の斎藤っス。階級は一等兵ッス！」

勇一達から見て右から順に簡潔な自己紹介をしていった。それに對して、勇一達も隊員達に軽い自己紹介を返す。

そしてそれが終わった後、皆の視線は必然的に件の少女へと注がれる。

しかし、多分こんなに注目されるのは始めてであろう少女は躊躇し黙って俯いてしまった。

「……………」

「どうした？　いつもはあれだけ元気だと言つのに」

黙り込んだ少女に、山岡が惚けた様に言った。直後、少女が顔を上げる。

「う、うるさい。少しきんちよーしただけよ」

少女はそう気丈に返しながらもまだ躊躇していたが、やがて覚悟したように勇一達を、そのすぐ隣にいる山岡を見る。

「……………エルザです」

「他に言つ事は？」

「う……………きゅ、吸血鬼やってます！」

山岡に促されて幼い少女　エルザが言い切った。

“吸血鬼”やっています。

少女のその言葉に、勇一はやはり……と言う思いと共に本当に吸血鬼なのか？　と言う疑念を抱いた。やはりその何処からどうみても“幼女”にしか見えない外見が、疑問の原因だった。

そう思っていると不意に勇一の右腕の服の裾が引つ張られ、

「油断しちゃダメ。前も言った通り、吸血鬼は人間と外見上殆ど変わらない」

タバサにそう言われてしまった。どうやら勇一の疑念を表情から察したらしい。

「はっはっは！　まあそう警戒しないでくれ。とりあえずは何故エルザが俺達と一緒にいるのか、彼女本人の口から説明してもらおうとするか」

続いて2人のやり取りを見ていた山岡が、エルザに近付きながら笑いながら言った。エルザはえっ、と言う表情で山岡を見上げる。

「ちよっ、説明はヒロシがしてくれる筈じゃ……」

「いやあそのつもりだったんだが、どうせなら当事者本人の口から



言った方が説得力あるだろ？」

「えええー……お話するの苦手なんだけど」

あからさまに嫌そうな顔を山岡に見せながらエルザは後じさる。だが、山岡はしゃがみ込んでエルザと視線を合わせると、穏やかな笑みを浮かべながら手袋を外し、その小さな頭を素手で撫でた。

「エルザは俺達と共に生きる事を選べた良い子だ。それを自分の口から魔法使いに説明しないと、また逃げる事になってしまうぞ？」

もしくは今ここで殺されてしまうかもな」

また逃げる。殺される。

山岡が笑みを浮かべながらも言った残酷な言葉に、小さな吸血鬼の表情が変わった。

「そ、それはヤダ！　まだ死にたくない！」

明確な拒否の姿勢を見せるエルザ。だが、それを見越していた山岡がエルザの頭を撫でながら、

「なら、出来るな？」

そう言うと、エルザは

「……………うん」

暫しの逡巡の後、そうコクリと頷いたのだった。

まるで駄々こねる子供をあやすかの様に見える山岡の行動。勇一には更にそれを通り越して、本当の親子の様にも見えた。横目でタバサを見遣れば、また珍しく驚いた様な表情をしているのが見えた。

エルザはそんな2人に構わずに1歩進み出ると、わざとらしくコホンと1つ咳ばらいをした。

吸血鬼と言えば、名を言うだけで恐れられる人間の、メイジでさえもそれを天敵と呼ぶに至った恐ろしい存在。

それが、まだ幼いとは言え何故このように人間と打ち解けているのか？

その疑問に答えるべく、エルザは勇一とタバサをじっと見つめると、ゆっくりとその小さな口を動かし始めた。

「私は2ヶ月前、計画通りに村の女の子を襲おうとしていたの」

……2ヶ月前のあの日、エルザはアレキサンドルと言う大柄な男を、吸血鬼のしもべである『ゲール』にして村の少女を襲わせていた。

しかし、後1歩と言う時に……エルザの頭の上を地響きと嵐が同時に起こった様な轟音が響き、驚き竦み上がった隙に少女に逃げられてしまった。

「幸い、逃げられちゃった子は直ぐに私の魔法でその時の記憶を消して、ばれない様にはしたんだけど……」

「疑問が残った？」

タバサがエルザの考えを補完するように口を出した。

「うん。だから次の日の夜、確かめに行ったんだ」

翌日、エルザは轟音が過ぎ去っていった場所へ向かって歩いていくと、そこには草原に見慣れない竜の様な物体と、見慣れない服を着た男達が明かりを取っていた。常人には良く見えない夜間でも、夜を主に活動時間とする吸血鬼は夜目がかなり利くため、はっきりと見る事が出来た。

「それが、ここに来たばかりの俺達だったと言う訳だ」

「うん。だから最初はね……」

エルザは自分の邪魔をしてくれたのがその竜の様な物体から出て来た数人の人間であると確信すると、様子を伺うでも無くいきなり襲い掛かるでもなく、まずは正面から接触する事にした。村の子供のフリをして、油断させてから食べようという魂胆だ。

「今まではそれで全部成功してきた。今回も成功する筈。私の魔法で眠らせればそれで全部終わる……そう思ってたの。だけど……」

そこまで言っ、エルザは自分の白く弾力のある頬を撫でた。その表情は何やら悔しそうにしかめっ面をしている。

そこで山岡が何かに気付いたのか、

「ああ、あの時か。いや、急に眠くなった所まで覚えてるんだが……やっぱり俺何かしたか？」

「したわよ！ 私グーで顔殴られるの初めてだったんだから！」

ぶんぶんと怒りだすエルザを何とか宥めすかして話を続けさせると、こうだった。

竜の様な物体に乗っていた人間達に接触し、サビエラ村からの食糧援助の橋渡し役となって彼らとの親交を深めていったエルザは、1ヶ月後について今まで隠していた牙を彼らに向けた。

作戦は夜彼らを魔法で眠らせて、その隙に血を頂くという単純明解な物。故に作戦は順調に進み、機内へ戻った彼らを眠らせたエルザはまず彼らの中で多分1番偉い山岡に近付いた。そして、ぐっす

りと眠って起きる気配のない山岡の首筋へ噛み付こうとして

直後、左頬に得体の知れない衝撃を受けてエルザは意識を失った。

「……一体何があったんだ？」

普通は魔法の力で眠らせた人間にそこまで接近して、成功しない筈がない。魔法にまだ疎い勇一でもそれは解り、タバサも首を傾げて怪訝な表情をしている。

それに対しエルザは、自分の左頬を指差しながら。

「おもいつきしグーでぶん殴られたのよ。……眠ったままのヒロシに」

なはは、と俺寝相悪いからなあとか感が鋭いからーとか言いながら笑う山岡。

啞然とする勇一とタバサ。

それらを見て溜息を吐きつつ、エルザは話続ける。

その翌朝、“何故か左頬を腫れさせて倒れていた”エルザは逆に彼らに治療されて事情を聞かれそうになってしまった。そこは何とか逃げ出したエルザだったが……彼女は諦めなかった。

翌日も翌々日もそのまた次の日更に次の日も、エルザは彼らを襲い続けた。

しかし、それは誰を襲っても1回として成功する事は無かった。

時には腕がエルザの白く可愛らしい顔を容赦無く殴り倒し、時には膝がエルザの柔らかい脇腹に無慈悲に突き刺さる。時には機内で寝ていた山岡の無動作から繰り出された拳が綺麗にエルザの鳩尾を貫き、悶えて吐瀉物を地面に撒き散らしながら撤退した事もあった。

いくら生命力の高い吸血鬼と言えど、まだ幼いエルザの身体にその予想だにしない反撃は耐え難く、勿論痛いのは嫌だし回復に余計な体力を使う。

10数回同じ事を繰り返したエルザは、前述の鳩尾攻撃を受けて遂に彼らの血を吸う事を諦める事にしたのだった。

「こんな感じで私は諦めて、ヒロシ達と普通に接触する事にしたの。ああ、思い出したただけであの痛みが……」

エルザはぶるぶると全身を震わせて思い出した物を消そうとする。危うくトラウマになりかける寸前だったようだ。

「そんな事があったのか……」

勇一は感嘆する一方、

「……でも、どうして魔法が効かなかったの？」

タバサは逆に山岡達に疑問を投げかけた。

「ん……、多分効いていたと思うよ。でも俺……後ろに立たれたりするの嫌いなんだよねえ」

豪快に笑う山岡。隊員達も俺達寝相悪いもんなと悪びれた様子も無く笑っている。タバサは珍獣でも見る様な目でそれを見ていた。

「……勇一。勇一の世界の人達はみんなこんな人を超えた様な事が出来るの？」

「いや……今知った限りでは家の隊長と中尉殿達しか知らない。というかそんなのがホイホイいてたまるか」

魔法を使われて眠っている人間に反撃された等、タバサでさえ聞いた事がない。戦闘慣れしているタバサでも、眠りの魔法……それも先住魔法にやられてしまえばどうなるかわかった物ではない。少なくともまともな反撃等はできない。

だが、目の前にいる異世界から来た住人はそれを跳ね返して今もこうして吸血鬼と生活している。

感が鋭いのか、それとも本当に“寝相”が悪いだけなのか。

「……………エルザ。貴女に聞きたい事がある」

そこまで考えたタバサが、再び声を発した。

「何？　メイジのお姉ちゃん」

「私の前に派遣された花壇騎士を殺したのは貴女？」

瞬間エルザの顔に……いや、タバサと勇一以外の全員の顔に影が指した。

「……………そうだよ。あのメイジは私が……食べちゃった」

「どうして？ 人間と仲良くしてたのに？」

その時、エルザの前に進み出る人物がいた。

「ヒロシ……………」

「それについては、俺から話をしよう」

「中尉殿が？」

「ああ、止められ無かった俺も同罪だったからな」

エルザを下がらせた山岡は、勇一とタバサの前に立つ。そして、  
今度は彼が語りだした



第14話 竜と吸血鬼 下1（後書き）

ご意見ご感想、本当にアドバイス批評等何でも言いで読者様の声を待っています。

第15話 竜と吸血鬼 終(前書き)

これにてタバサの初任務編は終了でございます。

## 第15話 竜と吸血鬼 終

「……事実だけを簡潔に言つとだな。確かにあの騎士はここにいるエルザが殺した。後ろから魔法で昏倒させ、貪る様に血を吸つて、な」

山岡が口から搾り出す様に言つと、タバサが彼を睨みつける。

「あなた達は、それを止めなかったの？」

「ああ、目の前の幼女が吸血鬼だなんて思えなくてな。皆が気付いた時にはもう手遅れさ」

白く、可愛い金髪の女の子が牙を皮膚に突き立て血液を啜る姿など、誰が想像出来ようか。少なくともお伽話でしか吸血鬼を知らない勇一や山岡達には、想像すら付かない。現にそれを間近で見た山岡達が硬直するのも、無理はなかった。

「遺体も隠したんだが運悪く見つかってしまつてな。対応を考えてる内にお前達が来たつて訳だ。まあ……まさか村人もエルザが吸血鬼だとは思っていない様だがな」

山岡が安堵した様に話す。確かに勇一も最初はエルザが吸血鬼だとは微塵も気が付かなかった。タバサは何か感じていたようだが、口に出さなかったと言う事は彼女もまた確信は持て無かつたのだらう。

タバサは睨みつけていた目を少し緩め、山岡からエルザへ視線を移した。

「吸血鬼は人に血を吸う所を見られるのを嫌う。なのに、何故あなたはまだ彼らと一緒にいるの？」

「そ、それは……」

エルザが目をキョロキョロと泳がせ、助けを求める様に山岡を見上げた。

「遺体を隠した後だ……エルザは俺達の前から消えようとした。吸血鬼は人間が牛や草を食べる様に、人間の血を“食べて”生きている。それがばれてしまった以上、もう一緒に居られないとな」

吸血鬼は人里に溶け込み、人間を“食糧”と見なして襲う。要は自分用の釣堀を家の庭に確保し、毎日1匹ずつ釣っているようなものだ。

だが、知能の低い魚と違い人間は高度な思考力を持つ食物連鎖の頂点にいる動物である。無論魚の様に簡単には食べさせてくれない。

そこで吸血鬼も屍人を使って襲わせたり、新たに街にやってきたよそ者を吸血鬼に仕立てて周囲の目を逸らさせたりと色々な対策を練っているが、1度見つかってしまったらそれで終わり。エルザの様な子供吸血鬼は正面から人間と戦う力は低く、他へ逃げるしか無い。人間側も吸血鬼と判って一緒に暮らす様な輩はこの世界ではまず、いない。

……………“この”世界では。

「俺達はエルザを引き留めた。そして言った。他の所で血を吸うよ  
り、今ここで“俺達の血を吸え”とな」

山岡が言った言葉に、タバサが眉をひそめる。

「……………それは正気で？」

「ああ勿論だ。それに何も打算無しで言った訳じゃない。別に吸血  
鬼だって、人が死ぬ位血を吸わなければいけない決まりは無いだろ  
う？　つまり、そういう事だ」

「だからって中尉殿……………他の皆さんも同じ意見だったの？」

勇一が問うと、山岡とエルザの後ろに座っている3人は一様に頷  
いた。

「……………だからって、血を吸い尽くされないとは限らない」

タバサが慚然として言った。はっきり言って歩の悪すぎる賭けだ。  
後ろからナイフを突き付ける凶悪犯に説法を説いても、刺されてし  
まうのが9割5分以上を占めるだろう。

しかしそれでも山岡は笑って、

「何だか放って置けなくてな。他の所を転々としながら、いつ君の  
様な魔法使いに退治される事に怯えながら過ごすより、血を吸われ  
てもいいからエルザの事を見ていたい。そう俺は思った。それにエ

ルザが応えてくれたからこそ、今も俺達はこうして生きている」

「ヒロシ……」

エルザの目尻にうつすらと涙が浮かぶ。それを見て、山岡はエルザに優しく微笑んで愛おしそうに頭を撫でる。そして、これまでに無い程真剣な表情でタバサに向き直った。

「……確かにエルザは人間を食べて来た。生きるために仕方ないとはいえ、それは人間社会から見れば許されざる事だ。しかし、これからは俺が責任を持ってエルザの面倒を見る。だからタバサさん……エルザを退治せず、このままにしてやってはくれないか？　この通りだ！」

同時に、山岡は正座をして床に両手をつきタバサに平伏す様に頭を床にこすりつける勢いで下げた。所謂、土下座である。日本男児として、1人の少女を心から案じる男としての意地が詰まった土下座であった。

「中尉殿……」

勇一もタバサの吸血鬼退治のお供として銃を片手について来た身であるが、ここまでされてはこの少女を撃つ気には毛頭なれなかった。軍隊だと階級上の者に土下座されてまで頼まれては、それがどんなに嫌でも聞くしかないだろう。しかし、そんな事は関係無く勇一は山岡の願いを叶えてやりたかった。

勇一は自分の右にいるタバサを見る。タバサは杖を持ちながら目をつむり、何やら考えている様子であった。エルザは不安そうに2人を見つめ、山岡は未だ頭を深く下げたまま。勇一も余計な事は言

わず、タバサの動向を静かに見守る事にした。

暫く、四式重爆撃機内に嫌な沈黙が流れ　　タバサが漸く目を開けた。杖を置き、山岡を真似てか正座の姿勢を取る。

「……わかった。エルザは退治しない。このままにしておく」

「……本当か？」

山岡がガバツと頭をあげ、タバサに詰め寄る。タバサは身を引きつつもコクリと小さく頷いた。

「そうかあ……ありがとな。恩に着るよ」

山岡は張っていた気が抜けた様に正座を崩し、子供みtainな純粋な笑みを浮かべる。その後ろでは、3人が静かにガッツポーズを取っていた。

1人、エルザだけが何だか意外そうな顔をしていたが、山岡が

「ほら、エルザもタバサさんに礼をいいな。命の恩人みたいな人なんだぞ？」

そう言つと、エルザはタバサに向かってぺこりと頭を下げ、小さな声でありがとうお姉ちゃんと言った。

タバサは相変わらずの無表情だったが、勇一は和気あいあいと話

している山岡達を見るタバサの目が、どこと無く笑っている様な気がした。

夜空には雲一つない清みやかな星空が、彼らを優しく見下ろしていた。

「タバサ……これからどうするつもりだ？」

山岡達を機内に残して外に出て来た勇一が、一緒について来たタバサに聞いた。王宮からの命令では竜と吸血鬼のどちらも退治してくる事と書いてあった筈だ。そののどちらもこなす事が出来なくなってしまうからだ。

タバサはマントの裏に括り付けてあった命令書が入った筒を取り出し、中から件の書類を抜き出して確認する。辺りは月光と星の光で包まれており、魔法の明かり無しでも読む事が出来た。

それを一字一句逃さぬ勢いで眺めたタバサは、クルクルと書類を巻いて筒に戻しマントの裏にまた括って勇一に向き直る。

「書いてない」



「何が？」

「退治しろとは書いてあっても……必ず殺してこいとは書いてない」

「……ああ、そういう事か」

そう、王宮の命令書には『退治』とだけ書かれており『抹殺』や『殺害』とは書かれていない。要はこの村から竜と吸血鬼がいなくなりさえすればいいのだ。

問題は、どこにこの竜 四式重爆を持っていくかだが、勇一には既に考えがあった。

「タバサ。少しここで待っていてくれるか？」

勇一はそうタバサに言うと、機体後部の乗降扉に近付き再び機内へと入った。機体後部には機銃の手入れをしている斎藤一等以外の乗員は見当たらず、勇一は機体前部に向かう。そして前部にある機長席に座って機器の手入れをしていた山岡を発見した。エルザは何故か山岡の股の上に跨がっていたが。

「中尉殿、少しよろしいでしょうか？」

「おう君か、何だ？」

勇一は手で山岡に少し後ろへ来て欲しいと言うサインを出す。察した山岡は頷き、エルザを機器に触らない様に注意した上でその場へ残すと2人は後部へと向かった。

乗降扉の近くで止まった勇一は、タバサが言った事を山岡に話した。

「と言つ訳で、ここを離れなくてはいけなくなります」

「そうか。まあ、俺達もそのつもりで今点検をしてた所だしな」

「そうでしたか……行く所はもう既にお決めで？」

「いや、それが全く決まっとらん」

「……………」

この人、本当に機長なのだろうか？

勇一は思わず突っ込んでしまいたくなる様な衝動に駆られながらも、本題である自分の計画を打ち明けるべく話を続ける。

「中尉殿、この機は後どれくらい飛べるのですか？」

「そつだなあ……基地を飛び立って直ぐにこちらに着て、わりかし直ぐに降りたからまだ3000はいけるな」

四式重爆撃機の特徴の一つに、大航続距離がある。今までの陸軍重爆撃機が軒並み2000km程の航続性能だったのに対し、この機は2倍近い3800kmもの航続性能を実現しているのだ。これにより海軍の陸上攻撃機には及ばないものの、陸軍重爆による太平洋上での雷爆撃作戦を可能にしていた。

山岡機の残り航続距離は約3000。燃料は大丈夫だ。勇一は第1関門をくぐり抜けた事に安堵し、更に重要な第2関門へと差し掛かった。

「じゃあ……この辺の、もしくはこの国の地図とかはありますか？」

正直、勇一は聞いてからかなり不安になった。無かったらこの計画の成功率は著しく低くなる。仮にあっても、確実に成功するとは言えないからだ。

だが、山岡の答えはその不安を多少なりとも杞憂に変えさせるものだった。

「地図か？ この世界の地図なら航法の加藤が村人に頼んで色々貰ってたな」

「本当ですか!？」

「ああ、加藤が持ってたから間違いは無い」

これなら、計画の成功率は上昇する。勇一は意を決して山岡に切り出した。

「ならば……自分から行き先についての提案があります」

「トリステインの魔法学院へ飛んでいく……？」

空が白み、夜が明けようとしている頃。勇一の計画を聞いたタバサが言った言葉がそれだった。表情は変わらないが、明らかに訝しんでいる。

「そつだ。こんな時に冗談は言わないぞ？」

「……本当にこれで学院まで飛んで行けるの？」

タバサの問い掛けに、勇一は自信を持って頷く。

「大丈夫だ。この飛行機なら飛んで行ける。何せ竜より速く、遠くまで飛べるんだからな」

それをタバサが聞いた直後、彼女の瞳に勇一にしか判らない輝きが生まれた。

「それはほんとう？」

「本当だ。嘘は言わない」

それはタバサが興味を持った時に生まれる輝き。人形だ、人形みたいと言われていた彼女の奥底に眠る、好奇心旺盛な少女の部分を表す輝き。トラックに乗せた時も、銃を撃って見せた時も、こちらの世界の話の話を聞かせている時も、その輝きは生まれた。今回もそう。

本当ならば勇一も喜んでタバサを乗せて一緒に魔法学院へと帰ってたかった。まだ魔法学院へ帰れる保証は無いが、そうしたかった。だが……今は自分の計画と今回の任務がそれを邪魔し叶わぬものとしている。

勇一はその輝きが消えてしまつのを後悔しながら、告げた。

「タバサ……本当だったら一緒に乗せていきたいんだが、今回は出来ない。理由は勿論わかるな？」

瞬間。タバサの瞳が、少女から冷酷な北花壇騎士の物へと変わる。冷たい氷の様な瞳が、勇一へと向けられる。

「……………サビエラ村の住民への事情説明と、王宮への任務完了報告をしなければいけない」

「そうだ。それはこの世界の住人であり、花壇騎士であるタバサにしか出来ない事だ。頼めるな？」

「無論。答えるまでもない。それが私の任務だから」

事件の後始末をして王宮に報告するまでが、ガリア北花壇騎士としての任務。吸血鬼の退治も龍の退治も出来なかったタバサとしては、寧ろここからが本当の任務と言えるかもしれない。

もう日が昇ろうとしている早朝の草原。見つめ合う2人の背後で、茶褐色に塗られた四式重爆撃機がその2基のエンジンを他人の助力

無しで起動させる。続いて勢い良くぶん回り始める4枚のプロペラ。辺りに響くは、プロペラが発する竜の咆哮の様な轟音。

「そろそろ出るぞー！」

後部昇降扉から、顔を出した乗員の勇一を呼ぶ声が聞こえる。

「じゃあ、頼んだぞ」

「任せて」

タバサの変わらない確かな返事を聞くと、勇一は小走りで昇降口へ飛び乗る。車輪止めも無しにブレーキだけで止まっていた機体、勇一が搭乗した事を確認した山岡によってゆるゆると緑色の絨毯の上を滑り出す。勇一は徐々に後方へ遠ざかるタバサに昇降口から身を乗り出して手を振った。

「軍曹、そんなに乗り出したら危ないっすよ」

「わかってるよ。だが、振りたい気分なんだ」

タバサは離れていく機体の尻を視界の中央に捉えたまま、その行く末を見守り続ける。

森と森の間をまるで滑走路の様に伸びる草原を、速度を速めながら駆け抜けてゆく四式重爆。これ以上は危険だと思った勇一は扉を閉め、取っ手に掴まりその時を待つ。数瞬後、大きな振動の直後フワリとした浮遊感。

四式重爆撃機……『飛龍』の愛称を持つその飛行機が、名の示す

通り異界の大空へと力強く羽ばたいた瞬間だった。

完全に見えなくなっても、タバサは飛行機という空飛ぶ機械が飛んで行った方向を眺めていた。

「……………」

顔には感情すら伺えない全くの無表情。任務に忠実で常に冷静沈着。他人からは魂の無い人形とも評された程の少女。

そんな彼女が、漸く空から地面に視線を移し言葉を紡いだ言葉は。

「……………手、振ればよかった」

大きく手を振って別れを惜しんでくれた勇一にただ見ているだけだった自分に対する、ちょっとした後悔だった。

飛行機が滑り出した瞬間から何度か自分も振りたい気持ちになっていたが、タバサはついぞ振る事が出来なかった。飛行機の勇姿に見惚れていたというのもあるが、何と言うか………凄く気恥ずかしかったのである。タバサはサビエラ村へと帰りながら、試しに笑顔で

大きく手を振っている自分を想像して、

「……………ッ!？」

慌てて首をぶんぶんと激しく左右に振ってそれを消し去る。氷の様だった無表情が、瞬時に風呂で上せた様に真っ赤になって動揺していた。駄目だ、こんな私じゃない。こんな事で動揺しては父様の仇を討てない。

何とか表情を元に戻して、タバサは再び村へ帰るべく、任務を遂行すべく歩を進める。だがそれでも、彼や彼の回りを取り巻く人間や機械を見ていると、完全に凍り付かせた筈の心が昂ぶるのを確かに感じてしまう。

「……………勇一」

この心の昂ぶり、胸から何か湧き出る様な昂揚感は何なのだろうか？　まるで数年前のまだ幸せだった頃。純粹で好奇心旺盛だったあの頃に戻ったかの様な気持ち。

戻ってはいけない。戻る訳にはいかない。この閉ざした心はそんな事では解けない。何の為に心を閉ざして、やりたくもない任務を顔色一つ変えずにやって来たんだ？　何の為にどれだけの侮蔑罵詈雑言を浴びせられても涙一つ流さずにやって来たんだ？　何の為に、恨み深き現王家の忠実な下僕に成り下がったんだ？

そう、すべては…………

「復讐のため……………でも」



わからない。

何故、僅か7日で自分の数年間の決意がここまで揺らいでしまっているのかが。現王家に復讐すると、復讐するために心を閉ざすとあの時誓ったのに。それが、彼等と話しているとどうしようもなく……

“虚しくなってしまう”

「っ……」

絶対に思ってはいけない事が更に浮かびそうになり、タバサは顔をしかめて思考を現実へと戻らせた。気付けばまた足を止めてしまっている。タバサはそれを確認して三度、サビエラ村へと歩き始める。

今度は冷静に何故こう思ってしまったのか、何故あんな心の昂ぶりを覚えたのか考えてみる。

しかし、結局村に帰り着くまでに根本的な答えが出る事は無かった。わかった事と言えば一つだけ。

それは、勇一と話す時と彼等が持つ物を見た時とでは心の高まり方が違うという事だけだった。

第15話 竜と吸血鬼 終（後書き）

何か意見があればいつでもメッセージ、感想欄へどうぞ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0235r/>

---

タバサの使い魔

2011年11月5日00時27分発行